
GAME NOVELS
ドラッグ オン ドラグーン2
DRAG-ON DRAGOON
OFFICIAL STORY SIDE
封印の紅、背徳の黒
2
映島 巡
Eishima Jun
Illustration
藤坂公彦
Fujisaka Kimihiko
SQUARE ENIX

GAME NOVELS

# DRAG-ON DRAGOON

# ドラッグ オン ドラグーン2

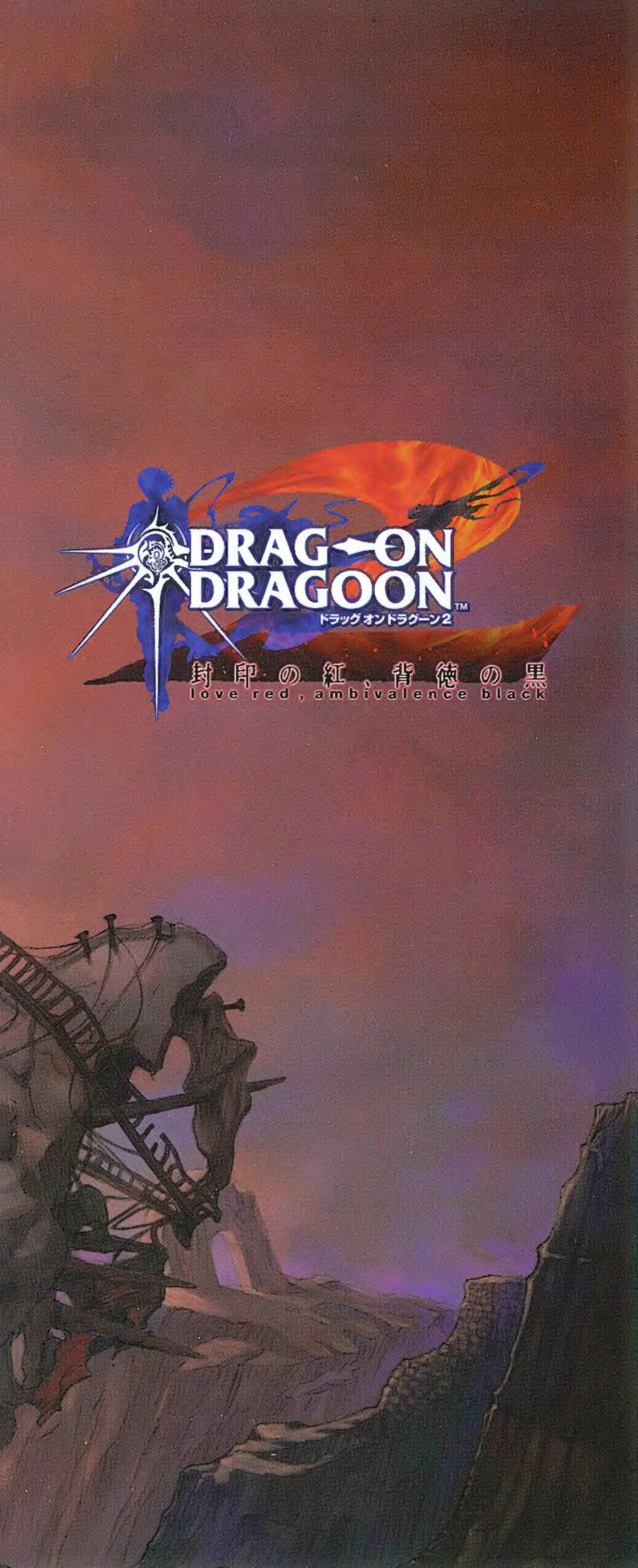
## 封印の紅、背徳の黒

OFFICIAL STORY SIDE

映島 巡

Illustration 藤坂公彦

スクウェア・エニックス


DRAG-ON DRAGOON™
ドラッグオンドラグーン2
封印の紅、背徳の黒
love red, ambivalence black


DRAG-ON DRAGOON
ドラッグ オン ドラグーン2
封印の紅、背徳の黒
love red, ambivalence black
Cover Illustration
藤坂公彦★Fujisaka Kimihiko
Cover Design
松木美紀★Matsuki Miki




GAME NOVELS
ドラッグ オン ドラグーン2
DRAG-ON DRAGOON
OFFICIAL STORY SIDE
封印の紅、背徳の黒
2
映島 巡
Eishima Jun
Illustration
藤坂公彦
Fujisaka Kimihiko
SQUARE ENIX.

GAME NOVELS

# DRAG-ON DRAGOON

ドラッグ オン ドラグーン2

封印の紅、背徳の黒

OFFICIAL STORY SIDE

映島 巡

Illustration 藤坂公彦

スクウェア・エニックス





GAME NOVELS ドラッグ オン ドラグーン2

# DRAG-ON DRAGOON 2
OFFICIAL STORY SIDE

## 封印の紅、背徳の黒




映島 巡
Eishima Jun

Illustration
藤坂公彦
Fujisaka Kimihiko

カバー・口絵・キャラクター紹介・本文イラスト／藤坂公彦
カバー・表紙・帯・目次・章扉・キャラクター紹介デザイン／松木美紀

# CONTENTS



















# CHARACTERS



**レグナ** ■ 蒼きドラゴン。幼いノウェを父親代わりに育ててきた。封印騎士団団長オローがノウェの養父になった後も常に行動を共にする。人間とは見下すような接し方をするが、ノウェにだけは心を開く。

**ノウェ** ■ 本編の主人公。蒼竜レグナに育てられ、今は亡き前封印騎士団団長オローを養父に持つ青年。竜語を操り、レグナといつも行動を共にしている。

**マナ** ■ 封印騎士団に虐げられている人々の解放を使命と感じ、行動している女性。それゆえ「聖女」と呼ばれ慕われている。冷静で意志の強い性格だが、その内奥には秘められた謎の過去がある。



**アンヘル** ■ カイムと共に戦ったレッドドラゴン。世界を封印するため自らを犠牲にしたが、再び孤独と闇の中からカイムに呼びかける。

**カイム** ■ 18年前に帝国と戦った英雄的存在。レッドドラゴン、アンヘルとの契約の際に「声」を失っている。アンヘルと共に世界を救った後、幼い少女を連れて旅立ったというが……。

**ユーリック** ■ かつて封印騎士団に所属していた常に黒仮面を被っている男。ノウェ、エリスとも騎士団の頃からの顔見知り。死神と契約していて「死ぬこと」を許されぬ体になっている。

**エリス** ■ ノウェとは騎士団で共に育った幼なじみの間柄。貴族の家系に生まれたが、幼い頃封印騎士団に預けられた。負けん気の強い性格と生まれながらの高い才能を持っている。

赤茶けた大地に砂塵が渦を巻いた。草も木も枯れ果て、魔物すら棲むのを厭うであろう地。ほんの数年前まで、この地が緑に萌えていたなどと誰が信じられようか。
「ここが……聖地？　こんな場所が？」
不毛の地を征く旅人にしては不似合いな、あどけない声だった。声だけではない。明らかに幼子とわかる背丈。
「ここよりほか、聖地の名にふさわしい地などありはせぬ」
応えた男もまた、旅をするには些か高齢に過ぎた。年端の行かぬ者と齢を重ね過ぎた者と。奇妙な二人旅である。
「足は痛まぬか、セエレよ」
「いいえ。僕のことは心配しないで」
セエレと呼ばれた幼子は微笑みながら老いた男を見上げた。
「そうか。ならば急ごう」
「ゴーレムを呼んだほうがいい？」
「いや。それには及ばぬ」
二人の歩調は思いのほか速い。目的を持つ者の確かさで、彼らは無人の地を行く。やがて、

セエレが小さく叫んだ。

「見えた！　あれだよね？　あれが女神の城なのでしょう、ヴェルドレ」

「いかにも。もう五年になるか……。あの城が帝国軍によって落とされたのは」

ヴェルドレが砂塵の彼方に霞む城を遠い目で見つめる。岩山と濠に囲まれた堅固な要塞。

あの場所に女神フリアエを匿ったときには、ここが破られることはあるまい、ここならば絶対に安全だと踏んでいた。封印の女神が危険にさらされるなど、あってはならぬ事態だった。

あの当時、世界は四つの封印によって「大いなる時間」をつなぎ止め、正しい姿を保っていた。四つの封印とは、森と砂漠と海の三カ所にある神殿の封印、そして封印の女神自身の命である。それらがすべて破壊されたとき「大いなる時間」はあるべき場所を失い、世界は混沌の淵へと沈む。ゆえに、三つの神殿と女神の命は何をおいても守らねばならぬものだった。

その封印を破壊しようと目論んだのが、帝国軍、天使の教会とも呼ばれる集団である。天使の教会を率いていた司教は、驚いたことにたった六歳の幼女だった。

あの赤い瞳……。ヴェルドレはぞくりと身を震わせた。

「繰り返してはならぬ」

微かなつぶやきだったが、セエレはその意味するところを悟ったのだろう。黙ってうなずく。

「思い出すだにおぞましい。赤い空、異形の群れ……。あのとき見た光景が忘れられぬ」

帝国軍によって神殿の封印は次々に破られ、ついには女神までもが命を落とした。空は赤く染まり、異形の群れが地上を跋扈（ばっこ）し、神話の語る再生の卵が出現した。再び封印を施すのがあと少し遅れていたら、世界は跡形もなく破壊されてしまっただろう。

「セエレよ。私は恐ろしい。恐ろしくてたまらぬのだ」

「ヴェルドレ？」

「五年前、私はとんでもない過ちを犯したのではないかと」

あのときはそれが最善の道だと思った。新しい女神には、人間を超える生命力と精神力を持つ者がふさわしい、と。

封印は世界をあるべき姿に保つ。ゆえにその負荷は大きく、女神が受ける苦痛は想像を絶するという。封印の負荷を分割し、女神の苦痛を少しでも軽減すべく造られたのが三つの神殿だった。しかし、帝国軍によって神殿はすべて破壊され、再建の見込みはない。生身の人間が受けるには、その負荷はあまりにも過酷に思われた。

だから、受け入れた。我を封印に使うがよい、という申し出を。

「しかし所詮（しょせん）、アンヘルは人ならぬ者。果たして、いつまで人間のために苦痛を背負っていてくれることか。いつ気まぐれを起こしても不思議はない」

もしも一方的に封印が破棄されてしまったら。人間の女神ならばあり得ないことだが、アンヘルは強大な力を持つ者。あり得ない話ではない。結果、世界は再び破滅の危機に瀕（ひん）することになる。あの終末の光景が再び現実のものとなってしまう。

ヴェルドレが歩みを速める。まるで何かにせき立てられるように。
「待って」
セエレが小走りに追いかける。廃墟(はいきょ)と化した城はすでに目の前だった。

崩れかけた城門をくぐり、ひたすら回廊を奥へと進んだ。最初は黴(かび)と埃(ほこり)の臭(にお)いに辟易(へきえき)したが、やがて慣れてしまった。
「大きなお城だったんだね」
物珍しげに辺りを見回していたセエレがつぶやく。ヴェルドレは固く唇を引き結んだまま歩き続けている。
「これから何をするの？」
ヴェルドレは答えない。何事かに気をとられていて、他の一切を受け付けられない、そんな横顔だった。セエレもそれ以上は問いかけず、黙って後に従った。二人の足音だけが回廊に響き渡る。
唐突(とうとつ)に回廊が終わった。ヴェルドレがようやく足を止める。
「ここは……中庭？」
セエレは訝(いぶか)しげにヴェルドレを見上げる。こんな場所で、いったい何をしようというのか。
しかし、それには答えず、ヴェルドレはつぶやいた。これは裏切りである、と。
「あの者たちにしてみれば、許し難(がた)いことであろう。なれど、世界が再び破滅の危機に瀕す

るくらいなら、私は裏切ってみせよう。幾度でも卑劣な行為に手を染めよう」
ヴェルドレがゆっくりとセエレに向き直る。
「契約者とはいえ、老いには勝てぬ。いつか私も世を去る日が来る。その日が来たら……私亡き後は、そなたが神官長となるのだ。契約によって時を失ったそなた以上に、次の神官長にふさわしい者はおらぬ。よいな」
セエレが戸惑いの表情を浮かべる。
「案ずるでない。後を託すのは、何年も先のこと。私とて、まだ為(な)さねばならぬことがある」
「はい……」
「封印騎士団も、まだまだ規模を拡大させねばならぬゆえ」
帝国軍との戦が一応の決着を見た後も、各地の戦火はいつまでも燻(くすぶ)り続けていた。それを鎮めるための組織が封印騎士団の前身となった。戦火がおさまった後は、封印の警護や神官の保護を目的として、神官長ヴェルドレのもと正式に封印騎士団が結成された。
騎士団員たちを束ねるのは団長のオローだったが、騎士団全体を動かす権限を持つのは神官長である。ヴェルドレ亡き後は、セエレがその権限を引き継ぐことになる。
「セエレよ。そなたにだけはすべてを話しておく。この先、私が何を為そうとしているのか。そのために私はそなたをここへ連れてきたのだ」
そして、ヴェルドレは語り始めた。

こうして、女神の城周辺は聖地として不可侵領域となった。人々の通行・居住は極端に制限され、廃墟であるはずの城は封印騎士団によって厳重に警護された。しかし、その警護にあたる騎士団員たちですら、自分たちが守っているもの、城の奥深くに隠されたものの正体を知らない。

そして三年。騎士団長直属の大隊が未踏の地へと進軍を続けていた。神託が下ったのである。彼の地に救世主あり、と。

その神託を受けたのは、神官職に就いたばかりのセエレであった。彼は三晩続けて同じ夢、白い光が黒い山を切り崩す夢を見た。直ちに占術師と魔術師が集められ、夢占が行われた。彼らの告げた地は東の渓谷地帯。その一部は直轄区として定められ、騎士団の管理下に置かれている。神官長ヴェルドレは、騎士団長オローに大隊を率いての探索を命じた。

直轄区という補給地を間近に持ちながら、探索は困難を極めた。渓谷の奥へと続く道は狭く、複雑に入り組んでいた。また、しばしば発生する雷と落石が行く手を阻んだ。

それでもオローは諦めなかった。部下に命じて渓谷の地形図を作らせ、何カ所かの崖を切り崩して駐屯地を仮設した。落石が多発する場所では飛空部隊を投入し、空からの探索を行った。探索隊はじりじりと、しかし確実に渓谷奥地へと進んでいった。

やがて彼らは、渓谷最深部に何者かの手が加わった場所を発見する。後に「忘れられた遺跡」と呼ばれるようになるその一帯には、何らかの建造物と思われる土台や、水路の跡が残されていた。また、渓谷と名がつきながらこの地には極端に少なかった水場もそこにあった。

水場の近くに陣を張り、付近の探索に乗り出そうとしていたときだった。彼らは、獣でも魔物でもない咆哮を聞いた。

疾風が舞い降り、兵士たちを薙ぎ払った。いや、風ではなく翼だった。黝い鱗に覆われた翼と鋭い鉤爪。

「ドラゴン……」

怯えた声で兵士の一人がつぶやく。が、すぐにそれは咆哮でかき消された。悲鳴を上げて、兵士たちが逃げ惑う。

ドラゴンは翼を広げ、大きく上体を反らした。炎を吐こうとしている。ドラゴンを間近に見たことがない者にさえ、その動作は明らかだった。この場にいる者すべてを焼き払おうとしている。棲み処を荒らされた怒りか、或いは人間そのものを嫌っているのか……。

不意に、ドラゴンの動きが止まった。ゆっくりと翼が畳まれる。次の瞬間、誰もが目を疑った。子供がいた。陽光を受けて蒼く輝く背に乗っているのは、紛れもなく人間の子供だった。

子供は身を乗り出すようにして、ドラゴンの顔を覗き込んでいる。遠目にも口許が動いているのがわかる。言葉を交わしているのだろうか。

「オロー団長閣下、危険です！　お下がりください！」

「構わん」

兵士たちの制止を振り切って、オローはドラゴンに歩み寄った。子供が不思議そうな顔を

して視線を落としてくる。一糸纏わぬその姿を見て、この子供はドラゴンによって育てられたのだとオローは悟った。そして、辺り一面を火の海にしようとしていたドラゴンを止めたのが、この幼い子供だということも。
「蒼き竜よ。知らぬこととはいえ、貴公の棲み処に足を踏み入れた無礼をお許し願いたい」
子供は首を傾げながら、ドラゴンとオローとを見比べる。どうやら人間の言葉は理解できないらしい。
「ならば去れ」
ドラゴンは面白くなさそうに首を振った。オローは瞠目した。
「何を驚いておる。人間の言葉が通じると思うたからこそ、話しかけてきたのではないのか？　全く人間どもは度し難いものよ」
「重ねての無礼、お許しを。時に、その子供は……」
オローの言葉が終わるより先に、ドラゴンは「いかにも」と答えた。そのときになってようやく、オローはドラゴンの声が自分の頭の中に直接響いているのに気づいた。
「この渓谷に捨てられておった。儂の庭に在る以上、赤子であれ何であれ儂の所有物。捨て置くわけにもいくまい」
この子だ。間違いない。この子供こそが神託の告げる救世主だ。オローは改めて子供を見上げた。子供は怯える様子もなく、オローを見つめ返してくる。
「この子を連れ帰ることをお許しいただけまいか」

ドラゴンの眼光が鋭くなる。が、構わずにオローは続けた。

「人の言葉もわからず、服を纏うことすら知らぬようだが、この子は紛れもなく人の子。ならば、人の手で育てねばなりますまい」

長い沈黙があった。ドラゴンの背で、子供が居心地悪げに身じろぎをする。言葉は通じずとも、今まさしく己の行く末が左右されようとしているのは感じているのだろう。

やがてドラゴンが吐き捨てた。

「幼き子を父から引き離そうとするか。……たかが人間の分際で」

その射竦めてくる強い視線をオローはまっすぐに見返し、左様、とうなずいた。

「我らはたかが人間に過ぎぬもの。しかし、この子はどうか。今のままではその人間にも、まして竜にもなれはせぬ。貴公はこの子を、地を這う駄竜となすおつもりか」

「ならば、貴様は何とする？」

「私はこの子の父となる。言葉を教え、剣を教え、人として生きる道を教えよう。翼なき竜は飛ぶ竜には敵わぬが、人として竜をも凌ぐ者に育て上げてみせよう」

この子供にはその力がある。この透き通った瞳の奥にあるものは、やがて人をも竜をも凌ぐだろう。オローはそれを見抜いていた。もはや神託などどうでもよい、この子を騎士として育ててみたいと願った。

よかろう、という答えが返ってくるまでに、再び長い沈黙があった。

「しかし、儂も共に行く。人の父は貴様に任せるが、竜の父は儂にしか務まらぬ」

「蒼き竜よ、必ずや貴公の信を守り義を尽くすことを誓おう」
「くだらぬわ」
それ以上は聞きたくないと言わんばかりに、ドラゴンは音をたてて翼を広げた。

それから十年の歳月が流れた。
蒼き翼を持つ竜に育てられた幼子が十年前に辿(たど)った道を、今、逃亡者として遡(さかのぼ)っていく者がいた。封印騎士団の根拠地から、忘れられた遺跡と呼ばれる渓谷地帯へ、十年前と同じ蒼き竜の背に乗って。
名をノウェという。彼を連れ帰り、育て上げたオローはすでに亡い。



# I

# 赫の章

1

初めて水の中に落ちたときのようだった。生まれ育った渓谷の水場で足を滑らせたときのことをノウェは思い出した。恐ろしいとは思わなかったが、五感のすべてに狂いが生じて、ひどく困惑したことを覚えている。
体が奇妙な具合に揺れ、視界が歪む。耳に入ってくるすべての音が遠い。あのときと同じだ、と思う。しかし、ここは水の中ではなく、空の上だった。どこよりも安心できる場所である蒼い翼の上だ。なのに……。
「小僧！　どうした！」
呼びかけてくる声がひどく遠い。
「大丈夫だよ、レグナ」
答えた声は、とても自分のものとは思えないほど掠れていた。頭がぐらぐらと揺れる。必死でしがみついていないと振り落とされてしまいそうだ。こんな状態で養父オローは敵と対峙したのだと思うと、鎮まりかけていた怒りが再燃した。が、すぐにそれは別の感情に変わった。
「父さん……」
ごめん、と声に出さずにつぶやく。亡きオローはきっと嘆いていることだろう。反逆者として封印騎士団を追われる身となった息子のことを。

父さん、ごめん。俺、父さんが望むような騎士団員にはなれなかった。
それでも努力したつもりだった。我が子同様に育ててくれたオローに報いるためにも。人の言葉を覚え、剣を覚えた。竜の子と蔑みの目を向ける団員たちの中で、なんとかして自分の居場所を作ろうと務めた。
俺、父さんみたいになりたかったんだ……。
でも、とノウェは思う。いつかこの日が来ることはわかっていた。心のどこかで気づいていた。十年前、オローに連れられてこの地にやって来たときから。
ふらつく頭をやっとの思いで支えながら、ノウェは背後を振り返る。騎士団の本拠地である大神殿が遠く霞んでいる。オローの顔が浮かび、また幼なじみのエリスの顔が浮かんだ。
「約束よ、ノウェ」
エリスの声が耳元に蘇る。結局、エリスとの約束も守れなかったのだと、ノウェは苦い思いを噛みしめた。

いつのころからだろう。エリスとの間に隔てのようなものが生まれたのは。
幼いころは違った。言葉がわからなくても、エリスとは何か通じ合えるものがあった。共に八歳、共にオロー以外に頼る者のない身だったからだろうか。
貴族の娘に生まれたエリスがわずか七歳で騎士団に預けられた理由をノウェは知らない。ノウェばかりでなく、他の団員たちも知らなかった。エリスは決してその理由を語ろうとはし

なかったし、唯一、事情を知っているはずの神官長も固く口を噤(つぐ)んでいたのである。

団員たちは勝手にその理由を「貴族の気まぐれ」と決めつけ、エリスに冷ややかな態度をとった。ただその裏にある、平民出身である彼らの屈折した思いまでは、ノウェには理解できなかった。

八歳になるまで人間を見たことすらなかったノウェである。いくら言葉を覚えても、そこに込められた様々な感情や思惑を読み取るまでには至っていなかった。

最初のうちこそ、子供特有の旺盛(おうせい)な好奇心に動かされて、自ら団員たちに近づいていったものの、いつも侮蔑(ぶべつ)と嘲笑(ちょうしょう)という壁の前に退散するしかなかった。やがてノウェは団員たちとの間にある距離を受け入れた。自ら話しかけることをせず、話しかけられたときは必要最低限の言葉でしか応じない。そう決めてしまうと、いくらか楽になった。

騎士団居住区の中では、オローとエリスさえいればいい。人としての生き方、言葉、剣といったものはすべてオローが教えてくれたし、仲間に対する思いや友情はエリスが教えてくれた。

エリスにしてみれば、ノウェはオロー以外では初めて心を許せる存在だったからだろう。うまく言葉を操れないノウェと根気よく会話し、団員たちの理不尽な振る舞いからノウェを守ろうと心を砕いてくれた。

二人で剣の稽古(けいこ)に励み、稽古が終わると日暮れまで遊んだ。十四歳で共に見習いとして騎士団に入った後は、遊ぶ暇もないほど忙しくなったが、それでも剣の稽古は変わらずに続け

た。
やがて、剣の腕でノウェがエリスを凌ぐようになると、エリスは言った。
「これからは、わたくしに勝ったからといって喜んではいけませんよ。だって、わたくしは女で、あなたは男なのですから」
それまでは、エリスがノウェを庇い、可能な限り守ろうとした。その立場が逆転したことをノウェは悟った。
「わかった。今日からは俺がエリスを守るよ」
「約束よ、ノウェ」
つかの間、エリスの瞳をよぎったものにノウェは気づいていなかった。

思えばそのころから、少しずつ何かが変わっていったのかもしれない。何より、エリスとノウェに対する周囲の態度が変化した。それまでの二人は同じように邪魔者扱いされ、同じように冷たくされてきた。しかし、騎士団入りしたことによって、エリスを認める者が現れ始めた。
団員見習いの中でエリスは最も熱心だった。封印と世界を守る者としての使命感に燃え、騎士団への帰属意識も強い。剣の腕も「貴族の気まぐれ」の域を十分に超えていた。出自に対する偏見を持つ者でさえ、この先、エリスが騎士団内でそれなりの地位を築いていくことを予測し得た。周囲の見る目が変わったのも無理からぬ話であった。

翻ってノウェはといえば、エリスと違って騎士団に対する執着心そのものが薄い。そこにあるのは、尊敬する養父オローに少しでも近づきたい、オローのようになりたいという願望だけだった。騎士団員として精一杯務めるという行動は同じでも、そこに至る動機がエリスとは全く異なる。周囲がそれに気づかないはずはなかった。

しかし、騎士団内での二人の立場に差がついていくことに不満を覚えていたのは、ノウェではなくエリスのほうだった。エリスは折に触れ、「騎士団員としての自覚」をノウェに促そうとした。彼女もまた気づいていたのである。ノウェの中にあるのが、ただオローへの敬愛であり、それがかえって周囲との溝を深めていることに。

「あなたは封印を守る者としての自覚が足りないわ」

エリスが最年少で正式団員となる少し前のことだった。一日の務めを終え、居住区に帰る途中、エリスはそう言ってため息をついた。

「自覚？」

騎士団の規律に従い、剣の腕を磨き、与えられた任務を全うする。それが騎士団員として為すべきこと。そもそも騎士団とは封印を、世界を守るためのもの、それはすなわち民を守ることに他ならない。ノウェはオローからそう教えられてきた。その教えを守るべく、日々努力を重ねている。それでまだ不足があるというのだろうか。

「ましてあなたは、救世主と名指しされた身なのですから」

「俺は救世主なんかじゃない。神官が何を言ったか知らないけど、そんなものになれるはず

がないし、なるつもりもない」
ノウェがそう答えると、エリスはさらに深いため息をついた。
「あなたの答えはわかっていたわ。でも、そうではないの。わたくしが言いたいのは……」
何だろう？　エリスは何が言いたいのだろう。最近ではほとんどなくなったことだが、言葉の意味を取り違えてしまったのだろうか。ノウェはエリスをじっと見つめる。エリスはもどかしげに口を開きかけたが、すぐに小さく頭を振った。
「いいえ。なんでもないわ」
「エリス？」
「早く帰りましょう」
何か様子が変だとは思う。口調や表情が少しだけいつもと違う。しかし、その違いが何なのか、いくら考えてもわからなかった。
オローが急死したのは、それからいくらも経たないころである。あの朝の会話を、ノウェは今でもはっきりと覚えている。
「どうした？　具合でも悪いのか」
オローが心配そうに尋ねてきた。エリスとの間に生まれた小さな齟齬のせいか、自分でも気づかぬまま憂鬱な顔になっていたらしい。
「いや、なんでもないよ」
「そうか。帰ったら久々に剣の稽古をつけてやろう」

それだけで、オローが自分の胸中を察してくれたのだとノウェにはわかった。ここ数日の気鬱がいくらか晴れるのを感じた。

しかし、それが最後の会話になった。その日、オローは出陣先で死んだ。後に言う直轄区襲撃事件。オローの隊は全滅、前神官長ヴェルドレも、神官長直属の魔術師部隊も、その場にいたすべての者が殺されたという。ゆえに事件の真相は三年経った今も闇(やみ)の中である。

オローの死によって、騎士団内でのノウェの立場はさらに危ういものとなった。新騎士団長のジスモアが傍目(はため)にもわかるほど露骨にノウェを嫌っていたからである。

騎士団内でノウェは完全に孤立してしまった。幼なじみのエリスただ一人を除いて、声をかけてくる者すらいない。ノウェの正団員昇格は遅れに遅れ、実に四年もの間、見習いのまま留め置かれた。

正式に騎士団員となったとき、ノウェは十八歳。同い年のエリスはすでに準級騎士として隊を率いていた。

2

直轄区と名のつく場所での任務は、二度あった。明命の直轄区と、気炎の直轄区。どちらも騎士団本拠地からさほど遠くはなく、振り返ってみればどちらも後味の悪い任務だった。とりわけ明命の直轄区はオローが最期を迎えた地である。皮肉なことに、そこでの魔物掃討が正団員としての初任務となった。

エリスの隊に配属されたものの、目的地まで本隊と同行することは許されなかった。レグナに乗って、空からの偵察を命じられたからである。見習いのころから、幾度となく命じられてきたことだった。偵察とは名ばかりの、実際には空からの先制攻撃を。

誇り高いドラゴンであるレグナが、時に空中兵器扱いされ、時に輸送機関扱いされるのを快く思っていないことをノウェは知っている。それでもレグナはノウェを背に乗せて飛ぶ。それがノウェにとって何にも代え難いひとときであるからだ。

空の上では自分以外の人間と顔を合わせることもない。辛辣な言葉を投げつけられたり、蔑みの視線を向けられたりもしない。地上では決して味わえない解放感である。オローの死後、ノウェにとって心安らぐ場所はレグナの翼の上だけになってしまった。レグナにもそれがわかっているからこそ、竜族の誇りをとりあえずしまい込み、「人間に使われる」状態に甘んじているのだ。

その鬱憤を晴らすかのように、いつもレグナの吐く炎は容赦がなかった。明命の直轄区でも、地上をびっしりと覆い尽くしている魔物たちを片っ端から灰に変えた。

魔物をあらかた焼き尽くすと、ノウェはレグナから降りて本隊と合流した。上官であるエリスに戦況を報告するつもりだった。もしも、本隊と合流するのがもう少し早いか遅いかしていれば、この任務は何事もなく終わっていただろう。

しかし、ノウェがエリスの姿を見つけたまさにそのとき、魔物の群れが急襲した。レグナの炎をやり過ごした一団が岩陰に隠れて隙を窺っていたらしい。

決して大群ではなかったものの、赤毛の大猿を思わせるホブゴブリンは力が強く、動きも速い。たちまち乱戦になった。誰もが目の前を跳び回る大猿を相手にするのが手一杯、とても隊列を保つどころではない。ノウェもまた、無我夢中で目の前のホブゴブリンを斬り続けた。

　気づいたときには、一人だった。逃げる魔物を追いかけ止めを刺しているうちに、本隊とはぐれてしまった。

　本隊はどこだろう。辺りを見回したときだった。切り立った崖の下に、洞窟と思しき穴が見えた。近づいてみると、入り口には鉄格子がはめられ、石畳の通路が内部へと続いている。騎士団の施設かもしれない。

「ノウェ！」

　洞窟の中を覗き込もうとしたとき、背後からエリスの声がした。

「ここにいたのね。無事で何よりです」

「エリスもはぐれたのか」

「ええ。でも、魔物はほとんど片づいたから大丈夫よ。あとは撤収するだけですもの」

　戻りましょう、と踵を返すエリスをノウェは呼び止める。

「エリス、ここはいったい？」

「門。明命窟の入り口よ」

　直轄区と同じ名を冠しているということは、単なる洞窟ではないはずだ。いったい中には

何があるのだろう。それ相応のものがあるに違いないが……。

そのときになって、ノウェは直轄区なるものがいかなる場所であるのか、何ひとつ知らないことに気づいた。

「直轄区……って、何なんだ？」

上空から見た魔物の数は尋常ではなかった。ここには魔物を惹きつけるような何かがあるのだろうか。

「直轄区とは、毒性を吐き出す忌まわしき五つの場所。その危険性ゆえに封印騎士団が直々に管理するように、前神官長がお定めになったらしいわ」

「毒性を吐き出す？　初耳だな」

「無理もないわね。わたくしだって詳しくは知りません。そもそも毒性を封じ込める『鍵』が作られたのだって……」

昔のこと、というエリスの言葉を嗄れた声が遮った。

「助けてくれ！」

鉄格子の隙間から枯れ木のように痩せた手が差し出されている。洞窟の中に人がいたのだ。一人ではない。よくよく見ると、いくつもの影が暗い洞窟内に蠢いている。

「頼む。助けてくれ。わしらを自由にしてくれ！」

助ける？　いったい何を言っているのだろう。不思議に思って、近寄ろうとしたときだった。エリスが強く肩を掴んできた。

「この者たちの戯れ言を聞く必要などありません」
「でも、この人たちは……」
「彼らは世界に破壊をもたらした元帝国兵。これは彼らに与えられた贖罪の機会なのです」
帝国兵という言葉が何を指すのかは知っている。十八年前、世界を破滅の淵へと導いた、狂信的な集団があったとオローが話してくれた。その戦で大切な仲間を失った、とも。
「あんたらも連中と同じか」
吐き捨てるような言葉とともに、差し出されていた手が引っ込んだ。若いあんたらなら、わかってくれると思ったのにと、別の声が言う。
「行きましょう、ノウェ」
強引に腕を掴まれ、半ば引きずられるようにしてノウェはその場を離れた。
「何が騎士団だ！　ただの人殺しじゃないか！」
罵倒する声に足を止めそうになると、エリスが強く腕を引っ張る。振り返ることすら許してもらえなかった。
「どういうことなんだ？」
エリスが歩みを緩めるのを待って、ノウェは疑問をぶつけた。エリスは無言のまま再び足早に歩き出そうとする。が、ノウェは前に回り込み、エリスの顔を覗き込んだ。
「贖罪ってなんだ？」
エリスは諦めたように口を開いた。

「直轄区がどういうところかは、さっき話したわね」
「ああ。毒性を吐き出す危険な場所で、厳重に守らなければならない……」
「その毒性を封じ込めるための供物、『鍵』が聖壇に安置されているのです。それは五つの直轄区でそれぞれ異なっていて、明命では確か花、聖花ではなかったかしら」
「それと、さっきの人たちにどんな関係が？」
「聖花の芳香は毒性を鎮める。この地が清浄に保たれているのは聖花があるから」
エリスはいったん言葉を切り、小さく息を吸い込んだ。
「その聖花は……命の火を吸って咲く花」
命の火？　人の命によって聖花が咲き、それが鍵として使われる……。さっき彼らは何と言ったか？　助けてくれ、と。だとしたら。
「あの人たちは人柱じゃないか」
「いいえ。彼らは選ばれし殉教者なのです」
あの枯れ木のように痩せ細った手。掠れた声。彼らは心底怯えていた。
「あれが殉教？　いやがる人々を力で押さえつけて犠牲を強いることがか？」
「慎みなさい！　それ以上、騎士団を侮辱したら、この場であなたを斬るわ！」
エリスの双眸は激しい怒りに燃えていた。いや、怒りだけではなく、もっと別の何か、今までに見たことのない何かがあった。それがノウェから反駁の言葉を奪った。騎士団の中で誰よりも近しい存在だったはずのエリスとの間に、いつしか埋め難い溝が生じていたことを

知った。

遠い、そう感じた。先に立って歩き出したエリスの背中がひどく遠かった。

殉教者という名の人柱の存在を知ったのが明命での任務なら、契約者の存在を知ったのが気炎での任務だった。気炎の直轄区は西の火山地帯にある。

「契約者は代償を払って魔物と契約を交わし、常人が持ち得ない力を手に入れた特別な存在なのよ」

「代償?」

「その人にとって、最も大切な機能をひとつ失うこと……だそうよ。噂によると、神官長セエレは契約の代償に『時間』を失い、いつまでも子供の姿でいらっしゃるのだとか。あくまで噂ですけれど」

濃い霧の中を慎重に進みながら、エリスはそう説明した。明命と同様、気炎での任務も魔物掃討だった。しかし、濃い霧が立ちこめていて、明命のときのようにレグナの力を借りることができなかった。上空からではどこに魔物がいて、どこに味方がいるのかが全くわからない。それでノウェはレグナと別れ、エリスの隊とともに直轄区の中心部へと向かったのである。

行軍中も会話を続けていたのは、互いの姿を見失わないようにするためだった。相変わらずエリスとの間には、小さな緊張感や違和感が残っている。だが、今はそれを気にしていら

れない。それほどまでに霧は濃い。仲間の声と軍靴の音とを頼りにゆっくりと進むしかない。すでに他の隊の姿は見えなくなっている。

時折、足許が小刻みに揺れた。この辺りは火山性の地震で地盤が安定しないのだと、誰かが説明する声が聞こえた。そういえば、霧が出ているというのに、辺りは蒸し暑い。地面から立ち上ってくる熱気もやはり火山性のものなのだろうか。

「契約者一人で、大隊を殲滅できると聞いたことがあります。小国の軍隊に匹敵する力とも。だからこそ、直轄区の守護者を任されているのです」

「守護者?」

「聖壇の『鍵』を守る責任者のことよ」

ああ、とノウェはうなずいた。『鍵』の警護に関する責任は、各直轄区の連隊長に一任されていると聞いた。

「そういえば、明命では守護者らしき人に会わなかったな」

気炎の連隊長とは今回の任務にあたって、大神殿で顔を合わせている。ノウェは、そのザンポという名の小男にあまり良い印象を持たなかった。鎧を思わせる筋肉質の体を見れば、確かに常人にはない力の持ち主だろうとは思う。が、彼の言動はあまりにも幼稚に過ぎた。子供が親の権力や財力に物を言わせて駄々をこねている、そんな印象を受けたのだ。

明命の守護者も似たようなものかもしれない。弱い者たちが犠牲になっていくのを平気で放置できる人物なのだ。直轄区がそういう場所である以上、その責任者が冷淡であったり、

傲慢(ごうまん)であったりするのも無理からぬ話だ。

「明命の守護者は行方知れずと聞いています。わたくしも理由は知らないわ」

会えなかったのはむしろ幸いだったのだろう。ノウェはそう思うことにした。

「それにしても、すごい霧だな。ここにも人が住んでるんだろうか。直轄区ってことは……」

エリスからの答えはない。だが、かえってそれが事実を教えてくれた。やはりここにもいるのだ。殉教という言葉で美化された犠牲者たちが。

できることなら、今回の任務では彼らに会いたくないと思った。ここでも彼らを見てしまったら、騎士団に対する不信感が決定的なものになる。養父オローがまとめ上げてきた騎士団を、そんな目で見たくなかった。

「遅い！　遅いんだよ！」

合流地点である炎洞塁(えんどうるい)の入り口にたどりついたノウェたちを待っていたのは、ザンポの怒鳴り声だった。耳障りな声が洞窟の奥にまで反響している。気炎の鍵はこの地下、炎洞塁の奥にあると聞いた。しかし、火山地帯という地盤の安定しない場所で、それもわざわざ地下に聖壇を設(しつら)えなくてもと思う。

「サボってもらっちゃ困るなあ」

別にサボっていたわけではない。途中、魔物の群れと遭遇したのである。霧の中、鼻の利く魔物と戦うのは骨だったが、なんとか片づけた。これも任務の一環なのだから、非難され

る謂われはなかった。
しかも、遅れているのはノウェたちだけではない。他の隊も、状況は似たようなものなのだろう。
「申し訳ありません。霧に行く手を阻まれてしまって……」
ふんぞり返っているザンポに、エリスが頭を下げている。彼女もおそらくノウェと同様、内心では不快に思っているに違いないが、そんな様子はおくびにも出さない。
「そう、この霧。これがヤバそうなんだよねえ」
素直に頭を下げられて満足したのだろう、ザンポのとげとげしい口調がほんの少し和らいだ。
「ここの奥まで続いてんだな、これが。鍵のことも気になるし」
ザンポが炎洞塁に目をやった。入り口の扉は開いたままになっている。明命窟のような鉄格子ではなく、堅牢な石の扉である。内側には、どこまで続いているのか定かではない通路が見える。一応、通路には明かりが点けられているようだが、霧のせいでその光は薄ぼんやりと霞んでいた。
「おい、おまえら！」
ザンポが怒鳴ると、扉の陰から恐る恐るといった様子でいくつかの顔が覗く。
「さっさと来い！」
足を引きずるようにして現れたのは、明命窟で会ったのと同じく枯れ木のように痩せ細っ

た人々だった。襤褸を纏い、つるはしや鉈などをそれぞれ手にしている。洞窟内で何か作業をさせられていたらしい。
「奥の様子を見てこい」
目ばかり大きい痩せた顔が一斉に驚きと恐怖の色を浮かべた。
「こ、この霧の中を？　我々に歩いていけと？」
「つべこべ言うなっ！　さっさと行ってこい！」
武器らしい武器も持たせず、どこに魔物が潜んでいるかわからない洞窟内を歩けと言うのか。むしろ、それは直轄区を守る騎士団の役目ではないのか。ザンポ連隊長、とノウェは叫んだ。
「無理ですよ。彼らには危険すぎる」
毒々しい赤で彩色された斧を振り立てて、ザンポが怒鳴った。
「こいつらは帝国軍の生き残りなんだよっ！　ここの毒性だって、帝国軍の反乱のせいなんだ。その罪を償えるんだから、感謝して欲しいくらいだね」
帝国軍との戦争があったのは、ずいぶん昔、ノウェが生まれる前の話である。そして、封印騎士団が結成されたのは、戦火が鎮まった後。この時間的なずれは何なのだろう？　もしや、都合の悪いことはすべて帝国軍のせいにしているのではないのか。
「おまえ、生意気！　おまえ、嫌い！」
ノウェの胸中を読み取ったらしく、ザンポが足を踏みならす。その様子は、駄々をこねる

子供そのものだった。こんな子供じみた人物に、人の命を左右するような職務を任せていいものだろうか。

「ここのことは、全部ぼくが任されてるんだっ！　おまえは黙ってろっ！」

そのときだった。

「お待ちなさい」

凛とした、女の声が霧の中に響き渡る。ノウェは思わずその声のほうを振り返った。見れば、騎士団員をかき分けるようにして、歩み寄ってくる者がいる。

あれは……誰だ？

淡い金色の髪に、赤い瞳。心臓が大きく跳ね上がるのを感じた。息が止まるのではないかと思った。紅玉を思わせる澄んだ色でありながら、底知れぬ深さを感じさせる瞳。

何かが自分を捉えようとしている。息苦しくてたまらない。逃げ出してしまいたい。この場から。だが、石になったかのように体が動かない。

「私は多少ですが、魔道の心得があります。彼らに代わり、私が奥を見てきましょう」

赤い瞳の女はノウェには一瞥もくれず、まっすぐにザンポに向かって言った。

「それで構いませんね」

その毅然とした口調に、さしものザンポも気圧されたのだろう。勝手にしろと答える声に先刻までの勢いはない。赤い瞳の女はさっさとその横をすり抜け、炎洞塁の中へと進んでいく。と、信じられないことが起こった。

「マナ様がいらっしゃるのなら、我々もお供します！」
ほんの少し前まで、炎洞塁の奥に行くのはいやだと怯えていた人々が一斉に走り出したのである。赤い瞳の女の後を追って。彼らの足取りには、もはや迷いも怯えもなかった。
「マナ？　あの女、何者なの？」
傍らでエリスが訝しげにつぶやいている。マナ。ノウェはその名を心の中で繰り返す。心臓を鷲掴みにされるような苦しさがまた襲ってくる。いったい何なのだろう。今までに経験したことのない感覚でありながら、奇妙な既視感がある……。
「ノウェ、どうかしましたか？」
「いや、なんでもない」
なぜかエリスには悟られたくなかった。ノウェは手のひらの汗を気づかれないように拭う。エリスはなおも探るような視線を向けてきたが、口を開こうとしないノウェに諦めたのか、黙って顔を背けた。
「へっ。手間が省けたよ」
ザンポの狡そうな声が耳障りでたまらない。
「これで殉教者の数が足りたな」
怒りがこみ上げてくる。思わずノウェは言い返した。
「殉教者？　生贄の間違いでしょう」
「ノウェ！　口を慎みなさい！」



そうだった。自分が反抗的な態度をとれば、上官であるエリスも責任を問われかねない。
わかっている。だが、止められない。さらに辛辣な言葉が口を衝いて出ようとした、まさに
そのときだった。地鳴りのような音が辺りの空気を震わせた。炎洞塁の奥だ。
「まさか、あの女が?」
畜生、とザンポが足を踏み鳴らす。
「ぼくたちも奥へ行くからな！　さっさとついてこい！」

炎洞塁の中は通路がやたらと入り組んでいた。おそらく侵入者避けの意味があるのだろう。
さっきの人々はこのことを知っていたに違いない。だから、奥を見に行けと言われて渋った。
下手に足を踏み入れれば迷うとわかっていたからだ。
ただ、内部はさほど広くはなかった。正しい順路を知っていれば、入り口から最奥までは
たいした距離ではないらしい。誰が見ても聖壇とわかる石造りの扉の前まで、さほど時間は
かからなかった。
「あの女、勝手に仕掛けを……」
見るからに重そうな扉がわずかに開いている。狭い隙間だったが、通れないほどではない。
ザンポが扉を強引にこじ開け、中に飛び込んだ。
「こら！　やめろ！　そこから一歩も動くな！」
マナが振り返った。彼女を炎が赤々と照らしている。城の尖塔ほどもある巨大な炎が。

「これが……聖火台？」
気炎の鍵である聖火。その赤さは生き血をそのまま炎に変えたかのようだった。
「動くなってって言ってんだろ！」
ザンポの声を無視して、マナは再び炎へと向き直る。
「イフリート！　この女を焼き殺せ！」
この男の契約相手はいったいどんな魔物かと、固唾を呑んで見守ったが、何も現れない。
「早く出てこいってば！」
ザンポが苛立ちの声を上げる。不意に目の前の空気が揺らいだ。陽炎かと思われたそれは、やがて見上げるほどの炎になり、ひとつの輪郭を形作った。炎を纏った巨人である。身の丈は天井を突き破りそうなほど、強大な力の持ち主であろうことは一目で知れた。ノウェは目を疑った。これほどの魔物がザンポのような幼稚な人間と契約を結ぶとは、俄には信じ難い。
「遅いじゃないか！　早くこの女をなんとかしろよ！」
ザンポが拳を振り上げて、イフリートを怒鳴りつける。が、応えはない。
「おい！」
黙ったままザンポを見下ろしていたイフリートが、ようやく口を開く。控えよ、と低い声が聖壇の間を震わせた。
「なんだと！」
「控えよと言うておる。気まぐれに契約を結んでしまったが、このイフリート、小童に使役

されるほど落ちぶれてはおらぬ」

侮蔑を含んだ声が頭上から降ってくる。ザンポは再び拳を振り上げかけたものの、イフリートの苛烈な視線にあわてて手を引っ込める。

「わ、わかってるよ。けど、この女をなんとかしないと……」

マナを指さし振り返ったザンポが、目を見開いて動きを止める。

「や、やめろ……。馬鹿な真似はするなよ」

魔道の心得がある、とマナは言った。そして、イフリートを使役しきれなかったザンポによって、彼女には十分な時間が与えられた。呪文の詠唱を終えるだけの時間が。

マナの右手が高く挙がる。次の瞬間、数百、数千はあろうかという夥しい氷の槍が聖火台に向かって降り注いだ。

轟音とともに聖火台に亀裂が入る。氷の槍はなおも降り続く。さらなる轟音と水煙、そして悲鳴。ザンポとイフリートの断末魔の声が、聖火台の崩壊する音に重なった。

「ザンポ殿！」

倒れ伏しているザンポにエリスが駆け寄った。イフリートの巨体がたちまち輪郭を失う。ザンポが助けを求めるかのように、聖火台に手を伸ばす。やがて、その手が力無く落ち、動かなくなった。

抱え起こそうとしたエリスの手が止まる。ザンポの体が青白い光に包まれたかと思うと、いきなり消滅してしまったのである。

「完全に……火が消えましたね。これでもう、みなさんは自由……」
聖火台の破壊を見届けて安堵したのか、マナもまたその場に頽れた。あの大量の氷の槍を降らせるために力を使い尽くしてしまったのだろうか。
「ザンポ連隊長が消えた……。いったい、どうなってるんだ」
「直轄区の『鍵』が失われると、守護者も滅びる」
抑揚のない声でエリスが答えた。
「そして、封印騎士団はその直轄区を失うことになるのよ」
「封印騎士団にとって、直轄区がそんなに大事なのか」
エリスが顔を上げ、きつい目でノウェを睨みつけてくる。
「世界にとって、でしょ！」
エリスは激しい口調でノウェの言葉を訂正した。
「そう、この女は世界の敵。世界に重大な危機をもたらしたのよ」
本当にそうだろうか。ノウェは今、エリスに賛同できない自分がいるのを感じた。

3

マナの処刑が決まったのは、気炎の鍵が破壊されてから三日後のことだった。異例の早さでの決定は、逃走の恐れがあるからだろう。それでなくても、マナが監禁されている土牢周辺では、捕縛される元帝国兵が後を絶たなかった。彼女を救い出すために決死の潜入を謀っ

た結果、である。警備の厳重さは、それまで炎洞塁に囚われていた彼らのほうがよく知っているはずだ。なのになぜ、そこまでして彼女を助けようとするのか。わからない、とノウェは思う。

わからないと言えば、マナの行動もまたノウェの理解を超えていた。『鍵』はこの地の毒性を鎮めるために必要なものだとエリスは言った。マナはそれを知らないのだろうか。

処刑の前夜、密かに土牢を訪れたのは、答えを得たいがためだった。

「こんな夜中に処刑を行うのですか」

土牢は炎洞塁の奥深くにあるため、全く陽が射さない。こうして見回りの者が手燭を持ち込んだとき以外は闇の中である。なぜ今が夜中だとわかったのだろう。ノウェの疑問を読み取ったかのように、マナが薄く笑う。

「昼間は足音や話し声が壁を伝わって聞こえますけど、今は聞こえません。夜中なのでしょう？」

ノウェはそれには答えずに、マナをじっと見つめた。手燭の明かりに浮かぶ顔には、不安も動揺も見られない。もちろん、自分の行いを悔いる様子など微塵もない。

「なぜ、気炎の『鍵』を壊した？」

「きみも見たでしょう。あの聖火台を維持するために犠牲になっている人々の姿を」

確かに見た。ここ気炎の直轄区だけでなく、明命でも。しかし……。

「鍵はこの地の毒性を鎮めるためのもの。では、私が鍵を壊した後、この地はどうなりまし

たか？　騎士団の言うことが真実ならば、今ごろはその毒によって、きみも私も死んでいるのではないかしら？」
「それは……」
「でも、きみも私も生きています。あれから三日は経っているはず。でも、毒性が吐き出される気配はない。つまり、初めから鍵など必要なかった。だとしたら、封印騎士団が定めた直轄区制度こそが人々を苦しめる害悪でしょう。違いますか？」
ノウェは答えに詰まった。マナはなおも畳みかける。
「封印騎士団が守ろうとしているのは、世界ではなく己の利権なのではありませんか」
違うと叫びたかった。言下に否定したかった。が、情けないことにその根拠がない。苦し紛れに口を衝いて飛び出したのは、全く違う言葉だった。
「言葉を慎んだほうがいい。あんたは今、騎士団員を前にしてるんだ」
口にした後で、胸の奥に苦いものが広がった。こんな恫喝まがいのことを言いたかったわけじゃない……。
「私は、人々に自由と笑顔が戻ればと願っているだけです。それが罪ですか？」
ノウェは黙って踵を返した。それ以上、聞きたくなかった。足早に土牢を離れた。鉄格子が完全に見えなくなると、手燭を消して全力で走った。
なんてことだ……。彼女の言ってることは、父さんと同じじゃないか。
まだ幼かったころ、オローに尋ねたことがある。世界を正しい姿につなぎ止めている封印

とはどこにあるのか、と。わからないとオローは答えた。

「封印がどこにあるかはわからないが、それを守るのが我らの役目だ」

「どこにあるかわからないものを、どうやって？」

「封印は、この世界に生きる人々のためにある。つまり、人々を守るのが封印を守るのと同じことなのだよ。わかるか？」

民を守れ、民のために剣をとれ。口癖のようにオローは言った。マナは人々のために鍵を壊した。両者のどこが違うというのだろう。わからない。

暗い炎洞塁の中を、ノウェは闇雲に駆け続けた。

何かが間違っている。その思いは翌日になっても消えなかった。それどころか、マナが刑場に引きずり出されるのを見るにつけ、ますます強まっていった。

「これより処刑を開始します」

エリスの声が辺りに響いた。支柱を立てただけの簡単な火刑台に括りつけられたマナは、静かな表情でまっすぐに前だけを見ていた。その足許に薪が堆く積まれていく。

火刑と斬首のどちらを選ぶかと問われたとき、マナは「より時間のかかるほうを」と答え、火刑を選んだのだという。

「言い遺すことは？」

松明を手にしたエリスがマナに尋ねる。その声に満足そうな響きが感じられるのは、罰す

べき者を正しく罰しているという確信がエリスにはあるからなのだろう。でなければ、自らの手で生きている人間に火を放つなど、できようはずがない。
マナはひたすら沈黙を守っている。エリスがマナの顔を覗き込む。マナの表情は変わらない。エリスの口許が動いた。何を言ったのか聞こえなかったが、さようなら、と告げたようにノウェには見えた。
ゆっくりと後ずさると、エリスは松明を薪の山へと投げた。乾いた木はたちまち松明の火を吸い込んで激しい炎を吐き出す。炎は薪を舐め尽くし、支柱へと迫る。
たまらずノウェはマナから目を逸らす。その視線の先にエリスの横顔があった。燃えさかる炎に照らされたその顔には、微笑が浮かんでいる。残酷な笑みだ。人間が生きながら焼かれているというのに。それが断罪というものなのか……。
エリスからも目を逸らそうとしたときだった。彼女の横顔から笑みが消えた。代わりに浮かぶ戸惑いの表情。ノウェは再びマナへと視線を戻した。
今にも支柱を呑み込もうとしていた炎が不自然な形に揺らめいている。まるでマナを避けようとするかのように。マナがゆっくりと視線を上へと引き上げていく。固く結ばれていたはずの唇が小さく動いた。
呪文を詠唱しているのだと気づいた瞬間、炎が四散した。轟音とともに大地が爆ぜる。真っ白な霧が噴き出す。爆風が周囲にいた者すべてを薙ぎ払う。ノウェは咄嗟に地面に伏せ、身を庇った。

何が起きたのかは想像がついた。マナが逃走したのだ。しかし、辺りを覆い尽くす白い霧が視界を阻み、それ以上のことはわからない。女が逃げました、と誰かが叫ぶ。
「逃がすな！　追え！」
だが、自分の手足さえ見えないほどの濃霧である。誰もが地割れに足を取られないようにするのが精一杯、すぐに行動に移れる者などいなかった。

行方をくらましたのはマナ一人ではなかった。炎洞塁とその周辺に囚われていた元帝国兵たちも揃って姿を消していた。彼らは混乱に乗じて騎士団の艇を盗み、逃走したのである。途中、乗り捨てられた艇が発見され、大凡の足取りは掴めたものの、肝心のマナを捉えることはできなかった。
捕捉寸前にまで追い詰めても、周辺の村人たちが挙ってマナを匿い、逃がしてしまうのである。騎士団を足止めするために、捨て身で斬り込んでくる者さえいる。
「彼女のやったことは本当に悪なんだろうか」
自分たちのほうが間違っているのではないかという疑念が頭を擡げてくる。が、そんなノウェをエリスが一喝した。
「何を寝ぼけたことを言っているの！　放っておいたら、あの女は他の直轄区も狙うはずです。食い止めなければ」
「そう……だよな」

騎士団員である以上、それが課せられた義務だ。エリスは正しい。正しいはずだ。にも拘わらず、マナが逃げ延びてくれればいいと心のどこかで考えている。人々に自由と笑顔が戻れば、そう言った彼女の瞳が忘れられない。あの瞳に宿った強い光が。

追跡劇が長引くにつれて、胸の奥にわだかまるものが次第に重く苦しくなっていく。いったいこれは何なのだろう。疲れているのだろうか。

だから、騎士団本拠地からの伝令が、ノウェ一人に帰還命令が下ったと告げたときには正直なところ安堵した。

「反逆者追跡の途中経過を報告せよとのことです」

「ノウェ一人に……ですか」

「大至急、と」

エリスはつかの間、眉をひそめたが、すぐにうなずき返した。

「わかりました。ジスモア団長閣下にも何かお考えがあるのでしょうね。直ちにノウェを帰還させます」

要するに、一刻も早く状況を伝えよということなのだろう。どんな艇も、全速で飛ぶレグナには及ばない。

「ノウェ、わたくしたちはこのまま追跡を続けます。気をつけて」

わかったと短く答え、ノウェはレグナに飛び乗った。それが、同じ騎士団員としてエリスと交わした、最後の会話になった。

大神殿奥に位置する騎士団長の居室に足を運ぶのは久しぶりだった。オローが生きていたころは当たり前のように出入りしていたが、露骨に自分を嫌う者が部屋の主となった今ではさすがに敷居が高い。しかも、周辺には常に側近たちや警備の者たちが目を光らせている。オローのころよりも近寄り難くなったと感じているのは、実はノウェに限った話ではなかった。

しかし、今日はどうしたことだろう。妙に人が少ない。もしや他の直轄区にも何か異変があって、警備の兵士たちはそちらに駆り出されているのだろうか。だとしたら、今回の急な帰還命令も納得がいく。

「思いのほか早かったな」

嫌味でも皮肉でもない、至極当たり前の言葉をかけられて、ノウェは微(かす)かな違和感を覚えた。が、今は任務が先である。

「はっ。反逆者追跡の報告を……」

「そうあわてるな。休む暇もなかったのであろう？　ちょうど今し方、神水の直轄区からの清水が届いたところだ」

見るからに冷たそうな水の入った陶製の杯を受け取りながら、ノウェはますます面食らう。ジスモアに労(ねぎら)いの言葉をかけられるなどあり得ないはずだった。

「オローも好きだった清水だ。まずは喉(のど)を潤すがよい」

言われるままに杯を飲み干す。実際、よく冷えた水は喉に心地よかった。神水の直轄区から届いたとジスモアは言ったが、そこでもやはり、人柱として命を奪われている人々がいるのだろうか。そこに考えが至ると、美味だったはずの清水が俄に苦く感じられてきた。

「赤の他人でありながら、貴様とオローはよく似ている。反吐が出そうなほどにな」

ノウェはまじまじとジスモアを見る。悪罵に驚いたのではない。今さら、そんなものに驚きはしない。むしろ、労いの言葉こそが不自然なものであったと改めて気づく。

「父代わりというだけで、これほど似るとは。目障りでたまらぬわ」

何が言いたいのかと詰め寄ろうとしたときだった。突然、視界が揺れた。握りしめていたはずの杯が転がり落ちる。

「もう効いてきたのか？　弱いな。竜の子ともあろうものが」

ジスモアが嘲笑う。あの水には毒が入っていたのだ。

「この程度ならば、わざわざ余が手を下すまでもなかったか？　いやいや、禍の芽は早々に摘んでおくに限る」

視界だけでなく、足許までもが大きく揺れる。膝が折れた。咄嗟に手をついて体を支える。が、それすらも危うい。

「オローは隻眼の男と対峙するまで持ち堪えたというに。その息子はこの様か？」

ノウェは必死で顔を上げる。隻眼の男？　持ち堪えた？　ジスモアがゆっくりと剣を抜くのが見える。

「まあ、いずれにしても愚か者よ。差し出された杯を疑いもせずに飲み干すなど」

三年前の直轄区襲撃事件には、こんな裏があったのか。出陣しようとしているオローに、ジスモアは毒の水を飲ませた。その結果、オローはまともに立っていられないような状態で敵に襲われ、斬殺された……。

頭に血が上るのを感じた。全身を突き破るのではないかと思うほどの怒り。揺れていた視界がただただ白くなる。

ノウェの中で、何かが蠢き、爆ぜた。手を、足を、何かが突き動かす。

鈍い衝撃が伝わってくる。剣と、剣でないものが投げ出される音。

「貴様……！」

ジスモアの声で我に返った。いつ、自分は剣を抜いたのだろう？

「どこに……そのような力が」

剣を握ったままの腕が床に転がっている。ジスモアが右肩を押さえているのが見える。本来ならばそこにあったはずの……腕。

この感覚。ノウェは呆然として立ち竦んだ。初めてではない。以前にもあった。まだオローが生きていたころだ。団員の一人に足をかけられ、転ばされたところで我を失った。相手は日頃からノウェに嫌がらせを繰り返していた団員だった。それが怒りを倍加させたのだろう。

気がつくと、相手は血塗れで倒れていた。オローが止めに入らなかったら、間違いなく殺

していた。そのときに感じたのだ。自分の中に何かがいる、自分の意志ではどうにもならない何かがある、と。再びそれを解き放ってしまったら取り返しがつかない、そう思った。
そのとき負った傷の跡は、今も額に残っている。人一倍、傷の治りが早いノウェだったが、その傷だけは何年経っても消えなかった。治癒能力を狂わせてしまうほどの衝撃だったのか、それとも自らの体が傷を消すまいとしているのか、その辺りは定かではない。
二度と解き放ってはならなかったはずの何か。間違いない。その何かが、毒にやられた四肢を操り、ジスモアの右腕を斬り落としたのだ。
「誰か！　誰かおらぬか！」
ジスモアの声を合図に、背後の扉が開く。ここに来たときにはいなかったはずの兵士が駆け込んでくる。ジスモアは一時的に、警護の兵士たちを遠ざけていたのだ。万が一、ノウェとのやり取りが扉越しに漏れたら困ると考えたに違いない。そして、事が終わるころに呼び戻す手筈(てはず)を整えていたのだろう。
「反逆者ノウェを捕らえよ！」
ただ、ひとつだけ思惑どおりにいかなかった。ノウェを仕留め損ねたことだ。そう簡単に思いどおりにさせてたまるか。俺は反逆者じゃない、ジスモアこそすべての黒幕だ、そう叫んでやる。兵士たちに本当のことを暴露してやるのだ。
が、それは言葉にならなかった。思うように声が出ないのだ。これも毒のせいなのだろう。ジスモアが平気で兵士たちを呼んだ理由が知れた。

だめだ。このままでは反逆者として殺される……。咄嗟にノウェは身を翻した。ふらつく足を必死でなだめ、別の扉から通路へと飛び出した。

「何をしている！　追え！」

背後で駆け出す気配がする。逃げなければ。ノウェはひたすら走った。目が霞み、足許が揺れる。それでも走った。外に出れば、レグナがいる。外が無理なら、露台にたどり着くだけでもいい。

不意に行く手を阻まれた。騒ぎを聞きつけ、兵士たちが集まってきているのだ。

「おい！　そいつを捕まえろ！」

背後から叫び声がする。目の前に立ち塞(ふさ)がってきた兵士は、すでに剣を抜いている。

「おれ…は……」

しかし、相手はノウェの言葉など端(はな)から聞く気はないようだった。いきなり剣が振り下ろされる。ノウェはやっとの思いでそれを受け止めた。あと少し、剣を抜くのが遅れていたら確実に斬られていた。

俺は反逆者じゃない。頼むから、剣を引いてくれ！

必死で念じたところで、通じるはずもない。二度、三度と剣が振り下ろされる。そのたびに腕に痺(しび)れが走る。受け止め続けるのも、もう限界だった。背後からも足音が迫っている。

ノウェは相手の剣を弾き飛ばし、まっすぐに斬り下ろした。血飛沫(ちしぶき)が上がる。そのまま振り返り、背後から斬りつけてきた相手を横に薙ぎ払う。続けて、また一人。立て続けに三人

を血の海に沈めると、ノウェは再び走り出す。

人を斬った。それも、ためらうことなく。いや、最初に剣を向けたときはまだ、ためらっていた。だから剣を引いてくれと念じた。

「ノウェ。剣とは人を殺(あや)めるためのものではない。人を守るためのものだ」

オローにそう教えられていたから、剣を抜いてもすぐには斬れなかった。が、一人斬ってしまうと、ためらいなど消えてしまった。続く二人はまるで魔物でも斬るかのように、容赦なく斬り捨てた。同じ騎士団の仲間だというのに。

「いたぞ！　あそこだ！」

またも目の前に立ちはだかる兵士たちがいる。正面に二人。その向こうから、さらに二人が駆けつけてくるのが見える。

考えるより先に体が動いていた。剣先に鈍い衝撃が走る。まるで朽ち木のように倒れる体。自分は今、生きている人間を斬り殺している。なのに、何の痛みも覚えない。ただ、己の内に得体の知れない、冷ややかなものを感じるだけだ。

やはり、封じ込めておくべき何かを解き放ってしまったのか……。

もう遅い。もう止められない。走りながら、幾度か剣を振るった。そのたびに返り血を浴びた。いったい何人斬ったのか、わからなくなった。

ようやく中庭に面した露台にたどり着いたときには、立っているのがやっとだった。

「小僧、どうした？」

騒ぎを聞きつけ、近くまで舞い降りていたのだろう。レグナの声を聞いた途端、安堵感に力が抜けそうになる。
「レグナ……」
人の言葉はうまく出てこなかったが、竜の言葉を話すのに支障はなかった。毒の力もそこまでは及ばないらしい。
「俺はもう……ここにはいられない」
頭から返り血を浴びた姿を見て、事情が呑み込めないはずがなかった。よかろう、とレグナが答える。
「潮時かもしれぬ。ここは儂には窮屈過ぎた」
露台から半ば転がり落ちるようにして、レグナの背に飛び乗った。
「しっかり掴まっておれ」
飛ぶぞ、と告げられたときにはもう、翼は風に乗っていた。大神殿がたちまち小さくなる。
「いったい何をやらかしたのだ？」
「団長のジスモアを敵に回した。父さんが……オローが死んだのは、あいつのせいだったんだ」
何もかも、ジスモアの思惑どおりになってしまった。オローは死に、自分はこうして追われる身となった。
「儂は驚かぬぞ。妬み、憎しみ、裏切り。人間にはよくあることよ」

「人間には……か」

結局、自分は人間にはなれなかったということか。ノウェは血で汚れた手のひらを見つめる。人の言葉を教えられ、人としての生き方を教えられ、十年という歳月を生きてきたというのに。

「レグナ、この方角は？」

「知れたこと。儂らが帰るべき地といえば、あの渓谷しかなかろう」

まだ自分が人間だと知らなかったころ、暮らしていた場所だ。レグナと二人、何にも煩わされずに。

「そうだな。それがいい」

不意に、マナの顔が浮かんだ。つい昨日までは彼女が追われる者で、自分は追う者だった。それが今では共に騎士団に追われる者となった。

「皮肉なもんだ」

苦い笑いがこみ上げる。

「何か言ったか？」

「いや。なんでもないよ」

ノウェはまだふらつく頭を小さく振る。余計なことを考えるのはよそう。今はただ、帰ることだけを考えていればいい。帰ろう。懐かしいあの地へ。

諾と応えるかのように、レグナの翼が陽射しを受けて煌めいた。



# Ⅱ 滄の章

1

途中、一度だけ翼を休めに森に降りたものの、あとはひたすら東へと飛んだ。
ジスモアに盛られた毒の効果が切れるのに、そう時間はかからなかった。効くのが早かった分、切れるのもまた早かったのかもしれない。人並みはずれて傷の治りが早いという体質のせいだろうか。
今までは、それを疑問に思ったことなどなかった。そういう体質に生まれついた、と納得していた。しかし今は違う。
俺は……何者なんだ？
人を斬ったとき、己の内にあった冷ややかな感触。一片のためらいもなく、手加減することさえしなかった。あのとき自分は、魔物と同じものとして相手を見ていた。あたかも自分自身が人間ではないかのように。
騎士団の人々が自分を「竜の子」と蔑み疎んじてきたのはそのせいだろうかと、ノウェは今になって思う。彼らは見抜いていたのかもしれない。人を人とも思わない冷酷さを。
「小僧、降りるぞ」
レグナの声でノウェは物思いから覚めた。すでに翼は下降を始めていた。灰色の岩肌と切り立った崖がぐんぐん近づいてくる。
「帰ってきたんだな……」

懐かしい光景が眼下に広がっている。幼いころ、レグナの背に乗って幾度となく見た景色。この少し先に水場があり、さらに先へ進むと虫食いのように無数の横穴を持つ岩山がある。
「あのころ……大きくなったら自分もレグナみたいにドラゴンになるんだと、そう信じて疑わなかった」
人間など見たこともなかったから、自分が人間だと、ドラゴンではないのだとわかるはずがなかった。
「人間どもがこの地に踏み込まなければ、今ごろ本当にドラゴンになっていたかもしれぬな」
「かもしれない」
ふっと笑いが零れた。冗談とも本気ともつかないレグナの口調が妙におかしかったからか、懐かしい故郷に戻って気が緩んだからか。
「そのような声を聞くのは久々であるな。笑うことなど忘れたかと思うたが」
とレグナがしみじみとつぶやいた。が、すぐにそれは訝しげな声に変わった。
「妙だな」
低く滑空していたレグナが緩やかに上昇を始めた。辺りを見回すかのように、ゆっくりと弧を描いて飛ぶ。
「どうやら儂らの留守中、鼠が入り込んでおったようだ」
「鼠？」
「人間どもの痕跡が其処此処に残っておる」

言われて見下ろせば、削り取られた岩肌や一カ所に積み上げられた落石など、確かに人の手が加わったとわかる場所がある。
「渓谷を探索するときに崖を削ったり、新しく道を引いたりしたって、父さんが言ってたな。その跡じゃないのか」
新しい生活に慣れてきたころだったか、オローはノウェを探し当てたときの話をしてくれた。渓谷での探索は困難を極めたが諦めなくて良かった、苦労の甲斐があった、と。
「ならば良いが」
レグナはそうつぶやくと、昔、寝起きしていた場所の近くにノウェを降ろした。
「儂はもう少しこの辺りを調べる。小僧は先に休んでおれ」
飛び去っていくレグナを見送り、ノウェは谷間を歩き始めた。尖った石が靴底を刺し、丸い小石が転がり足許が滑る。自在に駆け回っていたはずの渓谷が、靴に慣れた足には歩きにくい。
ここへ帰ってきたからといって、昔に戻れるわけではないんだ……。
そんな当たり前の事実が胸を刺した。懐かしいはずの景色が次第によそよそしいものに変わっていくような気がした。
違う。気のせいではない。ノウェは目を見開いた。実際に地形が変わっている。わずかな違いではあったが、目をつぶっていても歩けるほど慣れた場所である。どんなささいなものであっても見逃しはしない。しかも、どこか悪意を伴った変化に思われてならなかった。鼠

が入り込んだ、というレグナの言葉が思い出されてくる。
歩みが重くなった。慎重に周囲を見回してみる。何かの気配。ノウェの足が止まる。
「遅かったな」
今、ノウェが最も憎み、忌み嫌っている者の声が谷間に響いた。
「ジスモア……！」
岩陰から、一斉に兵士や魔術師たちが姿を現す。先回りされていたのだ。途中、森に降りて休んだのが裏目に出た。ジスモアは、大神殿から高速艇を休みなく飛ばしてきたのだろう。
「貴様の小賢しい企みが見抜けぬとでも？　甘いわ」
迂闊だった。ノウェとレグナが暮らしていた場所くらい、騎士団の記録を調べれば簡単にわかる。他に行くあてもないとなれば、そこで網を張るのは当然のことだった。
「馬鹿め。我々から逃げられるはずがなかろう」
ジスモアが片手を挙げる。弓兵たちが一斉に矢を番え、魔術師たちが杖を構える。頭上に目をやると、いつの間にか空中兵器が狭い渓谷の空を埋め尽くしていた。
これではレグナが降りられない。下手に近づけば、格好の的にされてしまう。
ノウェは剣を抜き、じりじりと後ずさった。この数相手に逃げきれるとは思えなかった。かといって、戦って勝てるとも思えない。到底思えないが、戦うしかない。剣を強く握り、構えたときだった。
突然、大地が鳴動した。縦横に走る亀裂から噴き出す白い霧。

「こちらへ！」

背後から低く鋭い声がノウェを呼んだ。それを聞くまでもなく、誰なのかわかっていた。この地割れと霧には見覚えがある。ノウェは声のほうへと走った。

「マナ？　なぜ、あんたがここに……」

「説明は後です。早く！」

マナの後を追って走った。騎士団員たちは霧に視界を遮られ、右往左往しているようだった。これもまた覚えのあることだった。

霧の中から抜け出すと、マナは杖を振り上げ、すばやく呪文を詠唱した。と、横合いの岩壁が消え去り、洞窟の入り口が現れた。目眩ましの呪文で隠されていたのだ。

「この先です」

洞窟の先から光が見える。外に通じているらしい。山腹を掘って隧道にしてあるのだ。昔はこんなものなどなかった。おそらくノウェたちが渓谷を去った後に、何者かが掘ったに違いない。幸い、隧道はほぼ一直線に掘られていて、走れば出口までいくらもかからなかった。

「外は狭い道ですから、気をつけて。道沿いにしばらく下れば、身を隠す場所があります」

マナの言うとおり、隧道を出ると山の中腹に沿って狭い道が続いている。いや、道というよりも岩棚と言ったほうが近い。下は目も眩むほどの谷である。追われているのでなければ、進んで通りたくなる道ではなかった。

「追ってきてないか？」

大丈夫、とマナは答えながら、杖を振り上げる。隧道の出口がかき消え、灰色の山肌へと変わった。

「たとえ追ってきても、彼らはこちら側には出られません。行きましょう」

山沿いの狭い道を下り始めたときだった。不意に行く手に騎士団の艇が現れた。咄嗟に、岩陰に身を寄せる。

「まずい。戻ろう」

幸い、艇はただ一隻。それも大型のものではない。そっと引き返せば、やり過ごせるのではないか……。しかし、そう期待どおりにはいかなかった。突然、艇から青白い光が放たれた。見つかってしまったのだ。

直撃は避けたものの、青白い光はノウェたちの足許を抉った。体がふわりと浮いたかと思うと、山腹に叩きつけられた。

傍らの岩につかまりながら、ノウェは体を起こした。ひどくぶつけたせいで、息をするたびに背中が締め付けられるように痛む。早くさっきの隧道に逃げ込まなければ。空からの攻撃には応戦しようがない。

マナの姿を捜す。やはりさっきの砲撃で吹き飛ばされたのだろう、彼女は道の端ぎりぎりのところに横たわっていた。あと少しずれていれば谷底へ転落していたに違いない。

「マナ！　大丈夫か？」

ノウェが駆け寄る前に、マナが身を起こす。よかった。どうやら深手を負ったわけではな

いらしい。
「早くさっきの隧道へ！」
ぐずぐずしていると次の砲撃が来る。マナがうなずき、立ち上がった。が、その体が突然沈んだ。足許の岩が崩れたのだ。
ノウェは跳んだ。大声でレグナを呼びながら。
悲鳴を上げて落ちていくマナを追い、崖下に身を躍らせる。耳元で風が鳴る。怖くはなかった。レグナがいる。そう思ったときにはもう、蒼い翼がノウェを拾い上げていた。
落下するよりも速く、蒼い翼が風を切る。騎士団の艇が砲撃してこないのは、呆気にとられているのだろう。よもや自ら谷に飛び込む者があろうとは思わなかったであろうし、それを瞬時に背に乗せる者がいようとは、想像の埒外であったに違いない。
レグナが落下するマナを追い越した。ノウェは両手を差し伸べる。マナの体がその腕に吸い寄せられる。わずかな衝撃の後に、しっかりとした重さが両腕に伝わった。ノウェは安堵の息を吐く。
「やれやれ。無茶をする」
苦笑し、レグナが炎を吐いた。今度は騎士団の艇が黒い煙を上げて谷底へと落ちていく。
「助けて……くれたんですね」
マナの声はまだ震えていた。無理もない。
「ありがとう」

「あんただって、助けてくれたじゃないか」

お互い様だと答えると、マナは小さく微笑（ほほえ）んだ。間近に見る赤い瞳（ひとみ）に、また心臓が跳ね上がるのを感じた。ノウェはあわてて目を逸（そ）らし、言葉を捜した。

「これから、どうするかだけど……」

ノウェはちらりと後ろを振り返った。幸いにも追ってくる艇はない。

「私は次の直轄区へ向かわなければなりません」

マナの声はもう震えていなかった。

「その直轄区って、どこにあるんだ？」

「この渓谷地帯の東の果てに」

ノウェは瞠目（どうもく）した。自分にとって、唯一、故郷と呼べる場所が騎士団の直轄区になっていたとは。同時に、納得もした。ジスモアの追跡はあまりにも早かった。追ってくるだけならまだしも、あれだけの兵力を揃（そろ）えて大神殿から移動するのは並大抵のことではない。が、この近くに直轄区という拠点があるなら話は別である。

さらに、直轄区の名を聞いて驚愕（きょうがく）した。

「神水の直轄区。私の目的地はそこです」

毒の清水を飲まされたとき、ジスモアは確かに言った。神水の直轄区から取り寄せた、と。

「また鍵（かぎ）を壊すつもりなんだな」

「ええ。私の目的はいつもそこにあります。きみも真実を見たでしょう。気炎の直轄区で」

鍵によって毒性を封じていると言いながら、聖火台が破壊されても異変はなかった。そして、この渓谷地帯。オローに拾われるまで暮らしていたが、毒性など気配すら感じられなかった。たとえ自分が気づかなくても、レグナにわからないはずがない。つまり、ここに毒性を吐き出す場所があるというのは騎士団の捏造（ねつぞう）した嘘（うそ）なのだ。

「俺も……いっしょに行っていいかな」

知りたい。騎士団が何を目論（もくろ）んでいるのか。それに、あの毒の清水。この渓谷地帯が出所ならば、自らの手で潰（つぶ）しておきたかった。養父オローを殺した忌まわしい水など、一滴残らず消し去ってしまいたい。

違う、とノウェは自分で自分の考えを否定する。そんなものは表向きの理由に過ぎない。何もかもがわからない。疑問の答えどころか、その疑問すらも。だからこそ知りたいのだ。ささいなものでも、如何（いか）なるものでもいいから答えが欲しい。

マナがじっと自分を見ていることに気づいて、ノウェは弁解のように付け加える。

「誤解しないでくれ。別にあんたの味方になるって言ってるわけじゃない。ただ、俺は知りたいだけなんだ」

マナが無言でうなずく。その赤い瞳を見て、ひょっとしたら彼女についていけば何かわかるかもしれないと思う。根拠や確信があったわけではない。ただ予感だけがあった。

神水の鍵を祀る聖壇へ向かう前に、砂の村と呼ばれる寒村に降りた。見せたいものがあるとマナが言ったからである。
「この辺りも、昔は肥沃な土地だったそうです」
「ここが？」
村はずれから集落に向かって歩きながら、ノウェは首を傾げる。足許の地面はからからに乾き、ひび割れている。草どころか、苔すら生えていない。
「川が枯れてしまったせいで、今ではとても人の住める場所ではありませんが」
「日照りでも続いたのか……いや、違うな。この辺りの気候なら知ってる」
決して雨が多いわけではないが、日照りに悩まされるような土地ではないはずだ。ここはノウェが暮らしていた場所よりも東に位置するとはいえ、気候に差が出るほどの距離はない。
「水城砦が造られたせいです。川は上流でせき止められ、ここは不毛の地になりました」
「まさか、その水城砦を造ったのって……」
マナがうなずく。折しも道は古い木橋にさしかかっていた。マナの言葉を裏付けるかのように、橋の下は涸れ川である。しかし、がっしりとした橋脚が、以前は水量豊かな川であったことを物語っていた。
水城砦を造ったのが封印騎士団だというのなら、いったい何のためにそんなことをしたのだろう。上流で川をせき止めてしまえば、下流の人々が困る。子供でもわかる道理だ。
「おそらく、神水の鍵のためでしょう」

ノウェの心中を読み取ったかのようにマナが言った。
「神水の鍵は、聖瓶と呼ばれる巨大な水瓶(みずがめ)だそうです。聖瓶は常に大量の清水で満たされていなければならない……」
本当にそれだけだろうか。そんなことのために、騎士団は人々の生活を破壊したのか。納得がいかない。まとわりつく疑問を振り払いたくて、ノウェは歩みを速めた。
木橋を渡ると、集落は目の前だった。板きれを立てかけただけのような荒屋(あばらや)が点々と続いている。他人の家を覗(のぞ)く趣味はないが、どの家にもまともな扉や窓がついていないために、いやでも中の様子が目に入ってしまう。
村人の誰もが皆、無表情だった。作り物のような顔をして、互いに会話をすることもなく、ただぼんやりと家の中に座っていた。
「彼らがなぜ、黙って座っているのか、わかりますか」
ノウェは頭を振った。そもそも村という場所に足を踏み入れるのは初めてのことだった。オローに拾われた後は、騎士団の居住区から出たことはほとんどなかったし、出陣すれば寝泊まりするのは駐屯地(ちゅうとんち)である。居住区と大神殿と駐屯地。この三カ所をレグナの翼に乗って移動するだけで、他の場所に立ち寄ることなどなかった。
「動き回ったり、しゃべったりするだけの気力が彼らには残っていないのです。慢性的な飢餓状態と、封印騎士団の弾圧によって、彼らは人間らしい感情や生きる希望を奪われました」
突然、マナの言葉を悲鳴にも似た泣き声が遮った。村の中が静かすぎるせいで、その声が

どこから聞こえているのかすぐにわかった。数本の柱の上に辛うじて屋根が載っている、とても家とは呼べない場所で、女が号泣していた。薄汚い襤褸の塊を抱えて。
「また一人……幼い命が失われたようです」
襤褸だと思ったのは、子供だった。よくよく見れば、か細い手足がだらりと垂れ下がっている。まだ幼い子供だ。
「ここが不毛の地であっても、ここにいればやがて死ぬだけだとわかっていても、彼らはここを離れられない」
「なぜ？」
「勝手に村を離れれば、騎士団に処刑されるからです。その者だけが処刑されるのではなく、村の者たちも同時に罰せられるのです。村への飲み水を減らすという手段によって。ここでは川だけでなく井戸も涸れていますから、騎士団の運んでくる水だけが命綱です。だから、村人たちは決して騎士団には逆らえない……」
ノウェは絶句した。蒼い翼に乗って幾度となく地上を眺めた。まさか、その光景の中にこれほど悲惨な生活があろうとは思いもせずに。
「私が暮らしていたのも、こんな貧しい村でした」
ここほどひどくはなかったけれど、とマナは小声で付け加える。そういえば彼女の家族は今、どうしているのだろう。今でも貧しい生活を続けているのだろうか。またもそれを読み取ったかのように、マナが寂しげに微笑んだ。

「私には両親がいません。親代わりとなって私を育ててくれたのは、帝国軍の魔術師だった人でした」

帝国軍と聞いて、明命の直轄区で見た光景が脳裏をよぎった。元帝国兵というだけで、殉教者として殺されようとしていた人々の顔が。

「彼は優れた治癒魔法の使い手でした。もしも、拾ってくれたのが彼でなかったら、私は生きていなかったでしょう」

「拾ってくれた?」

「ええ。私は瀕死の状態で川に浮かんでいたのだそうです。全身打ち身だらけで、あちこちの骨が折れ、おまけに大量の水を飲んでいて……」

何があったのかと問うと、マナは黙って首を左右に振った。

「目が覚めたとき、私は何ひとつ覚えていませんでした。マナという自分の名前以外は。彼に言わせると、それとて奇跡のようなものだと。二度と目覚めなくても不思議はなかった、と」

そのときのことでも思い出したのか、マナはしばらく自分の手をじっと見つめていた。白く優美な手だった。その手から、あれほど強力な魔法が編み出されるのが信じられないほどである。

「来る日も来る日も、彼は周辺の村を巡り歩き、怪我や病で苦しむ人々に治療を施しました。先の大戦で幾多の命を奪ってきたから、その償いだと言って……。けれども、飢えて死んで

いく人々だけは、彼の魔術をもってしても、どうにもならなかったのです」
自分は恵まれていたのだと、ノウェはつくづく思う。騎士団員たちにどれほど冷淡にされようと、命まで奪われたわけではない。殉教者として殺された人々の存在を知らず、飢えて死を待つだけの人々の存在も知らず、ただぬくぬくと生きてきた。
「神水の鍵を壊せば、川の水は戻るのか？」
おそらく、とマナはうなずいた。
「この土地のすべての水を封じ込めているのが聖瓶だと言われていますから」
「わかった。俺も行くよ。罪もない子供までが命を落とす……そんなことが許されていいはずがないんだ」
オローは口癖のように言っていた。民を守れ、それが封印を守ることになる、と。マナが為(な)そうとしていることは、オローの言葉と一致する。むしろ、ここで知らん顔をすればオローに叱責(しっせき)されるに違いない。
「ありがとう」
マナは微笑み、まだ号泣している女の背に目をやった。
「ごめんなさい。私はその子のために何もできなかった。でも、きっと直轄区を解放して、この土地をあなたがたの手に戻します」
そうつぶやくと、マナは再び先に立って歩き出した。毅然(きぜん)と背筋を伸ばし、まっすぐに前を向いて。人々が必死で彼女を匿(かくま)い、逃がした理由がわかった気がした。

3

水面が揺れていた。水瓶の中に風など吹こうはずがないのに、それでも時折、細波が立つ。理由は知らない。封じられているものが鍵を破ろうと、もがいているのだろうか。思えば、気炎の鍵が失われてから、波立つのを目にする回数が増えた気がする。

「何がおかしい？」

背後から静かに問われて、ハンチは自分が笑っていたことに気づいた。何も、とひとまず答えておく。思うところを語るような相手ではないし、また自分でも何がおかしいのかよくわかっていなかった。

「そうであろうな。おまえが笑うなど、あり得ぬことだ」

「はい、はい。そうですとも。下手に笑えば、不細工な顔がますます歪んじゃいますからねぇ。笑うなんてとんでもない」

その答えが気に入ったのか、ケルピーが笑い出した。金属を擦り合わせるような、不愉快な笑い声が聖瓶を震わせる。

「だ、だめですよぅ。結界が……」

ハンチの言葉が終わるよりも先に、聖瓶の周囲に施していた呪が乱れた。ケルピーが笑う。鱗に覆われた巨大な尾を振り、馬そっくりの首を逸らして笑い転げる。制止しても無駄なことはわかっていた。ケルピーは何かにつけてハンチの邪魔をしたがるのだから。

　また最初からやり直さなければならない。自分と聖瓶とを呪でつないだ上で結界を張る。ややこしい作業だが、手を抜くわけにはいかなかった。

　単なる結界では発生装置を壊されたら終わりだ。何より、訪問者をこの聖壇の間から引っ張り出す必要がある。外へ出ろと言ったところで素直に従うはずのない連中に言うことをきかせなければならないのだ。そのためには、それなりの策が要る。

　思わずため息をつきそうになって、ハンチはあわてて口許を押さえる。落胆を悟られてはならない。この魔物をますます喜ばせてしまう。幸い、ケルピーの関心は別のところにあった。

「それはそうと、気炎の鍵を壊した女の噂(うわさ)を聞いたぞ」

　水の中を棲(す)み処(か)とし、人間とは滅多なことでは関わらないケルピーだったが、人々の噂にはやたらと通じている。出所は教えてはくれなかったが、それはいつも恐ろしく正確で、詳細にして広範な情報だった。でなければ、ケルピーはハンチのことなど知らなかっただろうし、興味を抱くこともなかった。当然、契約を持ちかけてくることもなかっただろう。

　澄み切った水にまた細波が立つ。そう、あの日も水面が揺れて……。だめ、思い出してはだめ。忘れてしまいたいのに。いやだ、思い出したくない。ハンチはきつく目を瞑(つむ)った。

　ハンチの生まれ故郷は、なだらかな稜線(りょうせん)を描く山々に囲まれた美しい村だった。赤い切妻屋根の家々が積み木のように立ち並び、真っ白な敷石が狭い小径(こみち)にまで余すことなく敷き詰

められていた。家々の窓辺は鮮やかな色の花で飾られ、道行く人の目を楽しませた。先の大戦で村は焼土と化すことになるのだが、ハンチが子供だったころはまだ平和な時代が続いていた。

都や町では不穏な噂が流れ始めていたものの、村には戦の影すらなく、ハンチは優しい両親と二歳年上の姉ウルムとともに平穏に暮らしていた。

「ウルム、ハンチ、お出かけかい?」

お揃いの青い服を着て出かけると、道行く人は必ず二人に声をかけてくる。村の誰もがこの姉妹をこよなく愛していた。

「ええ。湖に遊びに行くの」

「二人で?」

「ううん。船遊びは大勢のほうが楽しいでしょ」

他の子供たちとは村はずれで待ち合わせをしていた。村から少し歩いたところにある湖は、ふだんは霧が深くて近寄ることすらできない。ところが、どうした加減でか、初夏の数日間だけ決まって霧が晴れ、湖はその美しい姿を現すのである。それは村の子供たちにとって、一年で最も楽しみな数日間だった。

「ほら、これを持ってお行きよ。湖に着いたら、みんなでお食べ」

そう言って、二人に焼き菓子の包みを持たせてくれる者もいる。二人の、とりわけハンチの笑顔が見たくてたまらないのである。それほどハンチは愛らしい子供だった。

「ありがとう。あら、おじいさまは？　またお加減が良くないの？」
いつも二階の窓から手を振ってくれる老人の姿がないことに気づいたウルムが、気遣わしそうに尋ねる。姉のウルムは思いやりが深く、心根の優しい少女だった。それがハンチには少しばかり面白くない。自分には姉のような心の美しさが備わっていないことを、幼いながらもハンチは自覚していた。
「つまらないわ」
だから、こんなとき、ハンチはわざと膨れっ面を作るのである。そして、寂しげに二階の窓を見上げてみせる。
「おじいさまの意地悪」
「そんなことを言うものじゃなくてよ、ハンチ」
「だって……いつもなら手を振ってくれるのに」
すると、たいていの大人は笑ってハンチの頭を撫でてくれるのだ。
「ハンチが寂しがってるって聞いたら、じいさんの病気なんてたちまち吹っ飛んでしまうよ。大変だ、寝てなんかいられないってね」
「ほんとに？」
本当だとも、という返事を聞いてから、ハンチは飛び切りの笑顔を作る。ずっと同じ笑顔でいるよりも、拗ねたり泣いたりした後に笑ってみせたほうがより相手を魅了できる。ハンチはもっともっと村の人々に愛されたかった。ウルムよりも可愛いと思われたかった。

「じゃあ、おじいさまに伝えてね」
ウルムの手を引っ張り、ハンチは走り出す。子供らしく活発に。そして、立ち止まって振り返る。笑顔で手を振る。自分を魅力的に見せるやり方をちゃんとハンチは心得ていた。
「今日は妙な風が吹くわね」
湖に着いたとき、そう言い出したのはウルムだった。確かに、生温く湿った風が湖面をわずかに揺らしていた。
「船に乗るのはやめておいたほうがいいんじゃないかしら。嵐になるかもしれないわ」
ウルムの言葉をハンチは強く遮った。
「平気よ。だって、こんなにいいお天気だもの」
「でも……」
「ウルムは泳げないから、怖いんでしょ」
そういうハンチも、たいした距離は泳げない。いつも水遊びをしている川を横切るのがせいぜいだ。しかし、風が吹いた程度のことで一年に一度の楽しみを諦めたくはない。
「じゃあ、こうしましょうよ。泳げない子は岸に残る。泳げる子だけが船に乗るの」
泳げないのはウルムともう一人、エイダという少女だけ。他のみんなは大丈夫だ。我ながら、いい提案だと思った。
「これで決まりよ」

しぶしぶウルムがうなずく。

「わかったわ。できるだけ早く戻ってらっしゃいね」

取り残されて心細げなウルムとエイダを見て、少しだけ気が咎めたが、すぐにハンチは船遊びに夢中になった。分かれて乗り込んだ小舟は二艘、競い合いながらぐんぐん岸から遠ざかっていく。

ウルムが泳げないのは、幼いころに見た夢のせいだった。ウルムは、ハンチが溺れる夢を見たのだ。朝になって目が覚めるなり、ウルムはハンチを抱きしめて泣いた。夢でよかったと何度も言った。

以来、ウルムは水を怖がるようになり、ハンチが川で遊ぶのさえ嫌がった。もっとも、いくらウルムが泣いて止めても、聞き入れるハンチではない。むしろ以前よりも水遊びを好むようになった。心配で泣きそうな顔を見るたびに、ウルムにとって自分がどれだけ大切な存在なのかがよくわかる。

だから、今日もウルムの言葉に逆らった。実のところ、ハンチも湿っぽくていやな風が吹いているとは思っていた。が、ウルムが嵐になるかもしれないと言い出した途端、そんな気がかりは跡形もなく吹き飛んでしまった。いつものように、ウルムを心配させてみたかった。うんと心配させて岸に戻ったら、きっとウルムは息が止まるほど抱きしめてくれるだろう。

初夏の陽射しが眩しく、水底がくっきり見えるほど湖は透き通って青い。水を跳ね返す音と、少女たちの歓声と。誰もが輝く水面だけを見ていた。空の色など気にも留めなかった。

唐突(とうとつ)に辺りが暗くなった。いつの間にか、空は灰色の雲で覆われている。湿り気を帯びた風が水面を揺らす。遊びに熱中していて、雲が広がり始めたことに全く気づかなかったのだ。

少女たちはあわてて小舟を岸に向けた。

しかし、いくらも戻らないうちに大粒の雨が降り始めた。空に白い光が走る。雷鳴が轟(とどろ)く。必死で櫂(かい)を動かしても、岸は遠い。悪いことに向かい風だった。

風雨はますます激しさを増してくる。夜のように暗い空を稲妻が切り裂く。水面は荒れ狂い、容赦なく小舟を揺さぶる。船端につかまっているのがやっと、とても櫂をとるどころではない。少女たちは悲鳴を上げることすらできずに、ただただ震えていた。

突然、横合いから突風が吹きつけた。少女たちは必死で船にしがみつこうとしたが、無駄だった。小舟は二艘とも呆気なく転覆し、全員が冷たい水の中に投げ出された。

助けて……誰か助けて！

暗い水の中でもがきながら、ハンチは声にならない叫びを上げる。

ウルム、助けて。あたしが悪かったわ。ごめんなさい。もうわがまま言ったりしないから、お願い、助けて。

息が苦しくて口を開けた途端、苦い水が喉(のど)を直撃した。水を吐き出したくてもできない。咽(む)せ返ったせいなのか、胸の奥が激しく痙攣(けいれん)している。

いや……いや……死ぬのはいや……。

ハンチはもがいた。水面に顔を出そうと、闇雲(やみくも)に手足を振り回す。ほんの少しだけ、頭が

浮かび上がるのがわかった。あと少し上へ、と腕に力を込めたときだった。何かが足に絡みついた。それは、明らかにハンチを水底へ引きずり込もうとしていた。

無我夢中でそれを蹴った。蹴ろうとした。が、それは足だけでなく全身に絡みついてくる。

「死ぬのは怖いか？」

低い声が聞こえた。笑い含みの、どこか愉しげな声だった。

「死を逃れる方法は、ただひとつ」

全身を捉えているのがその声の主であることに気づく。死ぬのは怖いかと問いながら、声の主はハンチを水に沈めようとしている。

「私はおまえを待っていたのだよ。一年前、おまえを見たときからずっと」

息が苦しい。問いかけてくる声が次第に遠くなる。

「おまえの内なる闇が私を惹きつけて止まないのだ。美しく優しい姉への妬み、人々の関心を独占したいという貪欲さ。私は知っている。太陽の微笑みとまで呼ばれながら、おまえが心の内にどす黒い闇を宿していることを」

手足に全く力が入らなかった。抗うこともできないまま、ハンチはただ声を聞いた。

「おまえが欲しい。欲しくて欲しくてたまらない」

誘いに乗ってはいけない、そう思った。こんな恐ろしげな魔物の言いなりになってはいけない。それはわかっていた。

「死にたいか？」

いや！　死ぬのはいや！

「ならば……わかるな？」

選択の余地はなかった。わずかに残った意識をかき集め、ハンチはうなずいた。

やっとの思いで岸に這い上がったときには、嵐はすでに止んでいた。

「ハンチ！　無事だったのね」

ウルムが駆け寄ってくる。生き延びたのだという実感が湧いた。見れば、ウルム以外にも村人たちが集まっている。湖に出かけた子供たちを心配して駆けつけたのだろう。しかし、あの嵐で助かった者はいないだろうとハンチは思った。こうして自分が生きているのは、ケルピーと契約をしたからだ。

「ハンチ……あなた、何をしたの？」

戸惑う声に顔を上げると、ウルムが奇妙な表情で立ち竦んでいる。

「何だ、あれ？　なんてみっともない……」

誰かが吐き捨てるように言った。いったい誰のことを言っているのだろう？　ハンチは立ち上がり、辺りを見回す。村人たちの視線が自分に注がれている。が、どうも妙だ。人々はひそひそと何事か囁き交わしている。ハンチと目が合うと、視線を逸らす。まるで、いやなものを見てしまったかのような目つきで。

背後で低い笑い声がした。水音がする。振り返らなくてもわかった。ケルピーだ。



「契約には代償を伴う。おまえは何を支払うのかと思っていたが。なるほど」
「し、知らない……。代償なんて、あたしは知らないわ！」
そう叫んでみたものの、ハンチ自身にもわかっていた。ウルムの憐れむような顔と、村人たちの嫌悪に満ちた視線。背後からケルピーの笑い声が追いかけてくる。
こうして、ハンチは契約の代償として魅力を失った。

契約者となった後、ハンチはほとんど家から出ようとしなくなった。外を歩けば、自分が失ったものを思い知らされる。もう誰もハンチを見ようとはしなかった。姉のウルムだけは変わらずに接してくれたが、優しくされればされるほど惨めな思いに苛まれた。
誰にも会いたくなかったし、外の様子も知りたいとは思わなかった。が、ケルピーがあちこちの噂を聞きつけては、ハンチに知らせにやってきた。そのたびにハンチは苦い思いを噛みしめる。自分がいなくても誰一人困らない、自分は誰からも必要とされていない……。
やがて戦が始まり、村は灰燼と化した。姉のウルムは逃げ遅れて死んだ。助けようと思えば助けられたのかもしれない。ハンチは契約者だったのだから。小さな村ひとつくらいなら、守ろうと思えば守れたとは思う。しかし、ハンチはそれをしなかった。
逃げ惑う人々を見て、いい気味だと思った。ウルムが炎に巻かれたとき、心のどこかで安堵していた。
死ね……死ね……みんな死んでしまえ！

契約者となって初めて、ハンチは声をたてて笑った。己の内にあった黒い感情が膨れ上がり、荒れ狂うのを感じた。戦が永遠に続けばいいとさえ思った。

しかし、ほどなくして戦は終わり、生き残った人々は少しずつ以前の生活を取り戻していった。それはハンチにとって、再び訪れた喪失の日々だった。人々に笑顔が戻るにつれて、ハンチはまた孤独に苛まれるようになった。

ジスモアという男がやって来たのは、そんなある日のことだった。他の者たちと同じく、ジスモアもハンチに蔑みの目を向けた。が、ひとつだけ他の者たちと違った。

「力を貸して欲しい」

ハンチは耳を疑った。他人から言葉をかけられるなど滅多になくなっていたし、まして何かを頼まれるなど思いも寄らなかった。

「我々は契約者を必要としているのだ」

体が震えるほどうれしかった。もう一生聞くことはないだろうと思っていた言葉だ。ハンチはその場で了承し、鍵の守護者となった。鍵が壊れると守護者も死ぬと聞いて、ケルピーは異議を唱えたが、ハンチは聞き入れなかった。

「気炎の鍵を壊した女は、『聖女』とか呼ばれているそうだ」

ケルピーの言葉で、ハンチは我に返った。

「聖女？　それはそれは……さぞかし人々から愛され、慕われているのでしょうねえ。ええ、

私などと違って」

鍵を狙っている連中がいるらしいとは聞いていた。気炎の守護者が死んだことも。が、それは自業自得だ。ケルピーが仕入れてきた噂によれば、ザンポは何の備えもしていなかったという。聖火台を無防備なまま放置し、その結果、あっさりと破壊されてしまった。契約者でもない女一人に。情けない話だ。

だから、ハンチは聖瓶の周囲に結界を張っているのである。当然の備えだった。

「聖女とやらが来たら、お相手してやってくださいねえ。私なんかじゃ、きっと失礼に当たるでしょうしねえ」

ケルピーは水と氷を操る。いくら魔道の心得がある女でも、所詮はただの人間。ケルピーに敵うはずがない。

「たくさんたくさんお仕置きしてやらなきゃ……ですよねえ」

「ふん。その女が羨ましくてたまらぬのだろう？」

「とんでもない。羨ましいなんて、これっぽっちも思ってませんよぅ。そりゃあ、虐めてやりたいとは思ってますけど、何か？」

笑いが喉元までこみ上げてくる。ようやく笑っていた理由がわかった。久しぶりに自分を訪ねてくる者がいる。それがうれしくて愉しくて。せいぜい歓迎してやろう、ハンチはそう思いながら、結界を張り直す作業を続けた。

# 4

砂の村を抜けると、マナは涸れ川沿いにしばらく歩いた。
「この先に水城砦があるのか？」
「ええ。でも、その前にやっておかなければならないことがあります」
神水の鍵を壊す前に、水門を開いておくのだという。聖瓶が破壊されれば、一度に大量の水が溢れ出すことになる。そのとき、水の通り道が確保されていないと予想外の場所で土砂崩れや鉄砲水を引き起こしかねない。
「それに、もしかしたら水門を開くだけでも水が流れるかもしれません」
飲み水にさえ事欠く人々のことを思えば、一日でも早く、いや半日でも早く川を元に戻してやったほうがいい。
とはいえ、水門付近の警備は厳重だった。
「止まれ！　貴様ら、どこから来た？　この辺りへの立ち入りは禁止されている」
武装した兵士たちが剣を抜いて怒鳴る。水門の手前だけでも数十人。警備の兵士がたったこれだけとは思えないから、水門の内部や周辺にも控えているのだろう。しかし、マナは威嚇に動じた様子はなかった。
「そこをどきなさい」
「なに？」
兵士は怒りに顔を染めたが、思い出したように叫んだ。

「貴様ら、反逆者の一味だな！　ならばこの場で……」

　皆まで言わせず、マナが杖を振り上げる。爆風が兵士たちを吹き飛ばす。同時にノウェも剣を抜いた。もう抵抗は感じなかった。昨日までの仲間とはいえ、逃走するときすでに幾人かを斬殺している。砂の村では、騎士団と敵対すると心を決めた。迷いはない。

　マナが魔法で兵士たちを吹き飛ばし、ノウェが剣で止めを刺す。別に示し合わせたわけでもないのに、気がつくとそんな分担ができあがっていた。オローの死後、戦うときは常に単身だったノウェにとって、初めての経験だった。エリスの隊と行動を共にすることはあったが、エリスは隊全体を率いる身であったし、他の団員たちは進んでノウェに近づこうとはしない。こんなふうに誰かと手を携えて戦ったことなどなかった。

　とうとう人間の仲間にはなれなかったのだと、失意のうちに騎士団を去った。が、こうして共に戦う仲間ができた。自分は騎士団に馴染めなかっただけで、人間として生きられなかったわけではなかった。その事実がノウェにはうれしい。

　気がつくと、水門の外側を守っていた小隊は全滅していた。

「水門を……開かなければ」

　肩で息をしながら、マナがつぶやく。どうやらその仕掛けは水門の内側にあるらしく、外側にはそれらしいものは見当たらない。そのときだった。不意に、水門の向こう側が騒がしくなった。

　音をたてて水門が開き始める。ノウェとマナは顔を見合わせた。中で何が起きたのか。

「水門を開け！　マナ様をお通ししろ！」

叫ぶ声が真上から降ってくる。見上げれば、水門上部の見張り台に村人と思(おぼ)しき人影が見える。何が起きたのかわかった。直轄区に囚(とら)われていた人々が蜂起(ほうき)したのだ。マナがやって来たのを知り、勇気づけられたのだろう。

二人は開きかけた水門へと走った。人々はおそらく、まともな武器など持っていない。棒きれや石を手にした程度で、それでも必死で騎士団員に抵抗しようとしているのだろう。気炎の直轄区の人々がそうだった。

水門内部にノウェが斬り込むと、歓声が上がった。マナが杖を振り上げ、兵士たちを吹き飛ばすと、歓声はさらに大きくなる。

守るべきもののために戦うとはこういうことだったのかと、ノウェは思う。騎士団にいたころは、ただ命じられて戦っていたに過ぎない。封印を守るため、世界を守るためといくら頭でわかっていても、自分の剣が役に立っているという実感はまるでなかった。

今は違う。守るべき人々が目の前にいる。確かに今、自分は必要とされているのだ。その思いが剣をとる手に力を与えた。

ようやく最後の一人を倒すと、またも歓声が上がった。抱き合って喜ぶ人々を見るにつけ、なんとしてでも神水の鍵を壊さなければという思いに駆られる。ここの人々を本当の意味で解放するには、鍵を壊すしかない。

「マナ様、どうぞ我らもお連れください」

過酷な労働に明け暮れ、やせ衰えた彼らは、もはや立っているのがやっとに違いない。なのに、共に戦おうとしている。彼らのマナに対する信頼はそれほど厚いのだ。マナにもそれがわかっているのだろう、静かに首を左右に振った。

「いいえ。あなたがたは安全な場所に避難してください。もうすぐ水城砦の水がここを通ることになりますから」

「しかし、この先には砦を守る地上部隊が。とてもお二方だけで立ち向かえる数では……」

だったら、とノウェは口を挟んだ。

「炎で一気に焼き払えばいい。ここから先は俺とマナが空から侵入する。その間に、あんたたちは安全な場所へ逃げるんだ」

それでいいかと問えば、マナは強くうなずく。これで決まりだ。ノウェはレグナを呼んだ。蒼い翼が煌（きら）めきながら舞い降りてくる。

「ありがとう、ノウェ。行きましょう」

水門から少し飛ぶと、大きな湖が眼下に広がった。いや、湖ではなかった。上流の水をせき止め集めた巨大な貯水池である。

「全く人間どもは何を考えておるのだ？」

レグナが呆れ声でつぶやく。こんな無駄なものを造って何になると言いたいのだろう。

「神水の鍵は、水城砦の奥にあると聞きました。たぶん、あれが……」

マナが指さす先には、石造りの小さな建物が見える。実際には決して小さくはないのだろうが、その手前の水面があまりにも広すぎて、小舟が堰堤（えんてい）につながれているようにしか見えなかった。その建物から伸びる橋は、途中で寸断されたかのように終わっている。堰（せき）と堰とを渡す造りにしなかったのは、外部から侵入しにくくするためだろう。

堰堤の外側には、まるで砂糖菓子にたかる蟻（あり）のようにびっしりと兵士たちが群れ集っていた。もしも地上から侵入しようと思えば、まずこの大部隊を突破しなければならない。運よく突破できても、聖壇に続く橋は途中で切れている。そこへ渡るための船が要る。よく考えられているとは思う。が、それはあくまで普通の人間が地上から侵入しようとした場合である。空からの侵入者にとっては手薄なものだった。

「弓兵や魔術師はいないようだな」

地上から攻撃される恐れはないということだ。このまま堰堤を越えれば、と思ったときだった。マナが叫ぶ。

「待って！　あそこに砲台が！」

空に対する備えがないわけではなかった。堰堤に設けられた砲台のひとつが赤く光った。

「遅いわ」

レグナは悠々と旋回して砲撃を避けつつ、別の砲台へと急降下した。

「掴（つか）まっておれ！」

次の瞬間、翼が激しく揺れる。鉤爪（かぎづめ）で砲台を抉ったのである。さらに反対側に飛び、もう

一基も叩き壊す。地上では兵士たちがあわてふためき、逃げ惑っている。からかうかのように、レグナはその頭上に炎を一吐きし、高く舞い上がった。一気に堰堤を越え、水面を真下に望む。

聖壇への入り口と思われる扉の前には、いつの間にか魔術師たちで固められている。が、ノウェたちにとって手薄なことに変わりはない。

レグナの背から飛び降りたところへ、白い光の矢がいくつも降り注ぐ。転がってそれを避け、剣を抜く。

「彼らは私が！　きみは聖壇へ急いでください」

マナの杖から爆風が巻き起こり、魔術師たちが吹き飛ぶ。続けざまにマナが魔法を放つ。扉までの道が開けた。ノウェは一直線に走った。

扉は施錠されていなかった。些か拍子抜けする思いで、扉を開け放つ。施錠されていないなら、魔術師なり護衛兵なりが待ち構えているのだろうと覚悟していたが、中は無人だった。どうもここの守りは妙だ。あまりにも杜撰すぎる。

ノウェは剣を構えたまま、聖壇へと歩み寄った。マナの言葉どおり、巨大な水瓶が設えられている。そういえば、気炎の直轄区でも聖火台は無防備な状態だった。もしかしたら、厳重に守護できない理由があるのかもしれない。いずれにしても、破壊を目論む者にとってはありがたいことだった。

聖瓶に剣を突き立てようとしたときだった。

「ちょっと待ったぁ！」
振り返ると、女が立っていた。くすんだ色の赤い髪に、青白い顔。濁った目の周りにはどす黒い隈ができている。
「神水の……守護者？」
「はいはいはい。そうですよぅ。ハンチです」
女は、にたりと笑った。
「反逆者は女だって聞いてたんですけど、まさか救世主のノウェ殿もご一緒だったとは。びっくり、ですよねえ」
見知らぬ女に名を言い当てられたのには驚いたが、それよりも先に鍵を破壊しなければと思い直した。しかし。
「だめだめ。だめですよぅ。一応、結界張ってあるんですからぁ。でも、これでノウェ殿の目的がはっきりしましたよねえ。ちゃあんと、この目で見ましたからねえ」
ハンチの言葉どおり、剣の先に抵抗を感じた。結界ということは、どこかにそれを発生させる仕掛けがあるはずだ。ノウェはすばやく視線を巡らせる。だが、それらしいものは見当たらない。
「鍵を壊すような悪い子には、お仕置きしなきゃ……ですよねえ」
ハンチが口許を歪めて笑う。
「ここじゃ狭いから、表へ出ろ、って感じですよぅ」

　ノウェは油断なくハンチと、聖壇の周囲に目をやった。戦わずに鍵を壊す方法があるなら、それに越したことはない。しかし、ノウェの考えていることがわかったのだろう、ハンチがくすくすと笑い出す。
「ああ、そうそう。私を殺さなきゃ結界は解けませんけど……何か？　ええ、ええ。私を殺しさえすれば、結界も解けて、鍵も壊れる。お得な話ですよねえ」
　笑いながら、ハンチが身を翻す。結界を発生させている仕掛けが室内に見当たらない以上、ハンチと戦ってみるしかない。ノウェはハンチを追って走った。
　外では、マナがまだ魔術師と戦っていた。一人で複数を相手にしていたのだから、無理もない。それでも八割方を仕留めたのはたいしたものだった。
「たった一人に手こずるなんて……魔術師部隊もたいしたことありませんねえ。まあ、あっちはあっちでよろしくやってて貰いましょうよぅ」
　マナからもノウェからも十分な距離をとりながら、ハンチが肩を竦める。どうしたことか、彼女の言動のひとつひとつが癇に障る。
「そういえば、ノウェ殿が飲まれた清水、目が回るくらいおいしかったでしょう？」
　言われて気づいた。神水の直轄区から取り寄せたという清水。守護者であるハンチが無関係であるはずがなかった。ということは、三年前の事件にも彼女は関わっていたのだ。
「無限の水……っていうんですけどね、便利なんですよぅ。飲み水に混ぜれば、あっという間に毒薬ですしねえ。味も臭いもなくて、証拠も残らない。最高でしょう？」

　もはや彼女は笑っていなかった。ぎらついた双眸には憎悪の色が宿っている。
「オロー元団長が父親代わりだったたんですってねえ。私、あいつ大っ嫌いだったんですよぅ。私のこと蔑んで、見下して……口に出さなくても、そういうのって伝わってくるんですから」
「だから……殺したのか？　ジスモアと結託して……」
「あらあら。いやですよぅ。ノウェ殿は女にも剣を向けるんですかぁ？　私、これでも女なんですよぅ。卑しくて不細工なのは百も承知ですけど、何か？」
　許せないものは許せない。女であろうとなかろうと。が、剣を構えた途端、背後で大きな水音がした。水飛沫とともに生臭い風が吹きつけてくる。
　振り返ると、まず巨大な魚の尾が目に入った。鉛色の鱗と血の色の鰭がうねりながら宙に浮いていた。見上げれば、その先は馬の首に続いている。
「失礼にならないよう、ケルピーがお相手いたしますから」
　ハンチの言葉が終わらないうちに、氷の礫が降ってくる。
「マナ！　逃げろ！」
　自分も避けながら叫ぶ。マナが弾かれたように跳んだ。氷の礫が魔術師たちに降り注ぐ。ケルピーは味方を巻き込むことなど何とも思っていないらしい。
「レグナ！」
　このまま下にいたのでは狙い撃ちにされる。マナとともに再びレグナに飛び乗った。思いのほか素早い動きで、ケルピーが追いかけてくる。

「水の魔物か。よかろう」

反転し、レグナが炎を吐いた。魚鱗に包まれた巨体が空中でのたうち回る。水に棲む魔物だけに、炎には弱いのだろう。これなら倒すのはたやすい、そう思ったときだった。不意にレグナの炎が止まった。

「小癪な！　我が炎を封じてくるとは！」

言葉とは裏腹に戸惑っていたのだろう、レグナの動きが鈍る。それを見逃すほど敵は甘くなかった。水面が氷の棘となって迫り上がってくる。レグナは急反転したが、それでも翼に衝撃が走った。

「あそこです！　あの魔術師たちが呪を！」

魔術師たちの周囲を赤い光が取り巻いている。魔法陣だ。彼らがレグナの炎を封じていたらしい。

「小賢しいわ！」

レグナが鉤爪で魔術師を襲う。が、彼らはするりとそれをかわした。武装した兵士と違って、身のこなしが軽い。

「剣で直接倒すしかないか……」

「いいえ。彼らは私が！」

言うが早いか、マナがレグナの背から飛び降りる。

「やめろ、マナ！　危険だ！」

止める間もなかった。魔術師たちの前に降り立ったマナが杖を二度、三度と振った。巨大な火柱が上がる。一瞬にして魔法陣が消え去った。魔術師たちは一人残らず炎に巻かれている。しかし、一度に力を使い果たしたからか、マナもまたその場に倒れ伏した。

「小僧、次の一撃で片づけるぞ」

一刻も早くケルピーを倒さねば、マナが危ない。ノウェがそう案じているのを察してくれたのだろう。

「おまえの力を儂に注ぎ込め」

「力？」

「人間の持つ魔の力だ。深く考えずとも良い。ただ意識を額に集めよ。あとは儂がやる」

何のことか、さっぱりわからなかったが、ノウェは言われるままに意識を集中した。それと同時に、己の内から何かが引きずり出されるのを感じた。額の中心から何かが吸い取られ、目の前が白くなる。

驚きに目を見開くと、一面の炎があった。半球状に広がった炎がケルピーを呑み込む。絶叫とも咆哮ともつかない叫びが辺りを震わせる。焼け焦げた巨体が落下し、盛大な水飛沫に変わった。

「レグナ、今のは……いったい？」

「竜騎士はお飾りではない、ということだ」

笑い含みに言って、レグナは降下し始める。ノウェはその背から飛び降り、マナに駆け

寄った。抱き起こすとマナはうっすらと目を開ける。よかった、とノウェは安堵の息を吐く。
「ノウェ……神水の鍵……」
頭を振って立ち上がりながら、マナが尋ねてくる。
「ケルピーは倒した。守護者もたぶん」
確かめるまでもなかった。聖壇に続く扉の前に、ハンチが倒れていた。まだ息があるのか、扉に向かって必死で手を伸ばしている。
「いや……。死ぬのは……いや……」
か細い悲鳴が途切れ、筋張った手が落ちる。ハンチの体が二度、三度と痙攣し、やがて動かなくなった。気炎の直轄区で見たのと同じように、青白い光に包まれ、ハンチは消滅した。
どちらからともなく、聖壇へ向かって歩き出していた。本当に鍵が壊れたのか、確かめずにいられなかった。
聖壇の間に入ると、微かな揺れを感じた。鍵が壊れたせいなのか、それともハンチの言っていた結界が消えたせいなのかはわからない。しかし、いずれにしても聖瓶が壊れたのは確かなようだ。聖瓶の表面には、無数の亀裂が走っている。
「これで川に水が戻る……」
ノウェが安堵の息を吐いたときだった。
「あなたたち、なんてことを！」
ひどく取り乱した、だが懐かしい声がした。エリスだ。ここまで走り続けてきたのだろう、

エリスは肩で息をしていた。
「自分が何をしたのか、わかっているのですか！」
「エリス……」
「あなたはその女に利用されているだけです！　マナ……とか言ったわね。ノウェをたぶらかさないで！」
「たぶらかす？　ずいぶん彼を見くびっているのですね」
「なんですって!?　この女狐ッ！」
エリスの頰に朱が差す。握りしめた拳が震えている。
「やめろ。俺は彼女にそそのかされたわけじゃない」
言ったところで聞き入れてもらえるとは思っていない。ただ、エリスにはまだ別れを告げていなかった。謝罪の言葉ひとつ口にしないまま、逃走してきてしまったのだ。
「封印騎士団にはもう戻らない。約束、守れなくてごめん」
行こう、とマナを促して踵を返す。
「ノウェ、どうして……」
「さよなら、エリス」
エリスがどんな顔をしていたのか、それはわからない。ただ、痛いほどの視線を背中に感じた。これで、封印騎士団と自分とをつないでいた最後の糸が切れたと、ノウェは思った。

# Ⅲ



# 皓の章

## 1

徒労という言葉の意味をいやというほど思い知らされた。これで何冊めだろう。エリスは古い文献を書棚に戻し、ため息をついた。

書庫の中は薄暗く、黴臭（かびくさ）かった。神官長セエレは暇さえあればここに籠（こ）もって神話だの伝承だのを読み耽（ふけ）っていると聞いたが、控えるように進言しようと思った。こんな空気を吸い続けていたら、身体（からだ）を損ないかねない。

それにしても、直轄区制度について記した文献が全くと言っていいほど見当たらないのはなぜだろう。それだけではない。前神官長が定めたという新封印制度に関する記述も見つからなかった。本来ならば明文化された形で残っていなければならないのに、とエリスは首を傾（かし）げる。

捜し方が悪いのかもしれない。背伸びをして、文献の背表紙をひとつひとつ確かめていく。なんとしてでも、直轄区についての詳細を調べ上げねばならない。

こうして調べてみると、自分の無知を、直轄区や鍵（かぎ）についての知識のなさを痛感する。いくら昔の話とはいえ、封印騎士団の一員として最低限の知識は蓄えておくべきだった。せめて、もう少し鍵について知っていれば、ノウェを説得できた。直轄区について尋ねられたとき、もっと詳しい話をしていれば、ノウェはあんな女の口車に乗らなかったに違いないのだ。

「あの女……」

エリスは唇を噛む。一撃で仕留められなかったことが悔やまれた。あの渓谷地帯で、ノウェとあの女を見たときには怒りで体が震えた。あの女だけを狙って撃ったはずなのに、外した自分にも腹が立った。その直後、ノウェは谷底に飛び込んであの女を助けた……。
「マナ、わたくしはおまえを許さない」
あの赤い瞳、魔の宿った瞳に、ノウェは惑わされているのだ。なんとしてでもノウェの目を覚まさせなければと思う。
もちろん、今さらノウェを連れ戻したところで、守護者を死に至らしめた罪が消えるわけではないのはわかっている。それでも、これ以上罪を重ねるよりはいい。このままでは、いつか自らの手でノウェを討つことになるかもしれない。そう思うと、胸の奥が痛んだ。
それをしたくなかったから、渓谷であの女を仕留め損ねた。ノウェを巻き込みたくないという思いが手許を狂わせたのだ。神水の直轄区でも、事を荒立てたくなくて一人で聖壇の間へ駆けつけた。もしもあのとき隊を率いていれば、その場で二人を捕らえることができたはずだった。何もかも、ノウェを討ちたくなかったからだ。なのに……。
「世界を守る者として生きなさい。それが母の願いです」
不意に、母の声が耳元に蘇った。そうだった、とエリスは自らを戒める。世界に危機をもたらす者は誰であれ、排除しなければならない。たとえ、誰よりも大切に思う相手であっても。封印騎士団の一員として世界を守ると、あの日、心に誓ったのだから。

雪の降る朝だった。エリスは母に手を引かれて、七年間暮らした屋敷を後にした。大好きだった絵本やお気に入りの人形、きれいな縁飾りのついたドレス……そういったものすべてと別れを告げなければならないことを、七歳のエリスは理解していた。

「お父さまは……」

言いかけてエリスは急いで口を噤んだ。きちんとお別れが言えないのは悲しいことではあったけども、顔を合わせればまた母と口論になる。父はエリスを手放したがらなかった。

「大丈夫よ。お父さまも、きっとわかってくださる。確かに、あなたはまだ幼いけれど……」

「わたくし、もう小さな子供ではないわ」

母から聞かされた話はすべて理解していた。自分が如何なる使命を持って生まれてきたのか、それもわかっている。偶然にも、本来背負うはずだった荷は他の者が肩代わりしてくれた。だからといって、それに甘えて安穏と暮らしてはならないことも。

「ええ。母もそう思うからこそ、あなたを神官長にお預けすることに決めたのですよ」

神官長がどんな人なのか、エリスは知らない。七年前に世界を救った英雄の一人、ということ以外は。優しい人だろうか、それとも気難しい人だろうか。たとえ恐ろしげな人であっても構わないとエリスは思う。知り合いの屋敷へ遊びに行くのとは訳が違う。

「貴族の生まれで、女であるあなたが封印騎士団に身を置くのは、傍目にはずいぶんと奇妙なことに映るでしょう。口さがない者たちは、当て推量でものを言うに違いありません。でも、真実はわたくしたちだけが知っていれば良いこと」

もとよりエリスもそのつもりだった。何を言われても、ただ聞き流す。打ち明けたところで、理解してもらえるような話ではないのだから。
「きっとヴェルドレ猊下(げいか)が良いようにしてくださるでしょう。あなたはただ、自分のお役目を果たすことだけを考えていればいいのですよ」
「はい、お母さま」
それから、大神殿までの長い道のりを半月近くかけて歩いた。いつものように馬車を使わなかったのは、母が決めたことだった。この先、貴族の生まれを捨てて生きていくのだから、と。幼い子供に徒歩の旅はつらかったが、エリスは黙って歩いた。本来ならば、もっとつらく、苦しい思いをしていたはずなのだ。
ようやくたどり着いた大神殿の前で、エリスは母に向かって言った。
「ここからは一人で行けます。わたくし……」
それだけで母はエリスの胸の内を察したようだった。静かにうなずき、そっとエリスの背中を押してくれた。泣きたくなる気持ちを抑えつけ、エリスはまっすぐに頭を上げた。しばらく歩いてから、別れの言葉を忘れていたことに気づいた。

予想はしていたが、騎士団での生活は楽しいものではなかった。父代わりとなって面倒を見てくれたオロー団長は尊敬できる人物だったが、他の団員たちの目は冷たかった。
貴族という生まれに対する妬(ねた)みや僻(ひが)みがあるのはわかっていた。当てこすりを言われたり、

いやがらせをされたり、そんなことなら我慢しようと思った。ただ、耐え難かったのは、エリスがそこにいないかのような態度をとられることだった。存在を否定されるのではなく、最初から存在しないかのように扱われるのは、どんな辛辣な言葉よりも胸を刺した。

声をたてずに泣くことを覚え、明け方、泣き腫らした顔を冷やすための水をこっそり汲みに行く……そんな日々が続いた。

ノウェと出会ったのは、それから一年ほど経ったころだった。オローに連れられて騎士団居住区にやって来たノウェを見たとき、エリスは「おかしな少年」が来たと思った。年格好は自分と同じくらいなのに、やることなすこと妙に幼いのである。ひっきりなしに辺りを見回していて、少しも落ち着く様子がない。しかも、彼はエリスに気づくと、いきなりそばに駆け寄ってきた。鼻がくっつくほど間近に顔を覗き込まれて、エリスは面食らった。

「無礼な！　何をするのですか！」

精一杯の威厳を保って抗議したが、少年は不思議そうに見つめ返してくるばかりだった。

「団長閣下、彼は……」

いったい何者なのですかと尋ねかけたまま、エリスの言葉は宙に浮いた。少年が笑いかけてきたのである。無邪気というよりは無防備な笑顔だった。気がつくと、エリスも彼に微笑み返していた。そして、ずいぶん長い間、笑っていなかったことを思い出した。

彼が神託の告げる救世主だと知ったのは、だいぶ後のことである。その事実はエリスにとって、またとない福音となった。

ノゥェが救世主ならば、わたくしがここに来たのは運命だったのだわ……。

運命だと思ったのに。ノゥェを助け、共に世界を守るために力を尽くそうと思ったのに。

エリスは両の拳(こぶし)を握りしめる。どこで間違ってしまったのだろう。ノゥェは反逆者として追われる身となり、エリスはそのノゥェの討伐を命じられている。

またため息をついてしまいそうになって、エリスは急いで文献の頁(ページ)を繰った。と、その手が突然止まった。

「赤い目の司教?」

改めて文献の表紙を見る。十八年前の大戦の記録だった。もう一度、その箇所を読み返す。思いがけない事実が記されている。

「どういうことなの?　まさか……」

場合によっては他の文献も調べ直してみなければ。エリスは慎重に文字を追っていった。

## 2

錆(さび)の町は砂の村とは凡(およ)そ共通点のない場所だった。町と村では住む者の数が桁違(けたちが)いなのだから規模に差があるのは当然としても、構造が全く違う。町の周囲には高い防壁が築かれ、人の出入りは正門と北門の二カ所からに限られている。この防壁のおかげで、この町は十八年前の大戦で破壊を免れたのだと聞いた。

しかし、住む者、訪れる者には不便この上ない。正門も北門も夜には閉鎖され、一切の出入りが禁じられてしまう。幸いノウェたちが町に着いたのは夕刻で、閉門の直前だった。

「門を閉鎖するのは、実は客を逃がさないためだと聞いたことがあります。嘘(うそ)か本当かはわかりませんが」

「客って？」

「ここ錆の町は、住むというより遊ぶ場所。表通りを歩く分には静かですが、裏通りに入ると酒場の類が軒を連ねているんです」

マナの言葉どおり、辺りは静まり返っていた。表通りに面した建物は、どれも扉や窓を固く閉ざしてしまっている。

「日が暮れてから外を歩くのは危ないということなんでしょうね」

治安の悪い町だからと、情報を持ってきた男はくどいくらいに念を押した。それでもこの町にやって来たのは、直轄区についての情報を得るためだった。騎士団を抜けた男が潜伏しているらしいというのだ。

騎士団にいたからといって情報を持っているとは限らないことをノウェは知っている。自分がそうだからだ。ただ、騎士団を抜けるというのは何か事情があったことを意味する。自ら望んで退団できるものではないし、降格されることはあっても団員の資格まで剥奪(はくだつ)されることは滅多にない。

おそらくは逃走だろう。騎士団員が騎士団員でなくなるには、それしかない。ただ、逃走

の罪は重い。捕まれば死が待っている。そこまでして逃走を図るからには、何か事情があるはずだ。命懸けで騎士団から逃げなければならない、何かが。

「仮面の男……なんて本当にいるのかな」

聞けば、その男は大きな髑髏の仮面を被っているという。騎士団から逃走した者がわざわざ人目に立つ格好をするとは考えにくい。仮面の男と騎士団を抜けた者とは別人ではないか。

「ええ。まずはそれを確かめなくては」

夕闇は次第に濃さを増していく。中央広場を横切り、裏通りへと向かう。と、狭い道に入った途端、空気が一変した。

狭い裏通りをひっきりなしに人々が行き交う。ある者は陽気に歌い、またある者は訳のわからないことを大声で喚く。肩がぶつかったと言っては誰彼構わず喧嘩をふっかけている者もいる。男たちは誰もが酒の臭いをさせていて、女たちはやたらと甲高い声で笑う。

しばらくの間、ノウェはぽかんとしてその光景を眺めていた。

「ここには様々な人がいます。旅人もいれば、商人もいる。罪を犯して逃げ込んでくる者もいる。方々から人が集まれば情報も集まる……」

マナはそうつぶやくと、一際にぎやかな店へと入っていく。何かあてがあるのだろう。ノウェもその後に続いた。

店の中は外よりも何倍も騒がしかった。どのテーブルも酒瓶や料理の皿で埋まり、ぎっしりと並べられた椅子はひとつとして空いていない。その狭い間を縫うようにして、引っ詰め

髪の女が皿を運んでいる。
店の中を突っ切っていくマナに、男たちの視線や野次る声が容赦なく飛んでくる。しかし、マナは全く動じることなく、店主と思しき男のところへと歩いていく。
「何の用だね、お嬢さん」
店主は迷惑顔でマナを睨めつける。ご注文はと訊いてこないのは、場違いだから出て行けと暗に要求しているのだろう。
「仮面の男を捜しています」
マナはそう言って、店主の手に銀貨を握らせた。慣れた手つきだった。おそらくマナは今までもこうやって情報を集めていたのだろう。店主は銀貨をためつすがめつした後、すばやく隠しにしまい込んだ。
「仮面ってのは、でかい髑髏のかい？　そいつなら、裏……」
店主がそこまで言いかけたときだった。マナの横顔に緊張の色が走った。
「ありがとう。さよなら」
言うが早いか、マナがノウェの手を掴む。どうしたのだと問う間もなく、マナは歩き出していた。半ば引きずられるようにしてノウェも歩く。
店を出ると、今度は人混みをかき分けるようにして走った。狭い裏通りを奥へ進み、さらに狭い路地へと入る。酒場の喧噪が消え去り、ぱったりと人通りが途絶えると、ようやくマナは足を止めた。

「この町にはもう騎士団の手配書が回っているようです」
それで、顔色を変えて店を飛び出したのか。しかし、店のどこに手配書があったのだろう。少なくとも壁には何も貼られていなかった。
「巻き込んでしまって、ごめんなさい。鍵の破壊を手伝わせておいて今さら何を言うのかと思うでしょうけど……」
「なぜ謝る？」
「私たちの首には法外な賞金がかけられています。私は覚悟していましたが、あなたは……」
マナは言葉を詰まらせ、目を伏せた。
「構わないさ。騎士団を抜けたときから、追われるのはわかってたんだ」
ジスモアが生きている限り、自分が追われ続けるであろうことも。
「どうせ反逆者と呼ばれるなら、俺は誰かの役に立ちたい」
川に水が戻ったと喜ぶ人々の笑顔が忘れられなかった。あれほど無気力だった人々が声をたてて笑い、小躍りして喜んでいた。騎士団にいる間、決して味わうことのなかった達成感と満足感を知った。
「あなたとともに行く。これは俺自身が決めたことなんだ」
ありがとう、というマナの言葉を鋭い叫びが遮った。
「いたぞ！　あそこだ！」
路地の向こうから数人の男たちが走ってくるのが見える。抜き身の剣が月の光をはね返し

ている。賞金稼ぎの類に違いない。

身を翻して走った。あの程度の人数なら、剣に物を言わせることもできる。が、この町には手配書が回っているとマナは言った。とすれば、騒ぎを起こすのはまずい。

ひたすら走り続けたが、地の利は向こうにある。逃げているつもりが追い込まれた。先回りされ、行く手を阻まれた。狭い路地で挟まれれば、もう逃げ場はない。騒ぎになるのを覚悟で戦う以外にないと、剣を抜こうとしたときだった。

「ちょっと待った！」

抜刀した男たちの向こうから、声がした。

「いくら自分が寂しい独り者だからって、恋人たちに難癖つけるのは感心しないなあ」

からかい口調で言いながら、歩み寄ってくるその姿。暗がりでは、まるで頭に角を生やした魔物のように見える。やがて月明かりに浮かぶ黒い髑髏。仮面の男、とマナがつぶやく。

「俺たちの仕事の邪魔をしようってのか？」

低い声ですごまれても、仮面の男は全く動じた様子はなく、ただ肩を竦めた。

「あんたらを叩きのめしたりしたら、邪魔したってことになるよなあ」

「わかったぞ！　てめえ、流しの賞金稼ぎだな」

男たちが色めき立った。横取りされてたまるか、と誰かが叫ぶ。が、仮面の男はくすくす笑いながら賞金稼ぎたちに近づいていく。武器を手にしている様子はない。

「やれやれ。死に急ぐのは感心しないね」

「おまえがな」
「そうかい？」
賞金稼ぎたちが一斉に剣を構え、仮面の男を取り囲んだ。
「まあ、そう焦るなよ。せっかくだから死ぬ前に……」
仮面の男が何か言ったようだったが、賞金稼ぎたちに囲まれているせいか、はっきりと聞こえない。代わりに耳に飛び込んできたのは絶叫だった。
「ば、化け物……！」
男たちは揃(そろ)って後ずさると、悲鳴をあげて走り出す。いったいどうしたのだろう。ノウェとマナは互いに顔を見合わせる。
「あっさり逃げていきやがったか」
どこか楽しげに言って、仮面の男は振り向いた。
「助かった。礼を言うよ」
賞金稼ぎを生業(なりわい)とするような連中をどんな方法で追い払ったのかは知らないが、自分たちが助けられたことは間違いなかった。
「なんだ。どこの間抜け坊主かと思えばノウェじゃないか」
いきなり名前を呼ばれて、ノウェは思わず身構える。
「あんた、誰だ？　なぜ俺の名を知っている？」
「おやおや。忘れられちまったのか。悲しいねえ」

言われてみれば、聞き覚えのある声だった。ノウェは仮面の中の目をじっと見つめる。

「おっと。こいつのせいか」

男が笑いながら仮面を外した。月の光に照らされた銀色の髪。思い出した。いや、顔を見る前に気づいた。あんなふうに親しげに名を呼んでくる人間など限られているからだ。

「ユーリック！」

思い出してくれたか、と言いたげにユーリックが笑う。昔と変わらない笑顔だった。初めて会ったときも、こんなふうに笑いかけてくれた……。不意に幼いころの記憶が蘇った。

騎士団居住区に暮らすようになって、半年ほど経ったころだっただろうか。日々の生活に慣れ、言葉にもさほど不自由しなくなっていた。が、同時にそれは、周囲の投げつけてくる皮肉や悪罵（あくば）の意味がわかり始めたということだった。

あの日もノウェは一人、居住区に近い池の畔（ほとり）にいた。悔しくて腹立たしくて、池の中に何度も石を投げ込んだ。エリスとも顔を合わせたくなかった。相手の言うことが理解できても、まだ自分の気持ちを表現するほどには人の言葉を習得していない。何があったのかと問われたら、もどかしい思いをするだけだ。

ふと背後に人の気配を感じて振り返った。その途端、頬（ほお）を引っ張られた。驚いて声を上げると、相手は楽しげに笑った。怒って腕を振り上げようとすると、くしゃりと頭を撫（な）でられた。

訳がわからず、きょとんとしていると、また頬を引っ張られる。同じことをやり返してやろうと相手の頬に手を伸ばしたが、するりとかわされる。むきになって手を伸ばす。またかわされる。いつの間にか、笑い転げながらじゃれ合っていた。

「やっと笑ったな」

そう言って、相手はびっくりするほど優しい目でノウェを見た。それがユーリックだった。団員の中にもこんな人がいたのかと、意外に思った。オローともエリスとも違う。兄のような、という言葉を当時のノウェが知っていたら、そう表現しただろう。

しかし、その翌日、ユーリックはもういなかった。誰かの不在による寂しさ、というものをノウェは初めて学んだ。

優秀な戦力であったがゆえに、ユーリックは日々任務に追われ、居住区でのんびり過ごす時間などほとんど与えられなかったのである。ノウェと顔を合わせるのも、半年に一度あるかないかだった。

オローの死後、ユーリックは一度も居住区に戻らなかった。オローの腹心の部下だったためにジスモアに疎(うと)まれ、遠隔地ばかりを転々とさせられているのだろうとノウェは思っていた。そして、極力、ユーリックのことは思い出すまいとした。思い出せば頼りたくなる。頼りたくなればその不在がつらい。だから、再会するまでは忘れていようと思った。

しかし、三年経っても再会することはなく、ノウェは騎士団を離れた。

「それにしても、女連れのノウェと再会するとはねえ。月日の経つのは早いもんだな」
「その軽口、ちっとも変わってないな」
そう返してみたものの、実際には変わっていないはずがない。騎士団を抜け、こんな物騒な町に身を潜めているのだから。居住区に一度も戻ってこなかったはずだ、と思う。
一目で変わってしまったとわかるのは、その面差しだった。顔かたちは昔のままでも、どこかが違う。ふとした表情に翳り(かげ)のようなものが感じられる。それに、首から頬にかけて走る大きな傷跡。よほどひどい怪我(けが)を負ったのか、皮膚が赤黒く変色していた。
「ところでノウェ。彼女に紹介してくれよ」
「ああ。マナ、この人は……ええと」
どう説明したらいいのだろう。自分の知り合いを他の誰かに紹介した経験などなかったから、どうもうまい言葉が見つからない。
「俺にとって、兄貴みたいな人だ」
結局、単純な言葉ひとつで済ませた。もっとも、口に出してしまうと、それが一番ぴったりくる言い方だったと思う。
「初めまして。私、マナと言います。封印騎士団を抜けた人物を捜していました。直轄区についての情報をいただきたいのです」
「そうだ、父さんの一番弟子だったユーリックなら」
他の団員では知り得ない情報を握っていても不思議はない。しかし、ユーリックは待って

くれと言いたげに両手を挙げた。
「そいつは買いかぶりってもんだ」
「小さなことでもいいんです。何か知っていることはありませんか」
「悪いな、お嬢さん」
ユーリックは大げさに肩を竦めた。
「それはそうと、さっさと退散したほうがいい。ここんとこ、デカい剣を持った隻眼の男がうろついていてね」
隻眼の男と聞いて、ノウェはぎくりとする。同一人物だろうか。ジスモアの言っていた隻眼の男と。養父オローを惨殺した……。
「こいつがまた、下手な賞金稼ぎより始末が悪そうな面構えで……おっと」
ユーリックが言葉を切るのと同時に、「あいつらです、騎士様」という声が聞こえてくる。
「おしゃべりが過ぎたようだな」
ユーリックが再び仮面を被る。
「こっちだ」
ノウェはマナにうなずいてみせると、ユーリックの後に続いて走った。ユーリックは確信を持った足取りで右に左にと入り組んだ路地を駆けていく。ほんの少し前に迷った路地を、今度は難なく通り抜けた。
「こっそり出ていこうと思ったんだが……そう簡単にはいかないか」

裏門から続々と武装した騎士団員が入ってくる。さっきの賞金稼ぎたちが通報したのだ。
「正門は？」
「そっちも似たようなもんだろ。どっちにしても一戦交えなきゃならない。困ったもんだ」
少しも困っていない口調で言った後、ユーリックは背中に担いでいた斧を手にとった。軽々と扱っているが、長剣三本分の重さはありそうな代物である。
「わかった。門まで強行突破だ」
ノウェも剣を抜く。敵は広場を埋め尽くしていたが、三人ならば突破できない数ではない。
「待った。様子がおかしい」
斬り込もうとしたノウェを、ユーリックが低く囁いて止めた。
「おかしいって、どこが……」
疑問の言葉をノウェは呑み込んだ。不意に、隊列の一角が崩れるのが見えたのである。遅れて上がる悲鳴。そして怒号。あいつだ、とユーリックがつぶやく。その言葉の意味を問うことはできなかった。
何かが来る。
本能がそう訴えた。なおも崩れていく隊列。武装した兵士たちの体が吹っ飛ぶ。それは着実に近づいてくる。血飛沫が見えた。剣がいともたやすく鎧の群れを薙いでいく。
「あいつだ……隻眼の男」

血飛沫の向こうに男がいた。顔は定かではない。が、笑っている。兵士たちを瞬時に肉塊に変えながら、男は確かに笑っていた。
息を呑む気配がした。マナだ。白い顔がなおいっそう白い。はっきりわかるほど体が震えている。あまりにも凄惨な光景に怯えているのだろうか。
「いや……来ないで……」
「マナ?」
返事はない。マナはひたすら目を見開き、震えているばかりである。
「戻ろう。とりあえず、あいつをやり過ごしたほうがいい。……まだ戦うわけにはいかない」
まだとはどういう意味だろう。しかし、訊き返す暇はなかった。マナの手を引く。指先が氷のように冷たい。確かに、マナがこの状態では隻眼の男と戦うどころではない。オローの仇を前にして撤退するのは忸怩たるものがあったが。
ユーリックはさっき走ってきたのとは別の路地へと入っていく。正門への近道なのだろう。走りながら、ノウェはマナの様子を窺った。相変わらず顔には血の気がなく、目はどこかうつろである。
「マナ、大丈夫か」
「え。ああ……ごめんなさい」
「しっかりしてくれよ」
正門には裏門を凌ぐ数の兵士が集結しているだろう。そこを突破しなければならないのだ。

いつものマナに戻るまで少し時間が欲しいと思ったが、正門前広場はもう目の前だった。かくなる上は、マナを背に庇いながら戦うしかない。そう腹を括ったときだった。ドラゴンだ、という叫び声が上がった。
「迎えは要らなかったか？」
上空からレグナの声が降ってくる。
「助かるよ。すぐにここを離れたいんだ」
ノウェの言葉が終わらないうちに、レグナは広場に突っ込んだ。ある者は鉤爪に抉られ、またある者は翼に弾き飛ばされ、見る間に隊列が崩れていく。
「早く！　今のうちに！」
ユーリックとマナをせき立てて、レグナに駆け寄る。その周囲にはもはや生きた兵士は残っていない。ただ骸が転がっているばかりだった。
「いいえ。行かせないわ」
逃げ惑う兵士たちの間から、凛とした声が響いた。
「ノウェ、目を覚まして！」
兵士たちをかき分けるようにして、エリスが近づいてくる。
「その忌まわしき女から離れなさい」
「忌まわしき？」
「ええ、そうよ。その女に世界が救えるはずないの」

　確信に満ちた表情だった。こんな顔をしたエリスをどこかで見たことがある。そうだ、気炎の直轄区でマナを処刑しようとしていたときの……。

「マナ、おまえこそが十八年前に世界を破滅に導こうとした張本人なんですものね」

口許（くちもと）に笑みを浮かべてエリスが言い放つ。

「帝国軍、天使の教会、赤い空……すべてこの女の悪行よ」

「まさか」

「いいえ。間違いないわ。わたくし、書庫の文献を調べたの」

「どういうことなんだ？」

　ノウェはマナを振り返った。否定して欲しかった。いい加減なことを言わないでと憤（いきどお）って欲しかった。が、マナは口を開こうとしない。代わりに一喝（いっかつ）してきたのはレグナだった。

「この腑抜（ふぬ）け小僧が！　いつまで無駄話につき合っておるのだ！」

　でも、と言いかけたノウェをユーリックが制した。

「とにかく、ここからは早く離れたほうがいい」

　言われるままにノウェはマナの手を引き、レグナの背によじ登った。そうだった。今はここを脱出するのが先決だ。

「ノウェ！　待ちなさい！」

　エリスが必死で追いすがろうとしていたが、地を這（は）う者が翼に敵（かな）うはずがない。エリスの姿はみるみる遠ざかっていった。

騎士団の艇を振り切り、しばらく飛んだ後、森に降りた。降ろして欲しいとマナが言い出したのである。

「エリスの言ってたことは本当なのか」

地上に降りるなり、ずっと呑み込んでいた言葉をノウェは吐き出した。問い詰めずにはいられなかった。しかし、マナは答えない。

「マナ！　どうなんだ！」

「私……」

「嘘だろう？　嘘だって言ってくれよ！」

マナの赤い瞳を覗き込む。その瞬間、思い出した。砂の村での会話を。目覚めたときには自分の名前以外思い出せなかったとマナは言った。だとしたら、いくら問い詰めてもマナに答えられるはずがないのだ。

でも、とノウェの内にまた疑念が生まれる。ならば、なぜマナは否定しないのだろう。それとも、記憶を失ったという話そのものが嘘なのか。

ノウェはマナの両肩を掴んだ。何か言ってくれと、声にならない叫びを上げながら。

「今までありがとう」

マナはそっとノウェの手をほどき、背を向けた。引き留めることもできず、ノウェはただその後ろ姿を見つめる。なぜ、何も言ってくれないのか。弁解できないなら、せめて懇願し

て欲しかった。私を信じて、と。
マナは足早に去っていく。一度も振り返ることなく。
「おいおい。いいのか、ノウェ」
ノウェは黙って頭を振る。この猜疑心と不信感を拭い去ってくれるものは、マナ自身の言葉しかない。その彼女に背を向けられてしまった……。
それ以上、ユーリックも、そしてレグナも何も言おうとはしなかった。

その夜は、そのまま森の中で朝を待った。眠るようにとユーリックに言われたが、結局のところ、ノウェは一睡もできなかった。
「そういえば、あの町で妙な声を拾ったぞ」
思い出したようにレグナが言った。
「声？」
「人の思念のようなものだ。まあ、それはいい。ただ、気になる言葉だったのでな。宝光、城砦……だったか」
「宝光って、直轄区のことか？」
神水の鍵を壊した後、次の行き先は宝光の直轄区だとマナは言った。錆の町へと向かったのは、宝光の守護者についての情報を得るためだった。
「あそこには厄介なやつがいるんだよなあ」

それまで黙っていたユーリックが口を挟んでくる。
「厄介？」
「ああ。宝光の守護者、ヤハってやつがな」
やはりユーリックは直轄区に関する情報を持っていたらしい。マナが去った今になってそれがわかったのは、何とも皮肉な話だった。
いや、待てよ、とノウェは思い直す。
「宝光の直轄区に連れていってくれないか。場所は知ってるんだろう？」
「そりゃあ、知ってることは知ってるが……何をする気だ」
「鍵を壊す」
直轄区から人々を解放すること。マナがいてもいなくても、その目的に変わりはない。いや、マナがいない今だからこそ、やらねばならないと思った。マナに唆されたからでなく、自分自身の意志で鍵を壊していることを証明するために。
「なんだ。鍵をぶっ壊してる連中がいるとは聞いていたが、ノウェたちだったのか」
ユーリックはそう言って、ふと黙り込んだ。いつになく真剣な表情が浮かんでいる。が、すぐにそれはいつもの笑いの中に隠れてしまった。
「面白そうだな。うん、そいつは面白い」
何度か自分で自分の言葉にうなずいた後、ユーリックはノウェに向き直った。
「案内してやるよ。ヤハのところへ」

その瞳には、今までに見たことのない色が宿っていた。

## 3

美しいものを壊したくなるのは人の本性なのだろうか。おとぎ話の継母(ままはは)が必ず美姫(びき)を虐(しいた)げるように。単なる嫉妬(しっと)だけでは説明のつかない残虐な破壊衝動。おそらく人ならば誰もが心の奥底に秘めている。

「美しいこと、それ自体が罪なのか……」

聖宝玉の煌(きら)めきを眺めながら、ヤハは独りごちた。聖壇を照らす炎を受けて、それは血の色に輝いている。

不思議な石だった。炎に照らされれば赤く、月の光のもとでは白く、陽光を受ければ七色に輝くのである。まさに至宝と呼ぶにふさわしい。が、ヤハは時折、この石を粉々に叩き壊してしまいたい思いに駆られる。この煌めきが己の内に眠る何かを激しく揺さぶるのだ。

「……殺ス？　ニンゲン、殺スノ？」

いつの間にか、ヤハの足許に小さな魔物がいた。身の丈は子供ほど、頭には長い角が一本、青い手にはつるはしを握っている。ヤハの契約相手、ノームである。ヤハが心の内に暗い衝動を覚えたとき、それを読み取ったかのようにノームは姿を現す。

「いいえ。残念ながら今は……」

ヤハが皆まで言い終わる前に、ノームはつるはしを振り立て、地団駄を踏む。

「殺ス！　殺ス！　ニンゲン殺ス！」
「困った子だ。仕方ありませんね。少し隠れておいでなさい」
ノームの姿がかき消える。誰か、とヤハは呼ばわった。直ちに兵士の一人が現れる。
「ヤハ連隊長殿、お呼びでありますか」
「扉を閉めて、こちらへ」
はっ、と兵士は短く答えて、扉を閉めた。
「そう。それで良いのですよ。早くこちらへ」
ぎくしゃくとした動きで歩み寄ってくる兵士を見て、まるで傀儡（かいらい）のようだと思う。いや、実際、傀儡なのだった。ひとたび視線を合わせた者は決してヤハに逆らえはしない。
「子供たち、もういいですよ」
兵士の足許が盛り上がり、いくつもの頭が生えてくる。つるはしを手にしたノームたちが兵士を取り囲む。
「殺ス！　殺ス！　殺ス！」
ノームたちは歌うように声を揃え、一斉につるはしを振り上げる。兵士が恐怖に顔を歪（ゆが）ませる。が、彼はその場から動けない。声をあげることすらできない。ヤハが彼の動きを封じているのである。耳障（みみざわ）りな悲鳴など聞きたくなかったし、抵抗されるのも鬱陶（うっとう）しい。
幾本ものつるはしが兵士の体に食い込んだ。血が噴き出す。兵士が倒れる。ノームたちの動きは止まらない。兵士はずたずたに引き裂かれ、無数の肉片に変わった。

「残酷な子供たちですね、全く」

苦笑しながらも、心のどこかで羨んでいた。子供のころの自分に、ノームのような力があれば。千々に引き裂いてやりたい大人など数え切れなかった。ノームたちはあのころの願いを叶えてくれているのだ。大人たちに弄ばれ続けた、あのころの。

ヤハは満足そうに笑ってノームたちを見下ろした。

ヤハは六歳で孤児になった。帝国兵に両親を殺されたのである。帝国軍と連合軍の戦が終わる一年前のことだった。

父が何を生業としていて、母がどんな女性だったか、ヤハはあまり覚えていない。ただ、町はずれの小さな家に帝国兵が踏み込んできたときのことだけは覚えている。幼いヤハの目の前で、両親は斬殺された。

ヤハが殺戮を免れたのは偶然でも幸運でもなく、単に帝国兵の一人が怪しからぬ性癖の持ち主だったためである。その兵士はヤハをさんざんに弄ぶと、その場に置き去りにした。翌日、駆けつけた連合軍によって保護されるまで、ヤハは両親の骸のそばでただ泣きじゃくっていた。

祖父母はすでに亡く、また他に親類縁者もなかったヤハは孤児院に入れられた。平和な時代と違って、孤児院の環境は劣悪だった。戦火は日々拡大し、多くの命が失われていた。親を亡くした大勢の子供たちが狭い建物の中にひしめき合い、食べるものも着るものもろくに

行き渡らない。雨露を凌ぐ屋根があるだけまし、という状態だった。

しかし、何よりヤハを苦しめたのは空腹でも寒さでもなく、夜ごと見る悪夢だった。血に塗れ、無念そうに目を見開いていた両親の骸が、帝国兵のぎらついた赤い目が、ヤハに取り憑き離れようとしない。夜中、自分の悲鳴で幾度も目を覚ました。

そんなある日のことだった。その夜もヤハは闇の中で体を丸めて震えていた。ふと気がつくと、背中をとんとんと叩く手がある。驚いて目を開けると、頭を撫でられた。大人ではない。自分と同じ子供の手である。

「いいから、目ぇつぶってろ」

囁く声も、あやすように背中を叩く手も、ひたすらに心地よかった。

「おまえ、全然寝てないだろ。心配すんな。もういやな夢は見ない。見ても、すぐ起こしてやるから」

うん、と答えてヤハはおとなしく目を閉じた。もう大丈夫、怖い夢は見ないと思えた。実際、再び目を開けたときには朝になっていた。

その後、悪夢にうなされるたびに、彼がヤハを寝かしつけてくれるようになった。その少年はヤハよりほんの少し年嵩に過ぎなかったが、孤児院暮らしは長いのだと笑って言った。まだ赤ん坊だったころ、襤褸に包まれて孤児院の戸口に捨てられていたらしい、と。

「ちょっと前にも、おまえみたいなやつがいたんだ。毎晩、泣いて飛び起きるやつがさ」

「その子、今はもう平気なの？」

「まあな」
彼はふと口ごもり、目を伏せた。
「もう死んでるからな。夢なんか見ない」
「そう……なんだ」
「風邪(かぜ)をこじらせて、あっという間だった。ここはそういう場所なんだ」
十分な薬もなく、満足な治療も受けられないから、ちょっとした風邪や怪我が命取りになる。毎日多くの子供が送り込まれてくるが、死んでいく子供もまた多い。
「だからさ、ちゃんと食って、ちゃんと寝ろ。って、ろくに食い物なんてないけどな」
もう仲間が死ぬのは見たくないと、彼、ユーリックは寂しげにつぶやいた。

戦が終わってまもなく、ヤハは孤児院を出ることになった。富裕な未亡人に引き取られたのである。ただ、彼女は慈愛の心からヤハを引き取ったわけではなかった。少女のように美しい顔立ちのヤハを手許に置いて鑑賞し愛玩(あいがん)するため、露骨な言い方をすれば孤閨(こけい)の慰みとするためである。
それはヤハも承知の上だった。寒さと空腹に悩まされる暮らしから抜け出せるのならと思った。どこにいても、好色な視線を向けてくる大人はいる。容貌(ようぼう)の美しさだけでなく、どうやら自分には人の劣情を刺激する何かがあるらしい。そんな大人たちに何の報酬もなく弄ばれるくらいなら、その代価をきちんと支払ってもらおうと決めた。

そもそも自分は両親とともに殺されているはずだった。あの帝国兵の行為はおぞましいものだったが、引き替えに生き延びることができた。それは代償ではなく武器なのだ。ならば、その武器でもって望むものを手に入れればいい。

結局、未亡人のもとで暮らしたのは一年足らずだった。彼女に湯水の如(ごと)く金を使わせ、その資産が乏しくなると、ヤハは他の男とともに出奔(しゅっぽん)した。未亡人の手を逃れるという目的が達せられると、今度はその男を捨て、とある貴族に取り入った。男であれ女であれ、利用できる者は利用した。

やがてヤハは地位や権力ある者の庇護(ひご)を受けるのではなく、自分自身がそれを手にしたいと思うようになった。力が欲しかった。己の体を差し出さずとも望むものを手にできる力が。

その目的を果たすため、ヤハは封印騎士団に入った。もちろん、正式な手続きを経ての入団ではない。騎士団の中でそれなりの立場にある者を色香で迷わせれば事足りた。剣の腕など必要なかった。

入団後、ヤハは異例の出世を遂げた。たやすいことだった。まずは上官を籠絡(ろうらく)し、次には要職にある者たちに体を投げ出した。

人は弱い、とヤハは思う。そして、醜悪だ。己の体に群がる者たちのなんと浅ましいことか。自分が色情狂と陰口を叩かれていることは知っている。誰彼構わず閨(ねや)を共にすると、蔑(さげす)む者がいることも。が、その者とて、誘えば決して拒みはしないのだ。所詮(しょせん)、人は快楽に背を向けることなどできはしない。

ならばそれを利用して何が悪い？　相手を愉しませ、自分もまた愉しんだ結果、望むものが手に入るだけのこと。誰に迷惑をかけるでなし、後ろ指を指される謂われはない……。

ヤハが聖宝玉と出会ったのは、そんなある日のことだった。まだこの地が直轄区と定められる前、山を切り崩し地を均し、城砦が築かれようとしていたその現場。気まぐれに覗き、岩の間に光るものを見た。試しに剣で岩を突くと、たやすく岩は崩れ、輝く石が現れた。幼子の大きさほどもある巨大な宝玉だった。

その美しさに、ヤハはしばしば見入っていた。ふと我に返って、腹が立った。他ならぬ自分を捉えようとした美しさが許せなかった。自分は惑わせる者であって、惑わされる者ではない。怒りに任せて剣を振り上げた。美しいこの石を傷つけ、壊したい。それまで感じたことのない残酷な衝動が湧き上がった。

ふと見れば、その手をとどめる者がある。宝玉の中から現れた小さな青い手が、ヤハの袖を掴んでいた。その魔物は宝玉からするりと抜け出し、ヤハを見上げた。その両目に宿る光に、ヤハは己と同じものを見た。人を傷つけずにいられない冷酷さと残虐さを。

契約をせがまれ、即座に応じた。契約者となれば強大な力が手に入る。騎士団の中で破格の待遇が得られることも知っている。拒む理由などなかった。

しかし、ヤハは契約に代償が伴うことを失念していた。彼がそれに気づいたのは、その夜のこと。快楽を伴うはずの行為が、ただ苦痛でしかなかった。自分もまた愉しめるからこそ、己の体を投げ与えてきた。それは代償ではなく武器であるはずだった。が、その武器は今、

紛れもなく代償へと転じたのだった。
「おや。客人のようですね」
この気配は、とヤハは首を傾げた。ノームたちは兵士であったはずの肉片をしつこく切り刻んでいる。
「めずらしいこともあるもの。まさか、そなたのほうから訪ねてくれようとは」
口許に微笑が浮かんだ。ノームたちにヤハは声をかける。
「そろそろ終わりになさい。客人をお迎えせねば」
この気配。どんなに遠くとも、微(かす)かなものであろうとも、わからぬはずがない。ヤハが絡め取ることができなかった数少ない相手。契約者となり、以前にも増して易々と人を虜(とりこ)にするようになっても、彼にだけはその力が及ばなかった。契約者としてこの力を得たとき、真っ先に跪(ひざまず)かせたかった。誰よりも手に入れたい相手だった。なのに。皮肉な話だ。
「ずっと、そなたに逢(あ)いたいと思っていたのですよ」
ユーリック、とヤハはその懐かしい名をつぶやいた。

4

宝光の直轄区は昼間だというのに闇に包まれていた。分厚い黒雲に覆われているわけでもなく、かといって夜の闇とも異なる。

「この地の光をすべて吸い込む聖宝玉。それが宝光の鍵だ」

では、この地に住まう人々は闇の中で生きていくしかないのか。空には月もなく、星の瞬(またた)きさえもない。決して明けることのない、この夜の中で。

その闇の中、数多(あまた)の松明(たいまつ)に照らされた城砦が浮かび上がっている。

「確か光城郭(こうじょうかく)と呼ばれてたな、ここは」

城砦を守る兵士の数は尋常なものではなかった。弓兵や魔術師の姿もある。また、人間だけでなく魔物の姿も。水城砦(すいじょうさい)の守り程度で驚いていたのが情けなくなった。

「すごい数だ」

「手薄な城砦なんて格好がつかないからな。とは言うものの、どこから攻めたものか」

レグナの炎で焼き払うには弓兵と魔術師の数が多すぎる。あれだけの数に狙い撃ちにされれば、いかにドラゴンとはいえ無事ではすまない。かといって、地上に降りて戦うには、ユーリックと二人で相手にできる人数ではなかった。しかも今は、攻撃魔法の使い手であるマナがいない。

どうしたものか、と考えていると、突然、眼下が動いた。城砦前の広場を埋め尽くしていた兵士たちが一斉に左右へと退いたのである。それは一瞬にして、城門へと至る道となった。しかも、驚いたことに弓兵たちが次々に弓矢を投げ出し始めた。

「中へ入れとさ。宝光の連隊長殿がお招きくださるそうだ。ありがたいこって」

ユーリックが芝居がかった仕種(しぐさ)で肩を竦(すく)めた。まるで、ヤハからの呼びかけを直接聞いた

かのような態度だとノウェは不思議に思う。
「罠じゃないのか？」
「わざわざ道を空け、城門まで開いてくれたんだ。罠だとしても行くしかないだろ」
確かに、さっきまで閉ざされていた城門がゆっくりと開いていくのが見える。
「そうだな」
宝光の鍵を壊すなら、守護者であるヤハと対峙するのは避けられない。行くしかないのだ。
ノウェはうなずいた。
レグナが城門へ向かって滑空する。頭上を通っても魔術師たちは動かない。なるほど、中へ入れと言われているのがよくわかった。レグナが着地しても、兵士たちが斬り込んでくる様子もない。
しかし、ヤハはいったいどんな方法で彼らに命令を下したのだろう？　少なくとも伝令の類ではない。まるで兵士たちが操られているかのようだと思う。まあ、そんなことはあり得ないから、最初から示し合わせていたのだろうか。
光城郭の中でも誰一人、ノウェたちに向かってこようとはしなかった。
「あとはひたすらまっすぐ、らしいな」
ユーリックの言葉を裏付けるかのように、左右に位置している扉はすべて閉まっていた。開いているのは、前方にある扉だけである。
「中で迷わないようにっていう気遣いのつもりなのか？　それとも、余計なものは見るなっ

てことか」
「さあな。おそらく両方だろうよ」
ユーリックはそう答えた後、ふと思い出したように言った。
「いいか、ノウェ。あいつの、ヤハの目を見るなよ」
「どういうことだ？」
「契約者としてのあいつの力さ。いや、代償と言ったほうがいいかもな。好むと好まざるとに拘わらず、目を合わせた者を虜にしてしまう……」
途中、二度ほど階段を登り降りしたものの、あとはひたすら直進し、やがて、それまでになく大きな扉の前に出た。
「着いたぞ。ここだ」
ユーリックが力任せに扉を押し広げる。眩い光が溢れ出す。聖壇に供えられた大きな宝玉の光だった。
「ようこそ。私の守護する宝光の間へ」
目を合わせた者を虜にするというユーリックの言葉を思い出し、ノウェは急いで目を伏せる。
「久しぶりだな、ヤハ連隊長」
ちらりと横目で見ると、驚いたことにユーリックはまっすぐにヤハを見つめている。目を合わせるなと言ったにも拘わらず。ユーリックにはヤハの力が及ばないということなのだろ

うか。

「ユーリック、歓迎しますよ。そちらの救世主殿も。さすがに強い意志と力をお持ちのようですね。殺(あや)めるのは実にもったいない……」

ですが、と勿体(もったい)ぶった口調でヤハは続けた。

「この宝光の直轄区を襲うと仰(おっしゃ)るなら、守護者たる私は戦うしかありません」

「安心しな、ヤハ。こっちもそのつもりさ」

ふっ、とヤハが笑う気配がした。土煙が上がる。地面から何かが生えてくる。いくつも、いくつも。角のある頭だ。それらはやがて小さな魔物へと変じた。

「私の契約相手、ノームです。人間を傷つけるのが大好きな子供たちですよ」

何十体というノームがつるはしを手にノウェとユーリックを取り囲む。

「さあ、遊んでおあげなさい。私の子供たち」

ヤハの言葉を合図に、ノームたちが一斉に襲いかかってくる。剣を抜き、まとめて薙ぎ払う。さほど重量感はない。小さな体がたちまち転がった。が、すぐに起き上がって向かってくる。

つるはしが腕をかすめた。痛みが走る。見た目にこそ鈍だが、実際の切れ味は思いのほか鋭い。まともに食らったら、腕が跳ね飛んでしまうのではないかと思う。

ユーリックも同じことを考えたのだろう。隙(すき)を作るまいと、どちらからともなく背中合わせに構えた。ユーリックが斧で吹き飛ばし、ノウェが剣で薙ぐ。際限なく起き上がってくる

かのように思われたノームたちだが、じりじりとその数が減っていく。
今度は足に痛みが走った。避けきれなかった。いや、間に合わなかったのだ。剣を握る手が次第に重さを増している。これほどの速さで、しかも休みなく剣を動かし続けた経験などない。腕の筋肉が悲鳴を上げていた。
マナがいれば、という思いを必死で追い払い、ノウェは剣を振るい続ける。あと少し、あと数体、そう言い聞かせ、重くてたまらない腕を動かす。
ようやく最後の一体を倒した。……はずだった。
「仕方がありませんね。出ておいでなさい」
足許が大きく揺れた。地面が大きく迫(せ)り上がる。地鳴りとともに、朦々(もうもう)と土煙が舞う。石の巨人、だった。
「これが……あいつらの本体か」
その身の丈は高い天井よりもさらに高い。その身の丈に迫る長さの両腕は、苔(こけ)に覆われた岩でできている。頭にはノームの角に似た大木が生い茂っている。
いったいどうやって、これを倒せばいいのか。岩に剣が突き刺さるとも思えない。斬りつければ、剣が折れてしまいそうだった。
「こいつは俺に任せろ！」
斧を手に、ユーリックが跳んだ。巨人の脳天、葉を茂らせた大木めがけて斧が振り下ろされる。大地が鳴動した。巨人が悲鳴を上げている。全身の大半が岩でできていても、一カ所

だけ、頭は違う。大木を剣で切り倒すことはできないが、斧でなら。
巨人が暴れるたびに、聖壇が、宝光の間が激しく震えた。宝玉の光が明滅するかのように揺れる。
苦し紛れに巨人が己の体を引きちぎって投げつけてくる。人間など一撃で押しつぶしてしまうであろう大岩だ。辛うじてそれをかわした瞬間、閃くものがあった。
「こっちだ！　俺はここにいるぞ！」
ノウェは大声で巨人に向かって叫び、走り出す。巨人がまた大岩を投げつけてくる。
「どこを狙ってる？　俺はここだ」
大きく手を振り、また走る。こうして自分が囮になって、巨人の注意を惹きつけようと思ったのである。少しでも隙ができれば、ユーリックが攻撃しやすくなる。
「こっちだこっちだ！」
大岩がぎりぎりのところをかすめて転がっていく。明らかに自分を狙っている。もはや巨人はユーリックなど眼中にない様子である。
二度、三度と立て続けにユーリックが跳んだ。そのたびに振り下ろされる斧。巨人が咆哮する。
ついに、大木が真っ二つに裂けた。地響きをたてて巨人が崩れていく。砕けた岩はやがて土塊となり、地面に吸い込まれて消えた。
「負け……ましたか」

ヤハが膝をつく。
「ユーリック……。どうしても……そなただけは絡め取ることができなかった。この力をもってしても。いや、そうではない。力でそなたを跪かせたくなかったから……。私は……」
ヤハは微笑んでいた。震える両手を差し伸べ、苦悶の色を浮かべながらも、口許には笑みがあった。
「最期に……逢えてよかっ…た……」
倒れ伏したヤハの体が青白く光る。その背後で、聖宝玉が急速に輝きを失っていく。やがて、ヤハの体が跡形もなく消滅し、聖宝玉は土塊の色に変わった。
「契約者なんかにならなきゃ、友人のままでいられたかもしれないのにな」
ユーリックがつぶやく。ノウェは驚いてヤハの消えた場所へと目をやった。しかし、そこにはもう何の痕跡もない。
「本当は、あんなやつじゃなかったのさ」
騎士団での地位さえ求めなければ、という言葉が微かに震え、途切れた。
光城郭の外へ出たときには、すでに闇は消えていた。青い空が頭上に広がり、明るい陽射しが降り注ぐ。人々が歓声を上げていた。誰もが空を見上げ、少しでも光を感じようと両腕をいっぱいに広げている。
その人々の中に、ノウェは求め続けていた人の姿を見た。全力で駆けた。

「マナ！」
やはりマナはここへ来ていたのだ。宝光の鍵を壊すために。人々に自由と笑顔が戻ればという言葉に嘘はなかった。その事実さえあればいい。たとえ十八年前に何があったとしても。
「ノウェ、私……」
「いいんだ。もう何も言わなくていい」
苦しみ続けた人々にとって、マナは確かに希望だった。それで十分だ。
「いっしょに明命の直轄区に行こう。あそこにも、死の恐怖に怯える人々がいた。初めて彼らに会ったとき……俺は何もできなかった。今度こそ彼らを助けたいんだ」
「でも、明命の守護者は」
「守護者は行方知れずだって聞いた。狙い目だと思わないか」
ふっとマナの表情が翳った。どうしたのだろう。
「話がまとまったみたいだな」
ユーリックが肩を叩いて笑いかけてくる。
「行こうぜ。善は急げってやつだ」
ユーリックがいっしょならば、明命の鍵も必ず破壊できる。マナもいる。きっとうまくいく。ノウェは強くうなずいて、レグナを呼んだ。

Ⅳ



# 命の章

## 1

明命の直轄区は騎士団本拠地である大神殿に近い。空の守りも固い。ゆえに宝光の直轄区から大きく迂回して飛んだ。

「以前より警備が厳しくなったな」

空中兵器の群れをやり過ごしながら、ノウェはつぶやいた。騎士団にいたころ、気が塞ぐとレグナに乗ってこの辺りを飛んだ。そのときは艇など影さえなかった。だからこそ、いい気晴らしだったのだ。しかし今は、身を隠しつつ慎重に飛ばなければならない。息が詰まりそうだ。

「やっぱり騎士団も警戒してるんだろうな」

「なあに。こっちだってお姫様が戻ってきたんだ。問題ないさ」

この軽石頭が、とレグナが呆れた声を出す。

「油断は大過を招くぞ」

「はいはい」

ふとノウェは違和感を覚えた。何かがおかしい、と感じた。なんだろう?

「ノウェ、明命の直轄区とはどんなところなのですか」

マナの声で、ノウェの中で輪郭をとりかけていた疑問が再びばらばらに散っていった。

「あ、ああ。山があって、崖があって、魔物がいて……」

ひでえ説明だな、とユーリックが笑い転げた。
「ま、概ねそのとおりなんだけどな。神水と違って水もある。宝光みたいに真っ暗けってこともない。ぱっと見た感じは長閑な山岳地帯さ。見た目だけはな」
そう、だから彼らを見たときには驚いた。信じられない思いだった。その明命窟が見えてくる。あの崖の下に鉄格子があるのだ。枯れ木のような手が覗いていた……。
レグナがゆっくりと下降を始めた。

以前来たときと同じく、明命窟の周囲には魔物が群れていた。斧を振り回して魔物を屠りながら、ユーリックが眉をひそめる。
「妙だな。魔物が多すぎる」
「そうかな。初めての任務でここに来たときは、こんなもんだったけど」
ただ、あのときに群がっていた魔物はあらかた片付けたはずだった。今もこれだけの魔物がいるということは、またどこからか呼び寄せられてきたということになる。よほどここには魔物の好むものがあるらしい。
魔物を蹴散らし蹴散らし、明命窟の入り口へと向かう。丘陵を越え、崖を下り、なだらかな坂をまた下った。
「門が……開いてる？」
以前来たときには鉄格子があり、しっかりと施錠されていたはずだった。が、今は暗い洞

窟がぽっかりと口を開けている。

「やれやれ、そういうことか」

「そういうことって？」

ユーリックが洞窟の中を指さした。暗がりの中に、鉄格子の残骸（ざんがい）が転がっている。

「無理矢理こじ開けて侵入したってことさ。ご苦労なこった」

「いったい誰（だれ）が……」

首を傾（かし）げつつ、何気なくマナの顔を見たノウェは思わず口を噤（つぐ）んだ。マナが真っ青になって震えていたのである。その唇から、微（かす）かなつぶやきが漏れる。カイム、と。

「カイム？　カイムって、まさかあの？」

十八年前、世界を救ったと言われる英雄の名を知らぬ者はない。

「そして、それが隻眼の男さ」

ノウェは絶句した。それが事実なら、オローは世界を救った英雄に殺されたことになる……。

「お姫様はここに残ったほうがよさそうだな、その様子じゃあ」

しかし、マナは首を振った。唇からは色が失（う）せていたが、口調ははっきりとしていた。

「いいえ。私も行きます」

ユーリックは気遣わしげにマナの目を覗き込んでいたが、やがてうなずいた。

「なら行くとしようか。役者は揃（そろ）った」

「役者？」

ユーリックは答える代わりに斧を構えた。

「この中は魔物の巣窟なんだ。気を抜くなよ」

魔物の巣窟というユーリックの言葉は決して誇張ではなかった。狭い通路を押し合いへし合いしながら魔物が襲いかかってくる。

「カイムのやつ、手当たり次第、鉄格子を壊していったらしいな」

「手当たり次第？」

「明命窟には魔物を閉じこめておく部屋がいくつもある。たぶん、やつは片っ端から部屋を開け放っていったんだろう。そうやって、洞窟の中を隅から隅まで捜せば、いつか聖壇にたどり着く。とんでもない野郎だぜ、全く」

道理で魔物が多かったはずだと、ユーリックは苦り切った口調で言う。

「ちょっと待ってくれ。魔物を閉じこめておくって……何のために？」

「聖花は命の火を吸って咲く」

忘れたのか、とユーリックが静かに答える。

「明命窟には一度に大勢の命を奪うための仕掛けがある。魔物の部屋はそのひとつだ。入り口に頑丈な鉄格子が嵌められているのは、侵入者を阻むためだけじゃない。捕らえた魔物と人とを逃がさないようにするため」

「じゃあ、あのとき見た人々は」
「必死で入り口まで逃げてきたんだろうな。ただ、あの鉄格子を破ることはできなかった」
助けてくれと叫ぶ声が耳元に蘇（よみがえ）った。もしもあのとき、無理矢理にでも鉄格子を壊して彼らを出してやっていたら。
「そんなふうに言うもんじゃない」
「でも！」
「俺（おれ）が見殺しにしたんだ……」
「見殺しにするどころか、罪もない人々の命を吸ってのうのうと生きてるやつもいるんだ」
明命の守護者のことだ。守護者の命と鍵（かぎ）とはつながっている。
「おしゃべりはここまでだ」
ユーリックの声が低くなる。
「この先にはデカい魔物がいる。オーガっていう厄介なやつがな」
生臭い空気が鼻をついた。獣臭さと腐敗臭とが混ざり合ったような。
「下がってろ！」
斧を手にユーリックが駆け出す。と、不意に頭上から何かが降ってくる。鈍い衝突音が響き渡った。太い木の柱が床にめり込んでいる。その柱を握る毛むくじゃらの腕。あれは柱ではなく棍棒（こんぼう）だったのだ。
ユーリックが跳んだ。うなり声が洞窟を震わせる。力任せに振り回された棍棒が壁や天井

を直撃する。その間隙を縫って、ユーリックが跳ぶ。
「ユーリック！」
剣を手に駆け出そうとしたノウェをユーリックの叫びがとどめる。
「来るな！」
ついに斧がオーガの眉間を捉えた。耳をつんざく咆哮とともに黒い巨体が地響きをたてて倒れた。ユーリックが二度、三度と巨大な頭に斧を振り下ろす。オーガが完全に動かなくなると、ユーリックはようやく息を吐いた。
「こんな魔物を閉じこめてたなんて……」
「笑っちまうだろ？　世界を守る封印騎士団が物騒な魔物を飼い馴らしてるんだ」
ユーリックがいなかったらと思うと、ぞっとした。剣一本で果たしてこいつを倒せたかどうか。いや、その前に何も知らずにこの場所へ足を踏み入れ、何も知らずに頭を叩き割られていたかもしれない。
「一体だけで助かったな。たぶん、もう一体はカイムが倒していったんだろう」
ユーリックが顎を決る。その先には通路を塞ぐようにしてオーガが倒れていた。
「急ごう。この分じゃ、やつはかなり奥まで進んでる」
足早に歩き出したユーリックの背中を見て、ノウェはまた違和感を覚える。なぜ、ユーリックはここまで明命窟に詳しいのだろう。炎洞塁も入り組んだ洞窟だったが、ここの通路はそれ以上に複雑で長い。それを迷うことなく進んでいくとは。それも、次から次へと襲い

来る魔物を倒しながら、である。

「なあ、ノウェ」

倒した魔物を蹴り飛ばして道を空けながら、ユーリックがぽつりとつぶやく。

「死ぬって怖いよな。死ねば何もかもなくなっちまう」

「ユーリック？」

「けど、生きることも、楽ってわけじゃない」

それきりユーリックは黙り込んだ。

聖壇への扉が開くなり、轟々という水音を聞いた。

「気をつけろよ。聖壇の周りには深い濠が掘られてるんだ。おまけに濠の中は激流ときてる。普通の人間が落ちたらひとたまりもない」

明命の聖壇は他の直轄区に比べてやたらと広かった。だだっ広い円形の花壇に真っ赤な花が咲き乱れている。その周囲はユーリックの言葉どおり、深くて暗い闇が取り巻いている。水音はそこから聞こえていた。ただ、相当深く掘られているのだろう、水面どころかどこまで闇が続いているかすら定かではない。

その聖壇の片隅に佇む人影があった。

「あいつだ！　隻眼の男がいる！」

剣を構えて走り出そうとするノウェを、ユーリックの手が押しとどめた。

「ちょっと待った。あいつの狙いはこの俺だ。二人は下がっててくれ」
驚いて振り返ると、ユーリックの笑顔が間近にあった。しかし、その笑顔は今まで見たことのない何かを帯びていた。なぜ、と問う言葉が喉の奥で掠れた。
「明命の守護者があなただから。そうなのでしょう、ユーリック」
ノウェは驚いてユーリックを見つめた。が、同時に心のどこかで納得している自分がいた。ずっと感じていた違和感の正体はこれだったのか、と。
「参ったなあ。種明かしは自分でさせてもらいたかったぜ」
ノウェ、と静かに言ってユーリックが目を伏せる。
「俺の罪も重いんだ……」

2

三年前。ユーリックは団長のオローとともに明命の直轄区へと赴いた。任務は神官長一行の護衛である。当時の神官長ヴェルドレは、神官たちを引き連れて頻繁に明命の直轄区へ足を運んでいた。
目的は鍵を設えるためである。世界には毒性を吐き出す危険な五つの地があるという。そのうち四つはすでに鍵が完成し、各直轄区の連隊長の下、厳重に管理されていた。しかし、大神殿から最も近い明命だけは未だ鍵がなかった。
神官長は何度も儀式を執り行い、鍵の完成を急いだらしい。が、儀式は成功を見ず、聖壇

は空のままだったという。

固く閉ざされた扉の内で、如何(いか)なる儀式が行われていたのかは知らない。団長のオローにさえ知らされていなかったと聞いている。ただ、いつも聖壇の間から出てくる人数は、入る人数より明らかに減っていた。おそらく人の命を贄(にえ)とする類だったのだろう。

誰もがそれに気づいていたが、誰もが沈黙を守っていた。オローが神官長に詰め寄っていただの、激しく口論していただのといった噂(うわさ)はあったが、真偽を知る者はいない。

その日、ユーリックは奇妙な胸騒ぎを覚えていた。直轄区へ向かう間も、ずっと落ち着かない気分に悩まされていた。奇妙といえば、オローの様子もどこかおかしかった。が、それを問うてみても、オローは気にするなと答えるばかりである。

やがて一行は明命窟に到着した。門の周辺を中隊が、聖壇の扉はオローとその麾下(きか)数人が守護することになっている。いつものとおり、明命窟を奥へと進んだ。オローの足取りがどこか覚束(おぼつか)ないように思えたが、ユーリックはそのまま見過ごしてしまった。狭い通路と急な階段でここでは誰でも足許(あしもと)が危うくなる。

このとき、オローの不調に気づいていれば。後になって幾度そう思ったかしれない。オローの不調を理由に明命窟を出ていれば、或(ある)いは出陣そのものの中止を進言していれば。いや、転がり落ちる岩を止められないように、動き出した定めを変えることはできなかっただろう。

神官長一行が聖壇の間へと姿を消して、さほど時は経(た)っていなかったと記憶している。門

を固める中隊をたやすく斬り伏せ、明命窟最深部にその男が現れたのは。
「何者だ！」
問うまでもなく侵入者だとわかった。剣を抜き、威嚇しようとした瞬間、ユーリックは血の臭いを嗅いだ。右肩にすさまじい衝撃を感じた。右隣にいた団員の首が転がり落ちる音を聞いた。目の前が赤く染まり、激痛がやってきた。血塗れの剣が再び自分に向けられるのを見た。
「ユーリック！」
斬られると思ったその瞬間、目の前に立ちはだかった者がいる。オローだった。
「逃げろ！」
剣が斜交いに振り下ろされる。体が浮いた。オローもろとも跳ね飛ばされたのだ。男は止めを刺そうとはせず、倒れ伏したオローとユーリックを素通りして扉を開けた。
聖壇から断末魔の叫びが聞こえた。それがユーリックを駆り立てた。死にたくない。必死で起き上がる。頭が大きく揺れる。体を支えきれない。自分が深手を負っていることを知った。死にたくない。死にたくない。死にたくない……。
脳裏をよぎったのは、孤児院の光景だった。目の前で、幾人もの子供が死んでいった。ある者は苦しみの末に、ある者は眠るように死んだ。
死にたくない……！
体の下で、冷たい土が蠢いた。何者かが目覚めようとしていた。すでに瀕死の状態にあっ

たからか、その者の正体はすぐにわかった。
俺の命を奪いに来たんだろう？　いやだ。俺は死なない。死んでたまるか！
死神の手から逃れようと必死で這った。霞む視界に、開け放たれた扉が見える。初めて見る聖壇の間だった。
違う。こっちじゃない。早く逃げなければ。
だが、もう体が動かない。死神が覆い被さってくる。喉を食い破りそうな感覚も、もはや叫びにはなっていない。
いやだ！　死にたくない！
死神が覆い被さったまま蠢いた。ユーリックは瞠目する。死神は命を奪いに来たわけではなかった。言葉はなかったが、死神の求めるものを瞬時に理解した。
否やはなかった。地面に俯したまま、ただただ諾う。
すべての音が遠ざかり、死にも等しい苦痛の後、再び生が訪れた。ゆっくりと五感が蘇る。目に飛び込んできたのは、聖壇に咲き乱れる赤い花だった。そして、耳をつんざくような哄笑。神官長ヴェルドレが狂ったように笑っていた。
「鍵は完成した……！　カイムよ、私の勝ちだ」
男が剣を振り下ろす。しかし、ヴェルドレの笑いは止まらない。
「直轄区はここだけではない。そなたには捜せまい……。決して……捜せま……い……」
膝をつき、それでも笑うヴェルドレを男は蹴り飛ばした。足蹴にし、何度も剣を突き立て

た。そのたびに舞い散る赤い花。ヴェルドレはすでに沈黙している。が、男は剣を突き立てるのを止めようとはしない。

不意に男が振り向いた。ただひとつしかない目が怒りに燃えている。

跳ね起き、無我夢中で走った。オローのうめき声を聞いたような気がしたが、そのまま走り続けた。己を庇（かば）った者を見捨てた罪悪感が後々までつきまとうことを、このときのユーリックはまだ知らない。

どこをどう逃げたのか、気がつけば明命窟の外だった。追ってくる様子はない。洞窟内を熟知する者と初めて足を踏み入れた者の差だった。

契約者となり、明命の守護者となったユーリックはジスモアの口からすべてを知らされた。聖壇の間で如何なる儀式が行われていたのかを。

直轄区の鍵は契約者の命で守られる。しかし、直轄区は五つ、契約者は四人しかいなかった。もともと契約者の数は決して多くない。世界中を捜し回っても、五人めの契約者は見つからなかった。そこでヴェルドレは、自らの手で契約者を作り出そうと企てた。

死神の眠る地を直轄区と定め、契約の力を欲する者たちを集めた。集められた者たちは、聖壇の間で試された。生き延びたいという強い意志を持っているかどうか。死神を魅了するだけの闇を心の内に飼っているかどうか。しかし、そのすべてが契約に至ることなく死んだ。

それが、幾度となく執り行われていた儀式の正体だった。

ヴェルドレの企(たくら)みに気づいたカイムがようやく明命の直轄区を探し当て、襲撃してきたのはその矢先のことだった。そのカイムの襲撃によって、死の恐怖に駆られたユーリックが契約者となった。鍵を壊そうとした者によって、皮肉にも鍵は完成してしまったのである。

　これらの企てをオローは知らずに死んだ。ヴェルドレはオローを警戒して、極秘裏に計画を進めていた。しかし、オローの目は節穴ではなかった。自分の与(あずか)り知らぬところで何かが動いているのを察し、幾度となくヴェルドレを問い詰めた。危機感を覚えたヴェルドレは、オローを抹殺(まっさつ)せんとするジスモアを容認した。

　本来の計画では、ジスモア直属の小隊が明命窟の奥で密(ひそ)かにオローを襲うことになっていた。そのために、ジスモアはオローに毒の清水を飲ませたのである。ところが、カイムの襲撃により番狂わせが生じた。ジスモアの手の者たちが明命窟に侵入したときには、すべてが終わっていたのだった。

「これは貴様のものだ」

　真相を知り、呆然(ぼうぜん)とするユーリックにジスモアは髑髏(どくろ)の仮面を投げて寄越した。

「亡きヴェルドレ猊下(げいか)が儀式のために、その仮面に自らの手で呪(じゅ)を込めた。契約の力を欲する者からは心の闇を引き出し、すでに契約を済ませた者にはその力を増幅させるという」

　おそらく幾人もがあの聖壇の間でこの仮面を被ったまま、命を落としたのだろう。それを思うとおぞましく、仮面に手を触れる気になどなれなかった。

「死にたくないのであろう？　生き延びたくば力が要る」

この先、カイムに命を狙われ続けるのだと脅され、ユーリックは仮面を手にした。ひとたび触れてしまうと、手放せなくなった。

ユーリックが出奔（しゅっぽん）したのは、それからまもなくのことだった。だが、騎士団を離れても、罪の意識から逃れることはできなかった。

オローを見捨てて自分だけが逃げたこと。己の命とともにある聖花が、大勢の命の犠牲の上に咲いていること。それらすべてが無数の棘（とげ）となってユーリックを苦しめた。

俺は……死神だ。俺が生きている限り、罪のない人々が死ぬ。

しかし、それでも自ら死を選ぶことはできなかった。契約によって縛られていたという理由だけではない。ユーリックは死が恐ろしかったのだ。

仮に死んでもすぐに死神がユーリックを蘇生（そせい）させる。本当の意味での死は訪れない。だが、死の恐怖は人間の本能に直接刻み込まれているものらしい。たとえ蘇生できるとわかっていても、死の瞬間には耐え難（がた）い恐怖が襲ってくる。

それを知ったのは、ジスモアに差し向けられた刺客に斃（たお）されたときだった。ジスモアはユーリックを恐怖で縛るために刺客を送ったのである。

生き続ければ罪の意識に苛（さいな）まれ、さりとて死は恐ろしい。己の存在を恥じ、無為に生き続けるしかなかった。そんな地獄にも似た日々の果て、錆（さび）の町でノウェと再会した。

ノウェが直轄区を次々に襲っていると聞き、天の配剤を悟った。ようやく自分を殺してくれる者に出会えたのだと、ユーリックは安堵（あんど）した。

3

俺の罪も重いんだと告げるユーリックを、ノウェはただ見つめていた。
「卑怯者なんだよ、俺は。三年前、直轄区襲撃事件で、カイムにこっぴどくやられた俺は、怖くて逃げ出したんだ。俺を庇って斬られたオロー団長を残して、自分だけな」
「ユーリックも……いたのか」
「それだけじゃない。重傷を負った俺は死ぬのが怖くて死神と契約し、生き長らえた。代償に死なない体を得てな」
「死なない体？　それが代償？　死にたくなくて契約したのに？」
代償ではなく、望みそのものではないか。しかし、ユーリックは苦く笑った。
「死ぬべきときに死ねるっていうのは、実は幸せなことだったのさ。失ってみて、初めてわかったよ。それに、死の恐怖ってやつはそんなものに関係なくやってくる。たとえ蘇生できるとわかっていても死の瞬間は恐ろしい。あんなのは一度でたくさんだ」
いいことを教えてやろう、とユーリックが真顔になって言った。
「俺が死ぬと、死神が体に入り込んで蘇生させる。そのとき……死神と俺が一体化しているときが、俺が本当に死ねる唯一の機会だ。それを逃してくれるなよ」
ユーリックは死ぬつもりなのだ。明命の鍵を壊しに行くことを「面白い」と言い、カイムが侵入したのを知り「役者は揃った」と言った。ここでカイムに殺される気だ。

「俺が死ねば鍵も壊れる」
「いやだ！　俺はユーリックの死なんて望んじゃいない！」
ノウェはユーリックの体を押しやった。
「どいてくれ。俺がやる！」
制止を振り切って聖壇へと走る。話が終わるのを待っていたかのように、カイムが剣を抜く。もっとも、彼がそんな好意を示してくれる理由があるはずもなかったが。
剣を振り上げる。ユーリックが殺されるところなんて見たくなかった。いや、これは時間稼ぎに過ぎない。カイムと戦うことで、決断を先延ばしにしようとしているだけだ。
自分は明命の鍵を壊すためにここへ来た。ユーリックが守護者なら、その命を奪わねばならないこともわかっている。が、どうしてもその事実を受け入れることができない。頭ではわかっていても、心が拒む。
カイムが踏み込んでくる。剣を剣で受け止める。重い。今までに戦ったどの相手よりも強い力を感じる。弾き飛ばそうとしても、押し戻すのがやっとだ。剣が幾度もぶつかり、甲高い音をたてる。
なんだ、これは！
ノウェは目を見開いた。
俺は……これを知ってる。なぜだ？
次にどう来るのか、どこへ来るのかがわかる。まるで何度も剣を交えた相手と戦っている

かのようだ。

たとえばオローやエリスのように。あの二人であれば、仮に姿形は見えなくても、剣を交えただけで相手がわかる。カイムとの剣戟（けんげき）はそれに似ていた。自分はカイムを知っている。

剣がぶつかり合うたびにその思いは強くなる。

なぜ……？

カイムの顔にもまた驚愕（きょうがく）と戸惑いが浮かんでいた。なぜだ、と言いたげにノウェを見返してくる。ほんのわずかに剣先が鈍る。それを見逃すノウェではなかった。

右寄りから、カイムにとっての左側から突っ込んだ。隻眼のカイムにはそこが死角になる。

剣を握る手に鈍い衝撃を感じた。剣ではないものを捉えた感触。確かに手応（てごた）えがあった。頽（くずお）れるようにカイムが膝をついた。

やったか？

肩で息をしながら、ノウェはカイムを見下ろした。と、カイムが不意に顔を上げた。強い光を帯びた隻眼がノウェを射抜く。剣が迫ってくる。避けきれない。

だめだ。殺（や）られる……！

身を固くした瞬間、ユーリックが両手を広げてノウェの前に立ちはだかった。カイムの剣が叩きつけるように振り下ろされる。ユーリックもろとも地面に転がる。背中に衝撃がやってくる。手にしていた剣が跳ね飛ぶ。

ノウェは必死で起き上がった。手で剣を捜す。カイムが歩み寄ってくる。止めを刺すつも

りなのだ。

が、突然、カイムの視線が横に逸(そ)れた。つられてノウェも目をやる。ユーリックが倒れている。その体から緑色の陽炎(かげろう)が立ち上っている。

ユーリックが上体を起こした。よろめきながら、立ち上がる。切り裂かれた上着がだらりと垂れ下がる。露(あら)わになった胸に、ぽっかりと黒い穴が空いているのをノウェは見た。生きている人間には決してあり得ない、虚(うつ)ろな空間。錆の町で賞金稼ぎの男たちに悲鳴を上げさせたのはこれだったのだ。その黒い穴を紋章が取り囲んでいる。傷跡だと思っていた、首から頬(ほお)にかけての黒い筋は契約の紋章だった。

カイムの目がわずかに大きくなる。が、すぐに思い直したように剣を構え直している。剣が走った。ユーリックの体を剣先が切り裂く。緑色の陽炎が膨れ上がる。ユーリックが自らカイムへと歩み寄っていく。あたかも、早く殺せと言わんばかりに。

カイムの剣がまたユーリックを切り裂いた。それでもユーリックは止まらない。今度は剣がまっすぐにその身を貫いた。

陽炎が激しく揺らめく。いや、陽炎ではない。死神だ。ユーリックに取り憑(つ)いている死神が剣を突き立てられ、もがいている。死神の腕が苦しげに空を掻(か)く。緑色の体が苦痛から逃れようとするかのように反り返る。

唐突(とうとつ)に陽炎が消えた。

その横顔に笑みが浮かぶのをノウェは見た。渾身(こんしん)の力でユーリックがカイムに体当たりを

食らわせた。カイムの体が宙に浮き、聖壇を囲む闇へと落ちていく。闇の底で水音がした。
安堵したかのように、ユーリックはゆっくりと倒れた。
「ユーリック！」
我に返って、駆け寄った。が、すでにユーリックの顔には死の色が濃く表れていた。
「オロー団長は……こうやって俺を庇ってくれたんだ。これで、少しは……償えたか」
やっと笑ったな、と言ったときの優しいまなざし。ずっと昔、池の畔で笑いながらじゃれ合ったときの。錆の町で再会したときの驚きに満ちた声。すべてが一瞬に蘇り、ノウェの胸を締めつけてくる。
「いやだ！　逝かないでくれ！」
無茶言うなよ、と掠れた声でユーリックが答える。
「人間の生きる意味が罪を乗り越えるためだとすれば……俺はもう十分なんだ。もう……いいだろう？」
ノウェはただただ頭を振る。いやだ、いやだ、いやだ……。
「じゃあ……な」
穏やかに微笑みながら、ユーリックが瞳を閉じる。聖花が一斉に散った。赤い花びらが舞い、消えていく。明命の鍵は壊れた。守護者の命とともに。
空っぽになった両手を見つめ、ノウェは泣いた。



明命窟の外には、何ひとつ変わらない光景が広がっていた。神水のように川に水が戻るでなく、宝光のように闇が消えるでなく。緑の丘陵と切り立った崖、そして青い空。だが、確かに明命の鍵は壊れた。ひとつの命が失われたのだ。

人の命を奪うって……こういうことだったんだ。

「いや……死ぬのはいや……」

神水の守護者ハンチの声が蘇った。両手を差し伸べ、笑みを浮かべて死んでいった宝光の守護者ヤハの姿も。

彼らの命と引き替えに、大勢の命が救われたはずだ。人々は喜び、幸せそうに笑っていた。しかし、一方で自分は別の命を奪った。死にたくないと願い、必死で生き延びようとする命を。それもまた事実なのだ。

「マナ……俺たち、もう進むしかないんだな」

ここで立ち止まれば、ユーリックの死が無駄になる。この手で奪った守護者たちの命も。ならば、あとは一人でも多くの人を苦しみから解放するしかない。

「ええ。そこに未来があります。きっと」

マナの言葉が沈みかけた心に力を与えてくれた。マナがいてくれてよかったと、改めて思う。

「小僧、あのお調子者の男はどうしたのだ?」

ノウェたちの姿を認めたのだろう、レグナが舞い降りてくる。

「ユーリックは……」
言葉が詰まった。胸の奥が苦しくて、ノウェは歯を食いしばる。代わって答えたのはマナだった。
「ユーリックは亡くなりました。明命の直轄区を解放するために」
そうか、と短く答えて、レグナが翼を畳む。
「背の荷が軽くなったのは喜ばしいが、戦力は大きく削がれたな」
「それでも俺たちは進むよ。ユーリックの死を無駄にしたくない」
言葉にすると、不思議と力が湧いた。決意がより確かな形に変わるのを感じた。
「ならば伝えよう。先ほど、天時の直轄区へ向かえという声を拾った」
「声？　そういえば、前にも言ってたな」
あのときにはただ聞き流し、それ以上は尋ねなかった。レグナには聞き取れるが、自分には聞き取れない。ならば人の言葉とも竜の言葉とも違うのだろうと、なんとなく納得し、興味を失っていた。
「声って、何なんだ？」
「契約者同士が交わす思念のようなものだ。それが儂のところへ飛んできた」
契約者と聞いて、ユーリックを思い浮かべた。宝光の直轄区で、まるでヤハの声を聞いたかのようだと思ったが、実際にユーリックはヤハの声を聞いていたのだ。
「その声は、ご丁寧に直轄区の場所まで告げてきた。天時の直轄区と、天時塔と」

どうする、と言いたげにレグナがノウェを見つめてくる。ノウェはうなずいた。

「行こう」

最後の直轄区へ。人々を縛る最後の鎖を断ち切るために。



# V 刻の章

# 1

闇(やみ)がいつから其処(そこ)にあったのかは知らない。ふと気づけば間近に寄り添っていた。ただ沈黙したまま、ひっそりと。

別段邪魔には思わなかったから放置した。やがて寄り添う闇に心地よさを覚えるようになった。いつしか互いの境目がぼやけ、どちらが自分でどちらが闇か、定かでなくなった。それほどまでに近しい存在であったから、契約など考えたこともなかった。おそらく、闇にとっても契約などどうでもいいことだったに違いない。

互いの半身とならずとも、闇は常に共にあった。念じるままに形を変え、望むままに動いた。闇の力は己の力であり、己の意志は闇の意志でもあった。

「契約もなしに、闇の精霊(シェイド)をここまで自在に操るとは」

神官長ヴェルドレの感嘆も、どこか的はずれに思えてならなかった。操っていたわけではない。己と闇はもはや同一の存在だったのだ。

「契約者とならぬか、ジスモアよ」

天時の直轄区という名称が定められる以前のことである。完成間近の天時塔、その最上階の一室で、ヴェルドレはそう切り出した。周囲には誰(だれ)もいない。人払いしたのではなく、この塔にはまだ警備兵が配置されていなかった。ジスモアだけが神官長の身辺警護を理由に天時塔への同行を許されていた。

塔を完成させるには強力な呪（じゅ）を施さなければならない、呪を施す前に妄（みだ）りに人を近づけるのは好ましくない、警護は腕の立つ者一人で良い……ヴェルドレはそう主張していた。だが、ジスモアはそんな表向きの理由を鵜呑（うの）みにしてはいなかった。

「そなたはおそらく、私が知る限りで最強の契約者となるに相違ない。そなたには、そしてシェイドにはその力がある」

「神官長ともあろう御方がそのようなことを軽々しく口になされるとは」

お戯（たわむ）れをと返せば、少しも心を動かされた様子がないのを見てとったのだろう、ヴェルドレは話を変えてきた。

「六年前、人に代わり赤き竜が女神となったことは知っておろう?」

「猊下（げいか）が崩壊寸前の世界をお救いなされたという……」

「赤き竜の話をしておるのだ。私のことはよい」

どうやら当時の話はヴェルドレにとって、決して愉快なものではないらしい。この話題に関しては慎重に言葉を選ばねばと、ジスモアは心に留め置いた。

「ドラゴンの力は強い。人の力で抑えておけるものではない。しかし、そのように危険で不確かなものを封印に据えて良いものか?　世界の行く末を左右する要（かなめ）と為（な）して良いものか?」

否、とヴェルドレは己の言葉を己でうち消した。

「要と為すなら人の手で、我らの手で抑えねばならぬ。ゆえに私は、赤き竜を霊的に分離することにした。いかにドラゴンが強大といえども、分離分割してしまえば人の力で封じられ

る」
「そのようなことが……」
ジスモアの問いを途中で遮り、ヴェルドレはうなずいた。
「赤き竜の五感を霊的に分離し、それぞれに『鍵』を掛ける。力の源である五感を封じれば、ドラゴンから一切の自由を奪うことが可能になるのだ」
「一切の自由を奪い……抑え込む？」
「左様。五感を封じた場所を直轄区と定め、赤き竜の本体を封じた場所を聖地と定む」
「そして、それらの地を厳重に守れば、世界の安寧は保たれる……」
「ゆえに五感を封じた『鍵』は決して解かれてはならぬ」
言わんとしていることが、ジスモアにもわかりかけてきた。ヴェルドレは封印を守るための封印を新たに設えようとしているのだ。
「五つの鍵を守る者は常人を超える力を持つ者、契約者こそふさわしい。直轄区は五つ、つまり契約者は五人要る」
なるほど、それが先刻の誘いか。契約者にならぬかという言葉をジスモアは思い出した。が、受け入れる気など更々ない。契約とは互いの心臓を交換し、互いの命を共有する行為である。己が傷つけば相手もまた傷つき、相手が死ねば己もまた死ぬ。代償として、その者にとって最も大切な機能を奪われるとも聞いている。
どうだ、と再び問われて、ジスモアは否と答えた。

「平にご容赦を。そのような大任はとてもとても……」
差し出すものと受け取るものを秤にかければ、これ以外の選択はあり得ない。世界のために己の命を捨てるほど、自分は愚かではない。そのような愚か者はオロー一人でたくさんだ。
「オローを見返したくはないか？」
今まさに心に思い浮かべた名を出されて、ジスモアは些か狼狽した。
「この企てを知る者は、騎士団ではそなた一人。団長であるオローは知らぬ」
なぜ、こんな唆すような言い方をするのか。自分とオローの間にあるものは、誰も知らないはずなのにと、ジスモアは訝しく思う。
「そなたのオローを見る眼差しに気づかぬ私ではないぞ」
なるほどと納得した。しかし、ヴェルドレはすべてを見抜いたわけではないはずだ。すべてを知ったとしたら、このような話を持ちかけてくるはずがない。封印騎士団の一員たる自分が、かつて帝国兵であったことを知ったならば。

帝国兵であったころの記憶は、決して鮮明なものではない。奇妙なことだが、所々ぼやけていて、思い出せない部分が多い。自分がなぜ帝国軍に入ったのか。その辺りがどうしても思い出せなかった。気がつけば帝国兵として戦場に立っていた。
その戦場での記憶もほとんどが曖昧なものだった。言われるままに進軍し、言われるままに連合軍と戦った。場所がどこであったのか、いつだったのか、ほとんど忘れてしまってい

る。少数の例外を除いて。

その少数の例外だった。あの女騎士にまつわる記憶は。

女神の神殿へ侵攻する途中、ジスモアの隊は連合軍と衝突、激戦となった。当時は帝国軍が確実に連合軍を追い詰めていた。所詮、連合軍など各国の寄せ集め部隊に過ぎない。結束も緩く、士気も低い。帝国軍側の兵士は誰もがそう思っていた。

が、あの女騎士は違った。ジスモアは彼女の名を知らない。双刀の金獅子と呼ばれたオローが名を馳せていたのと対照的に、彼女の名はほとんど帝国軍側に知られていなかった。双刀の金獅子とともに駆ける女騎士の姿を、誰もがその目に焼き付けていたにも拘わらず。

彼女は血腥い戦場には似つかわしくない美貌の持ち主だった。それでいて、男に引けを取らない勇猛さを兼ね備えていた。とりわけ彼女の振るう槍はすさまじく、その一振りで数人の兵士を薙ぎ払うほどだった。

あの日、女騎士の傍らに双刀の金獅子の姿はなかった。しかも兵力の差は歴然としていた。ほんの申し訳程度に干戈を交えただけで、連合軍は敗走した。が、件の女騎士は一人その場に踏み留まり、槍を振るい続けた。無謀この上ない行動の理由は、おそらく背後に控えた寒村を守りたい一心だったのだろう。

愚かな、とジスモアは呆れ果てた。彼女一人が抵抗したところで、こちらの人数には敵うまい。いずれにしても、村は殲滅される。結果は同じなのだから、彼女の行動は無意味どころか愚行そのものだった。

それだけに、女一人に手こずる友軍が不甲斐なく思えた。何を馬鹿正直に正面から戦いを挑む？　一斉に取り囲んでしまえば、希代の槍使いといえども為す術などないだろうに。なのに、彼女の目の前には屍の山が築かれている。愚か者どもの山だ。

いや、そうとも言いきれないかもしれない。時折、戦場で何をしているのかわからなくなることがある。不意に意識が途切れ、気がついたときには血塗れの剣を手に立っていたりするのだ。意識を保っていても、まるで何かに操られるかのように勝手に剣を持つ手が動くこともある。自分一人に限った話ではなく、他の者たちも同様の経験があると聞いた。戦にのめり込み過ぎているのかもしれない。今、自分はたまたま意識を保っているが、あの屍の山の中には、訳もわからず死んだ者もいるのだろう。

いずれにしても、判断力を保っている者があの女騎士を仕留めるべきだ。ジスモアは密かに彼女の背後に回った。さすがに疲労困憊していたのだろう、彼女は全く気づかない。ただ一心に槍を振り回している。

気配を悟られないように静かに歩み寄り、一息に剣を振り下ろした。女騎士の槍が止まる。それを待っていたかのように、正面からも剣が突き出される。血に濡れた切っ先が彼女の背を突き破ってくる。頭が大きくのけぞった。そこを真横から力任せに刎ねる。重い手応え、そして鈍い音とともに、首が転がり落ちる。金色の髪が解けて広がった。

愚か者の最期だ。

昏い喜びに胸を躍らせながら、ジスモアは骸が握りしめている槍を奪い取った。思うとこ

ろがあったわけではない。ただ、死してなお槍を手放さぬ頑迷さに嫌悪感を覚えただけだ。
かつて女騎士であった骸は木に吊された。彼女の首はその足許に転がされ、ただ虚空を見つめていた。彼女が命を捨ててまで守ろうとした村には火が放たれ、村人は女子供に至るまで殺された。
然る後、ジスモアらの軍は本来の目的地である女神の城への進軍を再開しようとした。そこへただ一人、斬り込んでくる者がいた。双刀の金獅子、オローだった。
またしても愚か者めが。単身、敵陣に斬り込んで何になる？
苛立ちと忌々しさとに動かされ、ジスモアは女騎士の愛槍を左手に握った。オローが近づいてくるのを待って、その槍を女騎士の首に突き立てた。
わかっている。貴様はこれを取り戻しに来たのだろう？　だが、もはやこれは人ではない。単なる肉の塊に過ぎぬ。なぜ、このようなものに執着する？
これ見よがしに何度も槍を突き立てた。オローと視線がぶつかった。その双眸に激しく燃えるものを見たと思った。
槍を握る腕に痛みが走った。左肩を斬られたと思ったときには、鳩尾に衝撃があった。左手の槍と右手の剣とが弾け飛ぶ音を聞いた。直後、ジスモアは無様に倒れ伏していた。深手は負っていない。あれほどの腕があれば、一撃で絶命させるなど造作もなかっただろうに、オローは敢えてそれをしなかったのだ。
無傷の右手で体を支え、やっとの思いで起き上がると、槍と首を手にしたオローの後ろ姿

が見えた。友軍の者たちは恐れをなしたのか、誰もが呆けたようにオローを見送っている。
ジスモアは無言のまま、大地に拳を打ち込んだ。幾度も、幾度も。
愚か者に情けをかけられた。その事実は、激しい屈辱となってジスモアを苛んだ。後にどれほど連合軍の兵士たちを惨殺しても、それは消えなかった。
その後、戦は連合軍側の勝利に終わり、ジスモアは敗残兵として捕らえられた。多くの元帝国兵たちがそうであったように、ジスモアもまた強制労働に駆り出された。戦によって焼土と化した土地の復興だけでなく、新たな土地の開墾もまた急務だったのである。
極寒の地での重労働に耐えかねて、ジスモアは仲間数人と逃亡を図った。仲間の大半が捕らえられたが、ジスモアは生き延びた。仲間を盾にし、或いは囮にし、追っ手を振りきった。最初からそのつもりで、ジスモアは共に逃亡する者を募ったのである。
自由を手にしたジスモアは、身寄りのない男を殺害し、そのまま彼になりすました。ジスモアの名もその男のものである。新たな名前と生活を手に入れた。が、それでも時折、あの屈辱感が蘇り、胸の内を灼いた。殺さずに見逃すことで、オローは相棒を殺した者への復讐を果たしたのだ。
ついにジスモアは封印騎士団入りを決意した。試さずにいられなかった。自分と対峙したとき、オローが如何なる態度をとるか。
自分もまた愚かな行動をとっていることは百も承知だった。それでも、熾き火のように燻り続ける屈辱を消し去ってくれるのは、その愚行以外にないと思った。憎悪や憤怒、怨恨と

いった感情に突き動かされるオローを見れば、自分を苛んできた屈辱は間違いなく消える。それで殺されても本望だった。いや、むざむざ殺されるつもりはない。あのときは油断したが、剣の腕では互角だと自負している。

組織されたばかりの封印騎士団の一員となり、ジスモアはその機会を待った。そして、ほどなくオローとの対面が叶った。が、ジスモアが望むような言動は一切なかった。オローは静かにジスモアを見つめ、言った。

「今は手を携え共に戦う身。戦場での出来事は水に流そう」

一瞬、言葉を失ったが、ジスモアはすぐにその場で膝を折った。オローの言葉に感激したふりをして、忠誠を誓ってみせた。込み上げる怒りと憎しみを抑えつけ、額ずいた。

この屈辱、決して忘れはせぬ。いつの日か、考え得る限り卑劣な手段を以て貴様を葬り去ってやろう。情けをかけ、赦しを与えたことを悔いるがいい。

以来、ジスモアは表面上はオローの忠実な部下となった。

「天時塔への警護に、誰か腕の立つ者を一人だけ推挙せよと申しつけたところ、オローはそなたを挙げた。私が思ったとおりにな」

ヴェルドレの言葉で物思いから覚めた。同時に腹の底で煮えたぎるものを感じた。忠実な部下を装っているが、あくまで表面上のこと。オローがそれに全く気づかないのが腹立たしい。気づいていながら知らぬふりを通しているのならば、なおのこと許し難い。

「今一度、訊く。オローを見返したくはないか？」
ヴェルドレの目に宿る狡猾な光。もしやこの男はすべてを見抜いているのだろうか。
「オローが武勇に優れた者とはいえ、契約者の力には遠く及ばぬ。密かにその力を手に入れ、オローを己が下に引きずり降ろしてやりたくはないか？」
ヴェルドレは薄く笑い、さらに言葉を重ねた。
「オローは光の中だけに生きる者。闇の深さを知らぬ者。その者から光を奪ってやりたいとは思わぬか？」
神官長であるヴェルドレは、騎士団の長である者に信を置いていないらしい。おそらく、オローが団長の座にあることを快く思ってはいないのだ。この男は利用できる、とジスモアは思った。この男は自分を利用するつもりに違いないが、逆に利用してやるのだ。契約によって失うものと得られるものを比べれば割が合わないと思っていたが、思っていた以上に得られるものはありそうだった。
今は手を結んでおこう。この男の始末は、いずれ望むものすべてを手に入れてから考えれば良い。おそらく相手もよく似たことを考えているに違いないが。
「猊下の御心のままに」
ジスモアの答えに、ヴェルドレは満足そうにうなずいた。
「ジスモア団長閣下！　天時塔周辺の結界が破壊されたとの報告が！」

息せき切って駆け込んできた部下（エリス）の声に、ジスモアはわずかに眉根（まゆね）を寄せた。見れば見るほど、あの女騎士に似ている。何の血縁も、地縁すらないというのに。同じ武器を手にした者同士は似通ってくるのだろうか。

オローが手許で面倒を見ている貴族の娘に、あの女騎士の槍を与えたときには少なからず戸惑いを覚えた。面白くないとも思った。が、団長の座を手に入れてみると、考えが変わった。あの槍を受け継ぐ者が自分に絶対の服従を誓っているのだ。

この娘は槍の持ち主が如何なる最期を遂げたのか、知っているのだろうか。村人を守って死んだ、程度のことはオローが教えたかもしれない。しかし、彼女の首を刎ねた男が騎士団を束ねているとは想像もしていないだろう。

そもそも、この娘は少々思い込みの激しいところがある。ひとたび信じれば、それを決して疑おうとはしない。早い話が騙（だま）されやすいということだ。

竜の子（ノウェ）に右腕を落とされたときもそうだった。彼女は床に転がった腕を見ていたにも拘わらず、籠手（こて）を弾き飛ばされただけで、腕にはかすり傷を負った程度だという言葉を信じた。切り落とされた腕があっさり再生したという事実よりも受け入れやすかったのだろう。受け入れ難いものには目をつぶり、受け入れやすいものだけを信じる。それは本人にとっては短所に違いないが、使役する側にとってはこの上ない長所だった。

「結界塔を破壊したのは、反逆者ノウェと蒼（あお）き竜かと。急ぎ飛行部隊の増援を……」

「構わぬ。捨て置け」

「よろしいのですか」
「地上で迎え撃てばそれで良い。彼奴(あやつ)は生かしたまま捕らえねばならぬ」
捕らえるという言葉を出した途端、エリスの顔に狼狽の色が浮かぶのをジスモアは見逃さなかった。面白い、と思う。オローによく似た目を持つ若造と、女騎士の槍を受け継ぐ娘。この二人が命を取り合うのだ。これ以上の見世物があろうか。
「天時塔の周囲に地上部隊を集結させよ」
畏(かしこ)まりましたと応えてエリスが退出すると、ジスモアは声をたてて笑った。

## 2

天時の直轄区を守る結界は早々に破壊したものの、天時塔を覆い尽くさんばかりの空中兵器には辟易(へきえき)した。
「さすがに最後の直轄区だけあるな」
空の守りが桁違い(けたちが)なのは、聖壇の設置場所が高い塔の中だからだろう。鍵はおそらく最上階にある。空からの侵入者を想定した守りになっているということは。
「騎士団も必死なんだ……」
こんな形で空が戦場になるとは思ってもみなかった。空はいつもノウェにとって、心安らげる場所だった。時折魔物が現れることもあったが、レグナの炎の前には羽虫も同然だった。ノウェはただ解放感だけを味わっていればよかった。なのに、空は今、砲弾が飛び交う危険

な場所となっている。空で出会う者すべてが敵だ。
「蚊柱は鬱陶しいが、まとめて焼き払うのは造作もないこと」
ノウェの沈んだ気持ちを察したのか、言い終わるそばからレグナが炎を吐く。案ずるな、と短く告げてくる声が温かい。守られていることを改めて感じる。炎に巻かれた艇が次々に墜ちていく。たちまち天時塔に至る「道」が開けた。
レグナがいて、マナがいる。何を恐れることがある？　たとえこの空が敵で埋め尽くされたとしても。
「気をつけて！　直轄区の様子が変です！」
マナが叫ぶ。確かにおかしい。飛行部隊は、レグナの炎によって空けられた「道」を塞ごうとしていない。まるで、天時塔へ誘い込もうとしているかのようだ。しかも、空中兵器の配置も変だ。不自然な場所に密集しているように見える。
不意に、密集していた艇が散開した。その動きに気を取られて、他への注意が逸れた。目の前で光が炸裂した。衝撃の後、レグナの体が大きく傾く。被弾したのはわかったが、いったいどこから攻撃されたのだろう。
「砲台か！　抜かったわ！」
天時塔を取り囲むように、五つの砲台が設置されていた。空中兵器による不自然な密集隊形は、これを隠すためのものだったのだ。
「このままじゃ狙い撃ちにされる。降りよう」

塔の上から侵入するのは無理だ。レグナがかなり深い傷を負っているのはわかっている。翼に力が感じられない。物心つく前から共にあった翼である。レグナが何も言わなくても、負傷の程度くらいはわかる。
「ならば蟲風呂に飛び込むとするか。小僧ども、しっかりと掴まっておれ」
墜ちる感覚があった。砲弾を避けるには、追尾が間に合わない速度で降下するしかない。一気に地上が、兵士たちの群れが迫ってくる。地面に激突する寸前で、レグナが頭を起こす。垂直から水平へと、体を圧迫してくる力が方向を変える。鉤爪が兵士たちを引っかけ、薙ぎ倒しているのがわかる。激しい揺れとともに、体が前のめりになる。着地したのだ。
全身に衝撃が来た。レグナの背から放り出されたのだと気づくまでに、ほんの少しだけ時間を要した。叩きつけられた衝撃で、頭がふらつく。
土煙の中、マナの姿を捜す。いた。どちらからともなく駆け寄り、背中合わせに立つ。囲まれているのだ。
レグナが吼えた。マナが杖を振り上げる。突破口だ。間髪を容れずにノウェは斬り込んだ。レグナが負傷した今、己の剣で道を拓くしかない。
「行け！　儂もすぐに追いつく！」
レグナの叫びを背中で聞きながら、ノウェはマナとともに走る。
「なんて数だ……」
思わずつぶやく。天時塔周辺を地上部隊が埋め尽くしていた。上空から見下ろせば、密集

する兵士たちで地面など全く見えないに違いない。

いつの間に、封印騎士団はこれほど大きな組織になっていたのだろう。ノウェの知る限りでは、ここまでの兵力はなかった。だから、躊躇なく直轄区に斬り込んでいけた。遠隔地に派遣された部隊まではわからないが、即座に召集可能な員数ならば把握していると思っていた。が、兵の数は予想を遥かに上回っていた。甘かった。

何を臆しているんだ、俺は！

己を叱咤し、ノウェは跳んだ。上から剣を叩き込む。密集する鎧の群れが吹っ飛ぶ。マナの放つ魔法の爆風が残る鎧を薙ぎ払う。四方からまた鎧の群れが押し寄せてくる。また払う。それを幾度も繰り返しながら、じりじりと天時塔へ向かって進んでいく。

いちいち止めは刺さない。きりがないからだ。とりあえず戦意を削ぎ、動きを鈍らせればそれでいい。見渡せば気が遠くなりそうな数だが、すべてを倒す必要はない。

宝光の聖壇で夥しい数のノームを相手に戦ったのに比べれば。あの厄介な魔物たちに比べれば、相手はただの人間なのだ。

ただの人間……。また魔物と人間を同列に見ている自分がいる。なぜ、自分は人を斬ることにこれほど抵抗がないのだろう？　人の命を奪うこと、それがどういう意味を持つのか、ユーリックの死によって学んだはずだった。なのに、目の前の兵士に平気で剣を向けている。

守る者のため、大義のために手を汚すのは敵も同じだからか？　人々を苦しめている騎士団員たちを討つのは正義だと信じているからか？　いや、そうではない。何かが違う気がす

る。
「ノウェ！」
マナの声で我に返った。雑念を払いのけたくて、ノウェは力任せに剣を振り回す。今は自分が生き残ることだけを考えるのだ。迷いや戸惑いは死を招く。
「きみがいなければ、私はここまで来ることができなかったでしょう」
杖で兵士を薙ぎ払いながら、マナが振り返った。四方を敵に囲まれている状況でありながら、その口許には微笑がある。
「俺だって！」
追いすがる兵士を蹴り払い、叫ぶ。
「俺は、あなたに導かれてここまで来たんだ！」
出会ったときは敵同士だった。しかし共に戦う道を選んだ。
「最後まで、共に行く！」
この戦いが終われば、最後の鍵を壊せば、人々は封印騎士団の作った軛から解放される。痩せ衰え、無気力に座り込んでいた人々に笑顔が戻る。そのためにも、余計なことを考えてはならない。迷ってはならない……。
「行きましょう、ノウェ。私たちの戦いを終わらせに」
うなずく代わりに、ノウェは行く手を阻む兵士たちを一気に薙ぎ払う。マナの言葉が疲れきった腕に再び力を与えていた。天時塔の入り口はまだ遠い。それでも斬り伏せて進む。そ

の決意は少しも揺るがない。
ふと何かを聞いた。爆風に飛ばされる鎧の音でもなく、兵士たちの怒号でもない、遠いどよめきを。何だろう?
押し寄せてくる兵の数が減ったように思えた。叫びが聞こえる。
「マナ様を守れ！」
周囲に群がる兵士たちに狼狽と動揺が走った。横合いから乱入してくる人々が見える。
「我々の自由のために！」
他の直轄区と同じく、強制労働に駆り出されていた人々だ。まともな武器など持っていない彼らが、これだけの数を相手に臆することなく立ち上がった。丸腰に近い状態で武装した兵士に向かっていくのは、誰の目にも無謀だろう。それでも彼らは戦うことを選んだのだ。それほどまでに彼らは自由を渇望している。
「マナ様！　ここは我らが！」
「今のうちに早く塔へ！」
誰もがマナを助けようとしている。ここでもマナは人々の希望なのだ。
「ありがとう」
人々の叫びに応え、マナが振り返る。ノウェはうなずいてみせる。兵士たちがうろたえているのがはっきりとわかる。突破するなら今しかない。
「すまない……。持ちこたえてくれ！」

一刻も早く天時の鍵を壊し、ここへ戻ってくる。人々の志を、人々の命を無駄にしないためにも。そう自分に言い聞かせると、ノウェはマナとともに天時塔へと突っ込んでいった。
入り口を固めていた護衛兵を倒し、ようやく天時塔の扉を開け放った。赤い絨毯(じゅうたん)がまっすぐに白い内扉まで続いている。他に兵士の姿はない。外ではまだ乱戦が続いているというのに、塔の内部は静かだった。
「あの扉の中が……神殿になっています。たぶん」
低く告げるマナの声がひどく緊張している。杖を構えたまま、マナがゆっくりと歩を進める。何かの気配を感じるのだろうか。最初のころは気づかなかったが、マナは人並み外れて物音や気配に敏感だった。そのマナが警戒しているのだから、何かがあるに違いない。
白い扉に手をかけ、どちらからともなく視線を合わせる。マナがうなずく。ノウェは静かに扉を押した。
「ついにここまで来たか、ノウェ」
ジスモアだ。扉を開けるなり、目に飛び込んできたのは。そして、その傍らに控えているのは、槍を手にしたエリスだった。ノウェが剣を構えるのを見て、エリスがジスモアの前へと進み出た。ジスモアを背に庇(かば)うようにして槍を構えるその姿。騎士団を抜けたときからわかっていたが、こうしてはっきりと敵味方に別れて対峙してみると、やはり胸の奥が痛む。
「ノウェ……。まだその女と！」

抑えた声色ではあったが、そこには紛れもなく怒りがあった。
「何を考えているの？　あなたは何を見ているの？　わからない。わたくしにはわからないわ」
「俺はただ、苦しんでいる人を放っておけないだけだよ」
逃げたくても逃げられず、不毛の地で死を待つ人々。母親の腕の中で死んでいった幼子。そういった人々を見て、何かせずにいられなかった。
「そんなこと！　わたくしだって！　だからこそ、封印騎士団として日夜……」
「封印騎士団の中にいたら、見えないことがあるんだ！」
単に自分は見ようとしていなかっただけなのかもしれない。しかし、騎士団員であったころ、生きる気力をなくした人々の存在など想像することすらできなかった。
「嘘よ。言い訳だわ。封印騎士団が行うことに間違いなどありません！」
「本当にそう言い切れるのか？　エリスは封印騎士団がやっていることをすべて知っているのか？」
逃亡を図った村人を処刑し、村への水を止め、或いは星の光すらない闇の中での生活を強いる。そんな実態を知っているのか。訪れた村や町で聞く封印騎士団の評判は最悪だった。騎士団員は蛇蝎の如く忌み嫌われていた。何もかも、騎士団を離れて初めて知ったことだった。
「騎士団がやってることをすべて知ってて、それでも肯定できるのか？　真実から目を背け

て、逃げてるだけじゃないのか」
「わたくしが……逃げている？」
エリスの顔に狼狽の色が浮かぶ。ノウェに向けられていた槍の穂先が戸惑うように揺れる。
「どけ！　馬鹿者が！」
ジスモアがエリスを突き飛ばした。
「罪人の妄言に惑わされるとは！」
すでにジスモアは剣を抜いている。
「余が直々に罰してくれよう」
ジスモアが叩きつけてくる剣を受ける。その瞬間、気づく。ジスモアの右腕が元に戻っていることに。あのとき、確かに腕が床に落ちる音を聞いた。あれは何だったのか。
今はそんなことを気に掛けている場合ではなかった。闇の色をした剣がノウェめがけて落ちてくる。辛うじて受ける。受けてみればたいした重さではない。……カイムの打ち込んできた剣はこんなものではなかった。
「おまえの思い通りになんかさせない！」
ジスモアの剣を弾き返す。剣を握る手が揺らいだところを斬り上げる。妙な手応えを感じたが、構わず斜に斬り下ろす。やはり妙な手応えがある。渾身の力で横に薙ぎ払う。
明らかに肉を斬ったときとは違う感触とともに、ジスモアの鎧が大きく裂ける。剣が落ちる。

「お、おのれ……」

さらに一撃。裂けた鎧が跳ね飛んだ。鎧だけではない。ジスモアが身につけていたものすべてが、がらがらと音をたてて床に転がり落ちた。エリスが小さな悲鳴を上げる。

そこに生身の体はなかった。影を集めたような黒い体。手も足も、顔さえもが闇の色をしている。あの奇妙な手応えの正体はこれだったのかと納得する。いずれにしても、もう終わりだ。次の一撃で終わらせる。ノウェは大きく踏み出す。

「これで……終わりだ！」

ジスモアの右腕が不自然に伸びるのを見たと思った。が、構わず剣を突き出す。剣の先端が何かを捉えた。さっきの奇妙な手応えではない、人間を刺したときの……感覚。

「エリス……？」

目の前にエリスの顔がある。なぜ、エリスがここにいる？　視線を下ろす。己の剣が捉えているもの。血に濡れた剣が生えている場所。

再び視線を上げる。血の気の失せたエリスの顔。その首に黒い手が巻きついている。突き飛ばすように、黒い手がエリスの体を押した。力を失い、倒れ込んでくる体をあわてて支える。

「エリス！」

ノウェの腕からエリスの体がずるずると滑り落ちる。

「最後まで使える部下だったな」

ジスモアが笑いながら逃げていく。最奥の扉が音をたてて閉じる。ノウェはそれを追うことすら忘れていた。
「なぜ……わたくしは……倒れているの？　団長閣下が……わたくしを盾に？」
「しゃべるな。傷が開く」
そう言っている間にも、赤い染みはどんどん広がっていく。
「あなたを反逆者だなんて……わたくしの敵だなんて、思いたくなかったわ……」
「エリス……」
「あなたとともに……世界を守りたかった。それが使命だと……いいえ、そんなものがなくても、わたくしはあなたを……」
「もうしゃべるんじゃない！」
たまらず叫ぶ。それでもエリスはやめない。震える手を挙げ、ジスモアが駆け込んだ扉を指さす。
「この塔の最上階……聖砂漏……」
「聖砂漏？」
「最後の……鍵よ。もう、止めない…わ……」
お行きなさい、とエリスが微笑んだときだった。背後で扉が開け放たれた。踏み込んでくるたくさんの足音。
「エリス、ごめん」

立ち上がり、走る。エリスが必死で指さし教えてくれた扉まで。黙ってマナがついてくる。マナの存在が、ノウェに為すべきことを思い出させていた。ジスモアと決着をつけ、最後の鍵を壊す。今、自分が為すべきことはそれだ。

背後で兵士たちが何か叫んでいる。が、構わずに走る。扉を押し開け、長い階段を全速で駆け上がる。

自分は今、瀕死（ひんし）のエリスを置いて逃げた。きっとユーリックのように後悔し続けることになるのだろう。今でさえ、心の片隅で悔いている。己の使命に対する義務感と、大切な友を我が手にかけた挙げ句、見捨てて逃げている悔恨とに、引き裂かれている。

心臓が胸を食い破りそうなほど激しく脈打っている。苦しい。一気に階段を駆け上がったためなのか、それとも別の痛みなのか、もはやノウェには区別がつかなかった。

天時塔の内部は巨大な吹き抜けになっていた。壁に沿うようにして長い螺旋（らせん）階段が続き、思い出したように踊り場が現れる。途中、何度か護衛兵に行く手を阻まれたが、どうにか斬り伏せた。幸いなことに兵士の数は決して多くない。

「なんだか……変だ。体がうまく動かない」

長い階段、度重なる戦闘。疲れているせいだろうか。やたらと手足が重い。

「敵の動きも変です。私たちだけでなく、ここにいる者すべてが変調を来しているような……」

「いったい、なぜなんだろう」
　聖砂漏、とマナが思い出したようにつぶやいた。
「ひょっとしたら、天時の鍵は時間を削り取っているのかもしれません」
　気炎では火山の炎、神水ではあの土地にあるすべての水、宝光では辺り一帯の光、明命では大勢の命。確かに、天時と名がついていることを思えば、鍵が必要としているものは時間なのかもしれない。
「じゃあ、思うように体が動かないのは……」
「時間が削り取られて歪んでいるせいでしょう」
　話しているそばから、護衛兵が襲いかかってくる。やはり動きがおかしい。塔内部にいる者から等しく時間が削られているのだろう。自分たちだけでなくて良かったと、つくづく思う。こんな状態で、普通に動ける者に襲われたら、ひとたまりもない。
「さすがに……きついな」
　時間の歪みのせいだけではない。体力的に限界だった。たった二人で包囲網を突破し、長い階段を駆け登り、護衛兵と幾度も干戈を交えてきた。疲労はほとんど極限に達していた。
「もう少しです。ほら、階段はあそこで終わっています」
　マナの指さすほうを見れば、確かに階段は途切れ、吹き抜けもそこで終わっている。しかも、敵の姿もない。マナの言葉に励まされ、ノウェは最後の数十段を一息に駆け登った。
　最上階の通路にも、階下で見たのと同じ赤い絨毯が敷き詰められていた。通路の突き当た

りに扉が見える。あの中が聖壇になっているのだろう。互いにうなずき合い、扉を目指そうとしたときだった。

「マナ！　マナなんでしょう？」

別の扉が開き、小さな人影が現れる。神官長セエレだった。ここが直轄区である以上、神官長がいても不思議はない。が、セエレはうれしそうに駆け寄ってきている。とても直轄区を襲撃している者に対する態度とは思えない。

「やっぱりマナだったんだ」

封印騎士団の頂点にある神官長が親しげに話しかけてくるのが不思議でならなかった。一方、マナはと言えば、不愉快そうに唇を引き結んでいる。

「神官長はマナとお知り合いなんですか」

「知り合いも何も、マナは僕の妹です。僕たちは双子なんだ」

ということは、セエレの年齢はマナと同じ。しかし、セエレの姿は幼子のままである。契約の代償に時を失ったという噂は事実らしい。

「ところで、神官長はいったい何をしにここへ？」

「僕はマナを止めに来たんだ」

やはり。親しげな笑顔を向けてきてはいたが、自分たちと神官長とは対立する者同士である。警護の兵士を呼ばれる前に、逃げるのが正解なのだろう。ノウェは目で合図しようと、傍らのマナを見やる。が、その横顔が不自然に強ばっている。どうしたのだろう。やや遅れ

て、怒りの表情だと気づいた。彼女がこんな顔をするのを見たのは初めてだ。
「お願いだから、馬鹿なことはやめて。最後の鍵さえ残れば、まだ取り返しはつく」
憎悪に満ちた視線でセエレを薙ぐと、マナは踵（きびす）を返した。いったいこの二人の間に何があったのだろうかと、ノウェは訝る。
「待って！　マナ、僕の話を聞いて！」
「あなたと話すことなど何もないわ」
マナは冷たく言い放ち、足早に歩き始める。その後を追いかけたノウェは、マナが低くつぶやくのを聞いた。
「セエレ……あなたはいつもそう。いつも何もせずに見てるだけ……何も変わっていない」
どういう意味だろう。しかし、その問いを発することはできなかった。護衛兵が駆けつけてきたのである。やはり近くに警護の兵士が控えていたのだ。走るマナの後に続いて、ノウェもまた走った。聖壇はもう目の前、こんなところで捕まるわけにはいかない。背後でセエレがマナの名を呼んだ。
「神官長！　危険です！　あとは我々に任せてお下がりを！」
護衛兵が必死でセエレをなだめようとしている。今のノウェたちは危険な反逆者である。実年齢はさておき、幼子の姿をした神官長を近づけるわけにはいかないと考えたのだろう。
不意にマナが振り返った。赤い瞳（ひとみ）には、ただ冷たい憎悪だけがある。その口許が小さく呪文（じゅもん）を詠唱した。セエレと護衛兵たちに向かって杖を振り上げる。炎が迸（ほとばし）り、辺りを黒い煙が

包む。護衛兵たちの悲鳴と呻き声がその中から漏れ聞こえてくる。
「行きましょう」
淡々と言って、マナは再び踵を返した。しかし、ノウェは気づいていた。炎の威力がいつもよりほんの少し弱かったことに。本気で倒そうとしたのではなく、視界を遮り足止めをするために放ったのだろう。とはいえ、双子の兄に対して炎を向けるというのは尋常ではない。この二人の間にある確執は、兄も妹も持たない自分には想像もつかないものに違いなかった。
「マナ！　鍵を壊しちゃだめだ！」
立ちこめる黒煙の中、セエレが必死で叫んでいる。しかし、すでにマナの手は聖壇へ続く扉を大きく開け放っていた。

聖壇の間に入ると、何か呪が掛けられていたのか扉は跡形もなく消え去った。これで邪魔が入る恐れはなくなったが、同時に退路が断たれたことをも意味する。どうやって脱出したらいいのかという考えが脳裏をかすめたが、ノウェは敢えてそれを追い払った。鍵を壊すことが先決、他は後で考えればいい。
「あれが、聖砂漏か」
薄暗い聖壇の間には、巨大な砂時計が設えられていた。見上げるほどの高さから音もなく砂がこぼれ落ちている。不思議なことに、降り積もる砂の高さは全く変わらない。砂時計でありながら、それは決して時を刻むことがないらしい。

静かだ。自分たちの足音と息づかい以外、何も聞こえない。ひたすらに広い部屋を横切って、聖壇へと向かう。

歩きながら気づいた。いつの間にか、体が自由に動くようになっている。さっきまで感じていた奇妙な感覚は跡形もなく消えていた。聖砂漏を安置している場所である以上、時間を削り取るわけにはいかないのだろう。

「気をつけて、ノウェ。天時の守護者がまだ姿を見せていません」

マナが用心深く周囲を見回しながら言った。天窓から射(さ)し込む光はすでに赤い。日暮れが近いのだ。聖壇の間には明かりとなるものは何も見当たらない。日没後、ここは夜の闇に包まれてしまう。そうなる前に、鍵を壊すか、守護者を倒すかしなければならない。

「守護者なら、ここにおるぞ」

背後から声がした。振り返って確かめるまでもない。ジスモアだ。

「全身を包む紋章……」

マナがつぶやく。よくよく目を凝らして見れば、黒い影にしか見えない体には、複雑な模様が刻まれている。

「契約の代償に、生身の体を失ったのですね」

体を失ったというのなら、今、剣を握っているあの黒い体は何なのだろう？　その疑問を口に出す前に、マナが言葉を継いだ。

「紋章の下にあるのは彼自身の体ではなく、契約相手のシェイド……。闇の精霊と一体化す

ることで、彼は形を保っているだけ」
落としたはずの右腕がいつの間にか元通りになっていたのも、斬りつけたときに奇妙な手応えだったのも、それがジスモアの体ではなかったからなのか。ノウェは改めて紋章の下に透けて見える闇の色を、そこに浮かぶ双眸を見つめる。が、仮面のように無表情なジスモアの顔からは何ひとつ読み取れはしなかった。
「たった三人の反逆者に封印騎士団がここまで追い詰められるとはな。情けないことよ」
「世界をあるべき姿から遠ざけているのは、どっちだ？」
養父オローの築き上げた封印騎士団を、こんな言葉で非難したくはなかった。できることなら、封印騎士団を善だと信じていたかった。
「封印騎士団のやっていることこそ、世界に対する反逆じゃないか！　おまえたちこそが悪だ！」
「この世に善も悪もあるものか。あるのはただ、強者と弱者のみ。そして、常に強者が弱者を支配するのだ」
「そんなことがあるもんか。俺とマナは信じている。強者も弱者もない世界を！」
ジスモアが嘲笑う。闇の裂け目のような口から低い笑いが漏れる。
「話にならんな。無駄話はここまでだ」
ジスモアの手から赤い光が放たれる。横に跳んでかわしながら、ノウェは剣を抜いた。生身の体を失ったジスモアに剣がどこまで効くかは定かではなかったが、やるしかない。

　次々に放たれる赤い光が左肩をかすめた。痺れるような衝撃が来る。食いしばった歯の間から呻き声が漏れるのが自分でもわかった。右肩だったら剣を落としていたかもしれない。光の正体はわからないが、危険だ。

　かわしながら走る。ジスモアに斬りつける。奇妙な手応えが伝わってくるが、深手を負わせるまでには至らなかったらしい。ジスモアが笑う。のけぞって笑う頭に剣を叩きつける。が、ジスモアは剣先をくぐり抜け、ノウェの背後へと回り込んでくる。

「竜の子の力とはその程度か？　オローもとんだ出来損ないを拾ったものよ」

　頭に血が上るのを感じた。力任せに剣を振り下ろす。しかし、ジスモアはまたも剣先をかわした。

「貴様には勝てぬ。光ある道だけを歩んできた者にはな」

　赤い光が今度は足をかすめた。激痛が走り、ノウェは思わず膝をつく。

「生まれながらに力を持ち、労せず封印騎士団に迎え入れられた貴様に、帝国軍の生き残りだった余が舐めてきた辛酸など、想像もつくまい」

「帝国軍の？　だったら、なぜ？」

　痛む足をなだめ、ノウェは必死で立ち上がる。

「なぜ、直轄区の人たちにあんなひどいことを？　彼らの痛みを誰よりも知っていたおまえが！」

「それが甘いというのだ。連中の痛みだと？　知ったことではないわ」

赤い光が炸裂した。床に転がって避ける。跳ね起き、ジスモアに向かって突っ込む。強い手応えを感じた。が、それも致命傷にはならなかった。

「忌々しい攻撃をしおって！」

吐き捨てる声とともに、ジスモアの体が高く浮き上がった。

「どうだ？　貴様の剣では届くまい」

赤い光が真上から降ってくる。この位置では狙い撃ちにされてしまうと思ったときだった。氷の槍がジスモアめがけて降り注ぐ。マナだ。ジスモアとノウェが接近しすぎて魔法を使うことができなかったのだろう。しかし、ジスモアが宙に浮いたためにノウェとの間に距離が生まれた。マナはそれを見逃さなかったのだ。

氷の槍は次から次へと降り注ぐ。その衝撃で、とうとうジスモアの体が落下した。床に転がったところへ、今度はノウェが剣を叩き込む。黒い腕がちぎれて飛んだ。ちぎれた腕から煙とも霧ともつかない黒いものが立ち上っている。あれがシェイドなのだろう。

「貴様……っ！」

ジスモアが残った右手を高く挙げた。いつの間にか体が青みを帯びている。白い光の塊がノウェめがけて飛んでくる。避けようとしたが、ノウェが避けたほうへと光がついてくる。避けきれないと思った瞬間、光が爆風に飛ばされて消えた。マナの魔法で光の塊が弾け飛んだのだ。さらにマナは、同じ魔法をジスモアめがけて放った。影のような体が爆風に煽られる。ちぎれた腕の付け根から、黒い霧が漏れ出す。明らかに人間ではない者の呻き声が聞

こえた。形を持たないシェイドだが、今までも手応えはあった。斬れば傷つき、人間や他の魔物と同じように痛みも感じるのだろう。
ノウェはジスモアに向かって跳んだ。よろめいた黒い体に剣を突き立てる。それは的確に左胸を抉った。血の代わりに真っ黒な霧が噴き出してくる。ノウェが剣を抜くと、ジスモアの体が大きく揺れた。
「おまえの負けだ！」
傾きかけた黒い体をさらに剣で受け止める。そのまま斜交いに斬り上げる。ジスモアがのけぞる。また一撃。漏れ出た黒い霧が激しく揺らめき、渦を巻く。悲鳴が聞こえる。シェイドが苦痛にのたうち回っているのだ。
ついにジスモアが床に両手をついた。
「終わりだよ、ジスモア」
「好きに……するがいい」
ジスモアがよろよろと立ち上がり、聖砂漏へと歩き出す。
「我が手に落ちぬ世界なぞ、くれてやろう」
いつの間にか、ジスモアの手には剣があった。
「そして知るがいい。所詮、貴様の正義など、絵空事に過ぎぬことを」
「それはどういう意味……」
皆まで訊くことはできなかった。

「受け取れ！」

ジスモアの剣が聖砂漏を貫いた。表面に無数の亀裂が走り、灰色の砂が噴き出してくる。青白い光とともに、ジスモアが消える。砂の噴出は止まらない。

「マナ！　こっちだ！」

咄嗟にマナの手を握り、ノウェは走り出す。少しでも聖砂漏から離れなければ。あれが危険なものだということは、見た瞬間にわかった。

走りながら、ふと後ろを振り返ってみると、聖砂漏から砂ではない別のものが出てこようとしている。闇の色をした何かが聖壇をめちゃめちゃに破壊し、天井を壁を突き破ろうとしている。塔が激しく揺れ、足許に亀裂が走っていく。

夢中で走り、レグナの名を呼んだ。体が投げ出され、宙に浮いた。落下が始まる。マナの手をきつく握りしめる。

「相変わらず世話の焼けるやつよ」

軽い衝撃とともに落下が止まった。レグナの翼の上だ。握りしめたままだったマナの手をゆっくりと解く。

「ありがとう……助かったよ」

安堵の息で声が震えた。振り返れば、天時塔の最上階が粉々に吹き飛んでいる。あと少し遅ければ、巻き込まれていた。

「あの黒い……妙なものは何だったんだろう」

聖砂漏の中で静かに落下していた砂とは全く別のものだった。
「時の結晶、とでも呼ぶべきか。聖砂漏は周囲の時を削り取り、結晶化して内部に蓄えておる。それが一度に噴出し、暴走したのであろう」
ならば、天時塔を登っていたときに感じた異常は、やはり時を削り取られたことによるものだったのだ。しかし、水や光と違って、時を元に戻すことはできない。行き場をなくした時は暴走し、天時塔を破壊した……。
「世話焼きついでに、蟲風呂を掃除しておいた。まあ、大半は逃げ出したがな」
言われて見下ろすと、天時塔を取り囲んでいた大軍は跡形もなく消えている。誰もいない。ぽつりぽつりと骸が見えるだけだ。いや、たったひとつ、動く人影がある。
「レグナ、降りてくれないか」
もしやという予感はあった。地上が近づいてくる。確信を持った。
「神官長セエレ！」
レグナの背から飛び降り、駆け寄った。
「ご無事でしたか」
セエレが泣きそうな顔でノウェを見上げてくる。
「とうとう……きみたちは……」
「ええ。これで、すべての民衆は騎士団の圧政から解放される」
違うんだ、とセエレがマナの言葉を遮った。

「きみが解き放ったのは民衆じゃない。最終封印なんだ！」

最終封印？　どういうことだ？　ノウェはマナと顔を見合わせる。

「十八年前、赤き竜が人間に代わって封印の女神になった。けれど、竜の力は強い。暴走する危険がある。だから、鍵を作って赤き竜の五感を封じ込め、自由を奪わなければならなかった。直轄区の鍵はそのためのものだったんだ」

鍵は、最終封印である赤き竜を封じ込めるためのもの？　だとしたら、俺とマナがやったことは、世界を危険にさらす行為だったというのか？

「鍵の維持には確かに民衆の犠牲が必要だったけど、それは世界を維持するため……。彼らは本当の意味で殉教者だったんだよ」

直轄区で出会った人々を、助けてくれと懇願する声を思い出す。彼らを見捨てるのが正しい行為だったというのか……。

しかし、とノウェは思い直す。世界を維持するためだとしても、民衆だけが犠牲になっていたのはなぜだ？　騎士団の中からはただの一人も犠牲を出さずに。本当に世界のためを思うなら、騎士団員からも平等に「殉教者」を出すべきではないのか。どんな言葉で飾りたてても、結局のところ、封印騎士団が自分たちの都合で民衆を犠牲にしていたことに変わりはない。

そもそも鍵の意味を正しく伝えず、「毒性を封じるため」などと嘘をついたのはなぜだ？　十八年前、赤き竜を最終封印と為した前神官長の非を誤魔化すためではないのか。

「マナ、きみは十八年前と同じ過ちを……」
「やめて！　お願い！　やめてください！」
マナが両手で顔を覆う。
「私……知らなかった……」
最終封印を解き放ったのは罪かもしれない。しかし、セエレにそれを責める資格があるとは思えなかった。セエレは何もせずに見ているだけ、とマナは言った。自分たちの行為が罪ならば、何もせずに放置したのもまた罪ではないのか。
「マナ、大丈夫だ。最終封印は俺が守ってみせる」
最終封印さえ守り通せれば。それさえできれば、マナを苦しめずにすむ。ノウェはセエレに向き直った。
「最終封印はどこに？」
「聖地と呼ばれる場所に……今もまだ留まっているのなら」
そう言って、セエレは西の方角を指さした。
「行こう、マナ。俺たちの手で最終封印を守るんだ」
世界を守ること。それがマナにとって、自分にとっての救いとなるだろう。ノウェはマナを促し、レグナの背に飛び乗った。

## 3

天時の直轄区からわずかに西へ飛んだだけで、赤き竜の痕跡(こんせき)は見つかった。地上が火の海と化していたのである。

「これは……赤き竜の仕業なのか」

どこに村があったのか、どこまでが森であったのか、全く区別がつかないほど炎は地上を破壊し尽くしていた。空の上にまで、村や森を焦がした熱が立ち上ってくる。レグナが無言で速度を上げた。

それでも、地上から目を逸らすことができない。ひたすらに大地を呑(の)み込む炎がいやでも目に入ってくる。川の水は干上がり、橋はすべて焼け落ちている。川沿いに黒い塊が点々とあるのは、おそらく必死で逃げてきた人々の骸だ。逃げ惑い、水のある場所を目指し、干上がった川の前に絶望し、力尽きた……。

マナが震えているのが伝わってくる。見るに耐えないのだろう。無理もない。苦しんでいる人々のためにと戦った結果が……これだ。直轄区で殉教者として死んでいくのと、業火(ごうか)に焼かれるのと、どちらが彼らにとって幸せだったのだろうか。

この地獄絵図が赤き竜への道標となっているのは皮肉なことだった。より新しい炎を辿(たど)っていけば、赤き竜を探し当てることができるに違いない。

「この叫び……!」

レグナがわずかに頭を上げた。いったいどうしたのかと言いかけて、ノウェは口を噤(つぐ)んだ。

聞こえたのだ。ドラゴンの声が。
　空を飛び、群れずに生きるという竜族の特性ゆえか、竜の言葉は人の言葉よりも遠くまで届く。マナに今の叫びは聞こえなかったはずだ。竜の言葉を解する者にしか竜の声は聞こえない。おそらく、人間でありながら竜の言葉を解するのは自分だけだろうとノウェは推測している。物心ついてからでは、竜の言葉は習得できないらしいのである。幼いころ、何度かエリスに竜の言葉を教えようとしたが、何度試みても彼女は声を出すことすらできなかった。
「行ってみよう」
　レグナが翼の向きを変える。今、赤き竜と意思の疎通を図ることができるのは、自分とレグナしかいないのだ。
　滅びよ、と叫ぶ声が次第に近づいてくる。まだ赤き竜の姿は見えない。しかし、その怨嗟に満ちた叫びは確実にノウェの耳に届く。人間への憎しみに満ちた言葉と、意味を為さない叫び。
「レグナ、赤き竜は何が言いたいんだろうか」
「儂にもわからん。感情の爆発による叫びでしかないのであろう。おそらく彼奴は、正気を失っておる。よほどの苦しみを味わったのだな……」
　封印の負荷による苦痛だろうか。その苦しみは想像を絶するものだと聞いたことがある。或いは、鍵によって五感を封じられたことによる苦痛だろうか。セエレの言った「自由を奪う」ための鍵が、正気を失うほどの苦痛を赤き竜にもたらした……。

天時の直轄区の人々は「自由のために」と叫んで、無謀とも言える戦いに身を投じた。自由を奪われる苦痛が彼らにとって死にも等しいものだったためだ。同じ苦痛を赤き竜は強いられた。いや、同じではない。すでに赤き竜は封印の負荷を背負っていたのだから。

鍵を作ることを決めた前神官長に、それを黙って継承してきたセエレに、ノウェは怒りを覚えた。人にとっての苦痛は竜にとっても苦痛だということが、なぜ彼らにはわからない？　人に心があるように、竜にも心がある。喜怒哀楽の感情、近しい者への愛情、それらすべては人間だけのものではないのだ。養父オローが示してくれた愛情は、当たり前のようにレグナが与えてくれたものと少しも変わらなかった。

竜の子と蔑(さげす)みの目を向けてきた騎士団員たちの顔が浮かんだ。自分たちとは違う生き物だというだけで、なぜ人は理解を拒むのだろう。なぜ平気な顔で裏切り、虐(しいた)げることができるのだろう。それが人の正義だというのなら、到底受け入れられないとノウェは思う。

「来るぞ！」

レグナの声がノウェを現実に引き戻した。行く手に何かが見える。絶え間なく赤い炎を吐き出す何かが。

「この気配、なんという……」

レグナが絶句した。それほど赤き竜の気配は禍々(まがまが)しいものだった。狂気と殺意とが濁流となって暴走している。

「赤き竜！　聞こえるか！　あんたと話がしたいんだ！」

声を限りにノウェは叫ぶ。策があったわけではない。しかし、叫ばずにいられなかった。このまま放置すれば、世界は業火に呑まれてしまう。
「俺の言葉がわかるか?」
炎が止まった。赤き竜がゆっくりと振り返る。爛々と光る双眸は怒りを宿し、半ば開いた口からは埋み火のように炎が垣間見える。世界を守る封印の女神とは思えない禍々しい姿だった。
「赦…サヌ……。赦サヌ……」
「赤き竜、話を聞いてくれ!」
「何故我ヲ欺イタ……赦サヌ!」
赤き竜の体が膨れ上がった。炎の奔流が襲いかかってくる。レグナが辛うじて身を翻す。
「小僧、彼奴には正気など一欠片も残ってはおらぬ」
「そんな……。話もできないなんて」
「彼奴の耳には何も届くまい。いや、見るもの聞くものすべてが彼奴の怒りと憎しみをかき立てておる。痛ましいことだ。そして愚かしい」
吐き出される炎をかわしながら、レグナがつぶやく。
「……人間などに心を許すからだ」
「レグナ?」
おかしなことを言うとノウェは内心で苦笑した。そういう自分こそ人間に心を許している

ではないか。人間の赤子を拾い、八年もの間、手許で育ててきたのだから。
「またか？」
ふとレグナが訝しげにつぶやいた。
「どうした」
「先ほどから彼奴の名を呼ぶ人間の声が聞こえるのだ。誰が発しておるのか、定かではないが」
問い返しかけて、ノウェは思い出した。声というのは、契約者同士が使うという思念のことだ。レグナには聞こえてもノウェには聞こえない。声を発しているということは、人間なのだろう。赤き竜に人間の仲間がいるのは、正直言って意外だった。
「儂らは名乗る意思を持たぬ生き物だ。よほど近しき間柄の者であろう」
レグナも人間に名を知られるのを嫌う。だからノウェも、レグナの名を人間の前で口にはしない。呼ぶときにも人の言葉を使わず、竜の言葉を使うようにしている。それなら人間に聞かれる恐れはない。
「あいつの名前、なんていうんだ？」
「……アンヘル」
名を呼べば話を聞いてくれるだろうか。が、その思いつきをノウェは自分で否定した。今の状態で名を呼んでも、赤き竜の怒りを倍加させるだけに違いない。
何か手だてはないものか、そう思ったときだった。突然、炎の攻撃が止(や)んだ。赤い翼が

翻った。速度を上げて、赤き竜が遠ざかっていく。
「俺たちから逃げるつもりなのか」
「わからん。ただ、彼奴の目はひとつところを向いておるようだ」
ならば追いかけようとノウェが言うよりも先に、レグナの翼が速度を増した。みるみる小さな点になっていく赤き竜に追いすがる。
地上から立ち上ってくる熱気が消えている。いつの間にか、赤き竜は炎を吐くのをやめたらしい。ただただ翼を動かし、一直線に飛ぶ。レグナの言うとおり、目的のある飛び方だ。どこへ行くつもりなのだろう。
やがて岩山に囲まれた城が見えてくる。天時の直轄区から遥か西。
「もしかして、ここが聖地なのか」
だとしたら、赤き竜が囚われていた場所である。ただ、その牢獄にも等しい場所を脱出したにも拘わらず、再び舞い戻ろうとしているのはなぜなのか。
「まるで忘れ物を取りに戻ってるみたいだ」
赤き竜は、何かを捜しているかのようにしばらく城の上空を旋回した後、中庭へと舞い降りていった。
「案外、小僧の言うとおりやもしれぬな」
この城に何があるのだろう。囚われていた者が戻らずにいられないような何かがあるのか。
「儂らも降りるか?」

「そうだな。ただ、赤き竜を刺激したくない。できるだけ静かに頼むよ」
まっすぐに降りることはせずに、レグナは大きく旋回しながら、慎重に城へと近づいていく。下からの攻撃を警戒しているのだ。
次第に城が近づいてくる。間近に見てみると、城というよりは廃墟（はいきょ）である。赤き竜を封じ込めていたのだから、神官長が人の出入りを許すはずがない。十八年もの間、使われずに放置されていたのだろう。
「戦いが……人が死んで……たくさん……」
マナが泣き出しそうな声でつぶやく。振り返ると、マナが目を見開いて震えている。
「どうしたんだ」
「いや！　来ないで！　来ないで！」
「マナ？」
この怯（おび）え方。以前にもどこかで、こんなことがあった……。
「小僧、気を逸らすな。降りるぞ」
見れば、中庭が目前に迫っていた。その光景を見た瞬間、締めつけられるような痛みを感じた。胸の奥が疼（うず）き、息苦しくなる。泣き出したいような、ひどく悲しい気持ちだった。
「嫌い嫌い嫌い嫌い！」
しかし、マナの叫びがそんな感情を吹き飛ばした。自分が自分でないような、奇妙な感覚は跡形もなく消え去った。

「マナ、静かにするんだ」

金切り声を上げるマナをなだめているうちに、気がつけば中庭の片隅に降りていた。抱きかかえるようにしてレグナの背からマナを下ろす。赤き竜の唸る声が聞こえてくる。怒らせてしまっただろうか。恐る恐るその方角に目をやったノウェは、驚愕する。

「カイム……生きていたのか」

赤き竜をじっと見つめ、佇む人影がある。忘れもしないあの後ろ姿。まさか生きていたとは思わなかった。明命の聖壇で、深い闇の底へと落ちていくのを確かに見た。ユーリックは「普通の人間が落ちたらひとたまりもない」と言った。そこへ落ちてなお、生き延びたというのか。

カイムが振り返る。が、ノウェたちを一瞥すると、すぐに赤き竜へと向き直った。

「なぜ、おまえがここにいるんだ」

カイムは答えない。思い出した。マナがこんなふうに取り乱し怯えたのは、錆の町でカイムを見たときだ。あのときも、マナは真っ青になって震えていた。いったいマナとカイムの間に、何があったのか。

しかし、その先を考える暇は与えられなかった。カイムが赤き竜に向かって歩き出したのである。ノウェはあわててカイムを呼び止める。

「待て！　危険だ！」

近づけば斬られるかとも思ったが、カイムは黙って振り向いただけだった。

「赤き竜は人間を憎んでいる。不用意に近づくんじゃない!」
言った後で、ノウェは自分自身を訝った。なぜ、カイムを止めようとしたのだろう。養父オローを殺し、ユーリックが契約者となるきっかけを作ったのは、他ならぬカイムなのに。
カイムが再び赤き竜へと視線を戻した。もはやノウェたちには興味などないと言いたげに。
赤き竜に向かって、足を踏み出す。赤き竜が唸り声で応える。
「貴様……。何奴(なにやつ)?」
カイムの横顔に驚愕の色が走るのをノウェは見た。何を驚いているのだろう。
「殺ス……殺ス……殺ス……ッ!」
赤き竜が吼えた。カイムは動こうとしない。
「カイム!」
ノウェはカイムの肩を掴んだ。こいつはなぜ、こんな無謀なことをする?
「おまえの狙いは何なんだ? おまえは誰の味方なんだ?」
カイムは前神官長ヴェルドレとオローを殺した。マナはカイムに怯えていた。しかし、カイムの狙いは直轄区の鍵。
「直轄区の鍵を狙ったのはなぜだ? 赤き竜を呼び起こし、世界を破壊させるためか?」
もしもそうなら、カイムは鍵の意味を知っていたことになる。騎士団の人間でさえ知り得なかった真実を。
「破壊サセル? 我ヲ、利用スルナド……笑止!」

鉤爪が眼前に迫るのを見た。次の瞬間、ノウェは突き飛ばされ、地面に転がった。体を起こすと、傍らで同じようにカイムが起き上がったところだった。
「おまえ……俺を庇ってくれたのか」
あのとき突き飛ばされなかったら、赤き竜の鉤爪に引き裂かれていたに違いない。ノウェはますます訳がわからなくなる。カイムは敵だったはずだ。明命の直轄区では、命の取り合いまで演じた。なのに、なぜ？
不意に赤き竜が翼を広げた。後を追おうとするかのように、カイムが手を伸ばす。無論、届くはずもない。舞い降りたときと同じ唐突さで、赤き竜が飛び立っていく。
「追いかけよう！」
このまま見失うわけにはいかない。ノウェはマナの手を取り、レグナの背に乗った。これほど怯えているマナを連れていっていいものか迷わないでもなかったが、カイムと二人で残しておくほうが気がかりだった。
中庭が、カイムの姿が遠ざかっていく。結局、カイムの目的はわからず終いだった。
「俺の問いに全く答えようとしなかったな。話を聞く気がなかったんだろうか」
「あの男のことか？」
「ああ。無口なやつだったよな」
「彼奴は赤き竜との契約者だ。おそらく代償に声を失ったのであろう」
契約者？　だとしたら、赤き竜をアンヘルと呼ぶ声はカイムのものだったのか。そういえ

ば、赤き竜が何奴と問いかけたとき、カイムはひどく驚いていた……。
十八年前、世界を救った英雄カイム。人間の代わりに封印の女神となった赤き竜。あの二人は手を携え戦った者同士だったのだ。これで辻褄が合う。カイムが直轄区の鍵を狙ったのは、赤き竜の五感を取り戻し、その苦しみから解き放つためだった。そこまでするのだから、あの二人の結びつきは特別に強いものだったのだろう。これまでに出会った契約者たちは、心臓を交換し合い、命を共有する者同士でありながら、そんな絆は感じられなかった。
「赤き竜とカイムが……」
普通の人間が落ちたら、というユーリックの言葉が思い出された。ユーリックは知っていたのだ。赤き竜とカイムが契約者同士であることを。だからカイムに止めを刺さなかった。考えてみれば、二人がかりなら倒せない相手ではなかった。それをしなかったのは、カイムを殺せば最終封印である赤き竜を殺すことになるとわかっていたからだろう。
咆哮が近づいてくる。赤き竜が再び地上に向けて炎を吐き出していた。しかし、ノウェの目にはその姿が物悲しいものに思われてならなかった。強い絆で結ばれたはずの相手さえわからないほどの狂気。幾度もその名を呼ばれていながら、気づくことができない……。
「小僧、彼奴を撃ち落とすぞ」
「でも、赤き竜は最終封印だ。撃ち落としたりしたら、封印が解けて……」
「彼奴の力は理性を失ったまま、異常なまでに高まっておる。放置すれば、世界中が火の海と化す！」

わかっている。封印を守れば世界は業火に包まれ、封印を壊せば世界は均衡を失う。どちらを選んでも、破滅は免れないだろう。ただ。

「赤き竜を倒せば、あいつも……」

契約相手であるカイムも死ぬ。

「何をためらう必要がある？」

カイムは父の仇だ。レグナの言うとおり、ためらう必要などないのだろう。赤き竜を倒せば、仇を討つことにもなる。だが、なぜか今はそう割り切れない。何かが自分を押しとどめる。

三年前の直轄区襲撃事件。結果的にオローの命を奪うことになったが、カイムの目的は赤き竜を救うことだった。明命の直轄区でも、鍵を壊すためにユーリックの命を狙った。その事実がわかってしまうと、今までと同じ憎しみを向けることなどできはしない。自分自身も同じことをしてきた。人々を解放するという大義名分のために、守護者を殺し、直轄区を守る兵士たちを殺した……。

「くだらん感傷に気を取られるな！　やられたいか！」

炎の塊がレグナの翼をかすめて飛んでいく。赤き竜にとって、自分たちは敵でしかないのだ。もはや契約相手の顔すらわからない赤き竜にとって……。

レグナの吐いた炎がまっすぐに赤き竜へと飛ぶ。が、赤き竜はぎりぎりでこれをかわした。速い。正気を失っているとは思えないほど速い。いや、狂気が赤き竜を殊更に駆り立てている

るのかもしれない。
　レグナが立て続けに炎を吐いた。そのいくつかは命中しているはずなのに、赤き竜の動きは止まらない。滅びよ、と呪文のように繰り返し、炎の塊を吐き出してくる。
　すれ違いざま、炎を孕んだ尾が鞭のように撓り、襲いかかる。レグナが辛うじてかわしたものの、その熱気は背に乗るノウェたちにも迫ってくる。あれが直撃したら、レグナはともかく、生身の人間である自分やマナはひとたまりもない……。
「我ヲ呼ブハ……何奴？　ソノ声ハ……ソノ声……」
　カイムが赤き竜を呼んでいるのだ。あの中庭から。赤き竜は目の前にいるのが誰なのか、わかっていなかった。それでもカイムは呼ばずにいられないのだろう。
「何故、我ヲ呼ブ？　ソノ声……我ヲ呼ブ声……」
　レグナの炎が容赦なく赤き竜へと襲いかかる。ノウェはたまらず目を背ける。正視できなかったのだ。
　やめてくれ、俺は赤き竜を殺したくない、そう叫んでレグナを止めることができたら。しかし、それが最善とは限らない。自分たちはもう、最終封印を解き放つという過ちを犯している。ここで感情に流されて選択を誤るわけにはいかない。わかっている。わかっているのだ。
「見エヌ……。何モ…見エヌ……ソノ姿……何処ダ？」
　鍵は五感を封じるためのものだとセエレは言った。赤き竜は何も見えず、何も聞こえず、

何も感じることのない底なしの闇と静寂の檻に閉じ込められていたのだ。残されたのは、封印がもたらす苦痛のみ。それで正気を保っていられるほうがどうかしている。おそらく赤き竜は狂気の淵に沈む最後の瞬間まで、カイムの姿を捜し、カイムの声を聞こうとしていたに違いない。

「何処ダ……何処ニイル……？」

赤き竜がカイムの名を呼んだ。幾度も、悲しげに。正気を失っていてさえ、その名を忘れることはなかったのだろう。

「カイム……見エヌ……何処ニ……カイム！」

なぜ、俺は赤き竜を倒さなければならない？　世界を、人間を守るため？　だが、この悲劇を招いたのは他ならぬ人間自身だ。その人間のために、赤き竜とその半身を殺さなければならないのか？　悲痛な声で互いの半身を呼び続ける者たちを。

もうやめよう、これ以上見ていられない、そうレグナに告げようとしたときだった。

「あの男からの伝言だ」

「カイムから？」

「アンヘルを倒せ」

耳を疑った。赤き竜の叫びはカイムにも届いているはずだ。必死で己の名を呼び続ける者を殺せというのか。

「自分とアンヘルのためにはこれが一番良い方法だ、と」

「カイムは……そう言ったのか」

アンヘルのために、ではなく、自分とアンヘルのために……。

「小僧、これは儂らのためにもなる願いぞ」

レグナにもわかっているのだ。儂らのため、という言葉の裏にあるレグナの思いをノウェは読み取った。赤き竜を撃ち落とす。それは、生き続けることがもはや苦しみでしかなくなった者たちのためになる。

「わかった」

ノウェはまっすぐに赤き竜を見据えた。もう目を逸らすことはすまい。

「しっかり掴まっておれ。行くぞ！」

炎をかいくぐり、レグナが赤き竜へと向かっていく。火球と火球とがぶつかり合い、音をたてて爆ぜる。飛び交う炎が空を焦がす。

レグナ一人に罪を背負わせたりしない。俺も……俺の力も……！

魔の力を注ぎ込むというやり方はすでにわかっていた。ノウェは意識を集中し、己の力を集める。赤き竜の命を奪う一撃と為すために。

瞼の裏側が真っ白に灼ける。力の奔流がまっすぐに駆けていく。

断末魔の声を聞いた。あまりにも悲しい、最期の声を。

赤き竜が墜ちる。必死で翼を動かし、落下に抗っている。レグナが黙ってその後を追う。

見届けなければ。その思いはノウェも同じだった。

撃ち抜かれた翼で赤き竜が飛ぶ。向かう先はあの中庭だった。最後の力を振り絞り、赤き竜は戻ろうとしていた。

「あの場所で、彼奴とあの男は契約を交わした」

「そう……なのか？」

「先刻、彼奴に呼びかける声の中で、そういう意味のことを言うておった」

牢獄にも等しい場所へ自ら戻ろうとするのはなぜなのか、不思議に思っていた。まるで忘れ物を取りに行くみたいだ、とも。確かに赤き竜はそれを捜していたのだ。本来ならば己の背にあるべき者を。

地響きをたてて赤き竜が中庭に着地した。静かに佇むカイムの前に。

「カイム……」

赤き竜の言葉に、狂気の色は感じられなかった。すでに翼は力を失い、その目に宿る光は弱い。だが、赤き竜はようやく正気を取り戻したのだ。

「おぬしの声……我は気づくことができなかった……」

もういいのだと言いたげに、カイムが赤き竜へと手を差し伸べる。

「今一度、おぬしと見える日を、あれほど待っておったのに……」

カイムの手のひらが優しく赤き竜を撫でた。その横顔に穏やかな微笑が浮かぶ。赤き竜の瞳が光を失う。ゆっくりと閉じる瞼。

不意に、その体から火の手が上がった。炎は赤き竜とカイムとを抱きしめるように包み込

む。

「もう……よいのか、カイム？」

微かにうなずくのが見えた。ふと思い出したようにカイムが振り返る。炎の中からノウェをじっと見つめている。カイムの口許に静かな微笑みを見たと思った。が、すぐにそれは炎に溶けて消えた。

燃え上がる炎はやがて灰になり、細かな塵となり、風に流されていった。

静寂だけが残った。カイムの骸も、赤き竜の痕跡もなかった。あの二人が生きて存在していたことが夢なのではないかと思えるほど、何ひとつ残らなかった。二人の消えた場所を、ノウェはしばらくの間、無言で見つめていた。

「いや……来ないで！」

静寂を破ったのは、マナの悲鳴だった。

「来ないで！　来ないで！　来ないで！」

レグナの背にしがみついたまま、マナが震えている。

「いや！　嫌い嫌い嫌い！」

「マナ……」

幼い子供のように首を左右に振り、来ないでとマナが繰り返す。まだカイムに怯えているのだろうか。



「大丈夫だ。もう怖くない。カイムは来ない。……そう、来ない」
押しつぶされてしまいそうな重さを伴って、自ら発した言葉がのしかかってくる。
「カイムはもう、いないんだ。アンヘルも……」
十八年に及ぶ苦しみの果てに、アンヘルはようやく安息を得た。そして、共に寄り添う者を。二人が出会ったというこの場所で。それがアンヘルにとって、またカイムにとっても救いであったようにと祈るしかない。
「これで……最終封印まで解けてしまったんだな」
「然り。何が起こっても不思議はないぞ」
それを承知で戦った。何が起きても受け止めるしかない。
「覚悟はできてるさ」
自分に言い聞かせるように、ノウェは強く言い放った。



# Ⅵ 古の章

# 1

崩壊は唐突に始まった。
頭上に無数の亀裂が走っていくのを、空が音をたてて崩れ落ちてくるのを、ノウェは見た。雨雲に隠されるでもなく、夜の闇に覆われるでもなく、空の青さが消えていく光景を見るのは初めてだった。
当たり前のように仰ぎ見ていた青い色が剥がれ落ちた後には、血の色をした空が現れた。濁った赤と黒ずんだ赤とが渦を巻き、歪み、揺れ動く。さらなる異変の前兆であるかのように。十八年前、世界が破滅の淵に追い込まれたときに現れたという赤い空とは、こんな色をしていたのだ。
何処からともなく現れた異形の群れが奇声を上げながら飛び交う。今までに見たどの魔物とも違う。理を外れた存在であることは一目瞭然だった。
「これが……封印なき世界なのか」
「いや、これこそが世界の真の姿。時空が歪み、裂け目が生じ、そこから様々なものが現れる」
この不吉な空の色のせいか、自分の手までが赤く染まったように感じられる。あたかも自分が別の生き物に成り代わってしまったかのような違和感を覚えて、ノウェは何度も手のひらを返しては眺めた。ふと視線を上げた先にまた違和感を覚える。今度は自分ではない。

「レグナ、その身体は……」

いつの間にか、レグナの蒼い翼は闇の色に変わっていた。

「儂らの身体は然るべきときに然るべき形へと変わる。世界の姿が変わりつつある今、この姿こそが然るべき姿なのであろう」

猛々しさと、どこか禍々しさを感じさせる漆黒の翼。この世界では、それがあるべき姿なのだろうか。

「しかし、世界がこうなってこそ、様々なものが見えてくる。様々なものが……復活するのだ」

ノウェは改めて赤い空を見上げる。世界が黄昏時を迎えている。この後に、夜の闇がやって来るということか。

「俺が生まれる前、レグナはこの空を見た。マナも……」

見たんだろうと問いかけようとしたが、果たせなかった。マナの耳にはノウェの言葉は届いていなかったのだ。

「ごめんなさい。お母さん、もうしませんしませんしません！　ごめんなさいごめんなさい！」

マナが泣き叫んでいる。さっきまでの怯えた様子とは明らかに違う。赤い瞳はもはや何も映してはいないようだった。焦点の合わない目に涙を溜めて、マナはただ泣き叫ぶ。

「お母さん、やめて！　ごめんなさい！　ごめんなさい！」

「マナ、しっかりしてくれ」
「いや！　ぶたないで！　いい子にするから。ぶたないで！」
「落ち着くんだ」
なだめようと両肩に手を置けば、マナはますます激しく泣き出す。手をとろうとすると、強く払いのけられてしまう。自責の念から正気を失ったのだろうが、それにしては奇妙な取り乱し方だと、ノウェは訝った。
「この女は足手まといにしかならんな。小僧、悪いことは言わぬ。ここに捨て置け」
「そんなことできるわけないじゃないか！　マナは俺にとって……」
「おまえにとって、何だというのだ？」
答えに詰まった。マナは自分にとって、何だったのだろう？
「共に戦うことが叶わなくなった今、この女は存在意義を失ったのではないか？」
「違う！」
叫んだ瞬間、心の内にある声を聞いた。
「俺はマナを守りたい。民を守れ、世界を守れって父さんが言ってたけど、それと同じくらい、俺はマナを守りたいんだ」
たった一人と世界とを秤にかけるのは愚かなことなのかもしれない。しかし、自分にとってマナは、世界と同じくらい大切なものだと思えた。
「では訊こう。世界と女をどう守る？　手だてはあるのか？」

またしても答えに詰まった。レグナの言うとおりだ。守りたいのは気持ちばかり、具体的には何をすればいいのかとなると、全くわからない。

「ならば、ひとつ助言をやろう。おまえの求めるものは空にある」

「空?」

「時空の歪みと裂け目は、太古の遺物を掘り起こす。決して交わらぬはずのふたつが交わり、本来ならば届かぬ場所へも行き来が可能になる。今なら、空の隙間に古の墓標と呼ばれる神竜族の遺跡が出現しているはずだ」

「古の墓標?　神竜族?」

レグナはいったい何を言っているのだろう。ノウェはまじまじとレグナを見上げた。翼の色が変じたせいか、目の前にいるのは自分の知るレグナではないような気さえしてくる。

「古の墓標には、太古の昔から幾たびもの試練を乗り越え生き延びてきた神竜族の叡智が眠っておる。人間には到底考え及ばぬ知恵と知識がな」

「そこへ行けば、マナを……世界を守るための手だてがわかるのか」

「命短い人間どもの浅知恵よりも、長い時を生き抜いた者にこそ学ぶべきとは思わぬか?　どうせ他に手はなかろう」

人間の自分から見れば、気の遠くなるような年月をレグナは生きてきた。人間よりも多くのものを見、人間には知り得ないことをも知っている。何より、自分にとってレグナは誰よりも頼りになる存在だった。そのレグナの助言なのだ。

行こう、とノウェは言って赤い空を見上げた。
聖地から今度は東へと飛んだ。いや、頭を東に向けてどんどん上へ昇っていくと言ったほうが近い。地上が赤い雲に覆われて見えなくなっても、レグナは上昇をやめなかった。
「こんなに高いところまで来たのは初めてだ……」
雲の上にもまた雲がある。それは知っていたが、雲の上の雲をさらに越えて飛んだ経験はない。たとえ空の色が赤くなかったとしても、初めて見る光景だった。
「おしまいなの？　お母さん、もう世界はおしまい？」
あどけない幼女の表情で、マナが見上げてくる。錯乱状態にあるマナから目が離せなくて、ノウェはマナを抱きかかえるようにしてレグナの背に乗っていた。
「おしまいなんかじゃないさ。まだ終わってなんかいない」
今のマナにはその意味さえわからないのだろう、不思議そうに首を傾げるばかりだった。
「小僧、見えてきたぞ」
雲の切れ間から現れたのは、石の柱だと思った。四角くて細長い、石と同じ色をしたそれは、大神殿の回廊の柱によく似て見えた。が、近づくにつれて、柱はみるみる太く、大きくなった。距離のせいで小さく見えていたのだ。間近に見ると、それは巨大な建造物だった。
おそらく、地上のどこを探しても、これほどのものは見つけられないだろう。
「これが、古の墓標なのか」

「然り」
「こんな大きなものが……。いったいどうやって浮いているんだろう」
艇のような動力部があるわけでもない。少なくとも外からは見つからない。艇特有の唸るような音もない。
「浮いているわけではないぞ。本来、これはこちらの世界にあってはならないもの。時空の歪みによって儂らにも届く場所に出現しただけのこと」
「どっちにしても、わからないよ」
レグナからは見えないとわかっていたが、ノウェは肩を竦めてみせる。はっきりと自分の手に余るものに直面すると、人は冗談に紛らわせてしまいたくなるものらしい。ユーリックがいつも軽口を叩いていたのは、重すぎるものをその肩に乗せていたからかもしれないと、今になって気づいた。
「小僧、伏せろっ！」
鋭い声でレグナが叫んだ。急激に体が横に引っ張られる。急旋回したのだ。
「レグナ、何が……？」
「門番だ。神竜族の遺物を守る者」
アークドラゴン、とレグナが低く言った。いつの間にか、真っ白な翼を持つドラゴンたちに囲まれている。
「戦うのか？」

「否。門番どもは我が同胞。今は儂らがわからずとも、いずれわかるときが来る」
純白の翼が翻り、目を射抜くほど白い光がその口から吐き出される。それをかいくぐってレグナは飛んだ。執拗にまとわりつくアークドラゴンの群れを振り切り、ひたすら飛ぶ。
「小僧、どこかに墓標の入り口があるはずだ。探せ！」
アークドラゴンの追撃を振り切りながら、建造物の周囲をレグナが飛び回る。やがて、その一部が口を開けているのを発見した。レグナが翼を鳴らして開口部へと向かう。アークドラゴンの吐き出す白い光が、ノウェたちの頭上ぎりぎりのところをかすめていく。
「中へ入るぞ！」
レグナが叫んだときにはもう、開口部に突入していた。空気の色が変わるのがわかった。人間にとっては十分広いが、ドラゴンにとっては狭い通路が続いている。壁も床も天井も、不思議な光沢を放っていた。木でも石でもない、見たこともない質感のものでできている。照明らしきものは何もないのに、内部は明るい。そして、静かだ。レグナの翼の音さえ吸い取られてしまいそうなほど。
「なんて複雑な通路なんだ……」
通路は緩やかな曲線を描きながら、上へ下へ、或いは右へ左へと続く。いつの間にか、上下左右の感覚がおかしくなっている。また、通路は何本にも枝分かれしていた。が、レグナの翼に迷いは感じられない。ひとつの方向へと、確信をもって飛んでいるようだ。迷わないのかと問えば、レグナは即座に否と応えた。

「ここは儂らが故郷。向かう先は血の記憶が教えてくれる」
儂らは還ってきたのだ、とレグナがしみじみと言う。ノウェにとっては、右も左もわからない場所に過ぎないが、竜族であるレグナにとってここは懐かしい場所なのだろう。
ふとマナのことが気になった。今のマナは、外見は大人でも精神は幼い子供に過ぎない。見知らぬ場所に怯えてはいないだろうか。さっきから妙におとなしい。
「マナ？」
腕の中で、マナは静かに寝息をたてていた。
「ここは儂らのための場所。普通の人間には意識を保っていられる場所ではない」
「普通の人間って……じゃあ、俺は」
俺はどうなんだ、俺が意識を保っていられるのは普通の人間ではないということになるじゃないか、そう言おうとしたときだった。緑色の光が目の前で炸裂した。
「つかまれ。一気に飛ぶぞ！」
何が起きたのかわからないまま、ノウェは身を伏せる。緑色の光が音もなく飛び交う。魔物が吐く炎とも、魔術師が使う攻撃魔法とも違う。未知の光だ。目だけを動かして光の源を捜せば、砲台によく似た筒が壁のあちこちから生えている。これも、さっきの門番と同じで、侵入者を阻むためのものなのだろうか。
レグナの翼が激しく鳴った。速度を限界にまで上げ、緑色の光をかいくぐる。今少し、というつぶやきをノウェは聞いた。目的地が近いのだ。

「行き止まりだ！」
通路を塞ぐ壁に気づき、ノウェは叫んだ。が、レグナはまっすぐに壁に向かっていく。
「戻れ！　レグナ！」
レグナは止まらない。壁がぐんぐん迫ってくる。思わず目を閉じる。しかし、衝突の瞬間はいつまで経ってもやって来なかった。
「着いたぞ」
恐る恐る目を開けると、狭い通路はどこにもなかった。上にも下にも、ただ空間が続いている。その中央に、光を放ちながら回る幾つもの輪があった。
「ここに種の書が眠っておる。種の書を開くことができるのは、ただ竜族のみ」
言ってレグナは炎を吐いた。光を放つ輪を炎が呑み込む。音をたてて輪が止まった。竜の炎でないと、あの輪は止まらないのだろう。
「聞け！　古より伝わりし神竜族の偉大なる叡智を！」
レグナの叫びとともに、何かがノウェの中を駆け抜けた。一瞬にして全身を巡る何か。得体の知れない……しかし、よく知っている力。
五感が暴走を始めた。知覚が異様なまでに高まっている。なのに、何も見えない。レグナの声も聞こえない。自分がどこにいるのか、どんな状態にあるのか、全くわからない。暴走を始めた五感は、ノウェの意志などお構いなしに「ある場所」へ向かう。
なんだ、これは……！

膨大な情報の奔流にノウェは呑み込まれようとしていた。拒もうとしても、それは力ずくでノウェの中に入ってくる。ノウェを何処へか運び去ろうとする。

何かが激しく争っているのが見えた。太古の昔。精霊？　天使？　いや違う。あれは、名もなき者だ。名もなき者と、玉座にある者とが争っている。神竜族。玉座にある者。あらゆるものを統べる玉座にある者。

名もなき者との争いに敗れた神竜族は玉座を追われ、代わって同じ名もなき存在であった者が玉座に就いた。それは後に神と呼ばれる。そして、神竜族は名もなき者へと堕ちた。

世界が変わっていくのが見える。玉座にある者が代わったことで、世界は姿を変えた。神による破壊と創造。神は神竜族を名もなき存在に堕とすだけでは満足しなかった。かつて己の頭上にあったものを完膚無きまでに叩きのめし、蹂躙した。神竜族を材料に、新たなしもべを創り上げたのである。

支配する者から、支配される者へ。創造主から被造物へ。かつて誇り高い神竜族であった者は創り替えられ、神のしもべとなった。ドラゴン、と呼ばれる者に。

しかし、玉座にある神でさえ、神竜族の血の記憶を消すことはできなかった。しもべであるドラゴンには神の意志が色濃く反映されている。が、同時に血の記憶を強く持つドラゴンも存在した。彼らは竜族の中にあっては異端であり、忌むべきものとされた。

その最たる者がアークドラゴンたちだった。彼らは血の記憶を最も強く受け継ぎ、古の墓標を守る者となった。種の書が眠る聖所を守りながら、彼らは待った。気が遠くなるほど長

い長い時を待ち続けた。神の命でドラゴンが人間を創造するまで。彼らが神によって失敗作の烙印を押されるそのときまで。

やがて神は失敗作たる人間を矯めるべく、様々なものを創った。人間たちが再生の卵と呼ぶものもそのときに創られた。「その時」は刻一刻と近づいていた。

アークドラゴンほどではないが、微かに血の記憶を残すドラゴンがいた。やはり忌むべきものとされていたブラックドラゴンである。理性を持たず、本能のみで生きるブラックドラゴンが人間たちの前に舞い降りたとき、時は満ちた。

神竜族の企みに気づかぬ神は、失敗作の粛正に乗り出した。ただ、あらゆるものを統べる玉座は、人間の世界とは異なる時空に存在している。ゆえに、神は人間たちの世界に、直接干渉することはできない。しもべであるドラゴンを使って人間を創造したのも、神が自らの手で異なる時空の生き物を創ることができなかったからである。

人間の世界に干渉するため、神は赤い瞳を持つ幼女を依代とした。彼女を使って、人間たちの間に戦を起こした。一方、ブラックドラゴンは微かに残る血の記憶に動かされて、とある小国の国王夫妻を噛み殺した。こうして神の悪意と、神竜族の秘されし企てとが同時に動き出したのである。

神の悪意によって、封印が破られ、再生の卵が出現する。アークドラゴンたちはそれを使って、一振りの剣を創ろうとしていた。神狩りの剣。神が失敗作を粛正するために創り出した道具を使って、その神を屠る武器を創る。それが長い時を超えた神竜族の企みだった

……。

マナ！　あれはマナだ。

押し流されそうな意識の底で、ノウェは叫んだ。わずかに残る意識にしがみつき、ひたすらマナを呼ぶ。無論、声になりはしない。

マナに関する情報のすべてが一瞬にしてノウェの中に刷り込まれる。マナだけではない。目にするものすべてが、世界に関するすべてが書き込まれていくのがわかる。世界が己の中へと押し込まれていく。

赤い瞳の幼女が一人の男を洗脳しようとしている。男は幼女の瞳に絡め取られ、黒い翼を持つ竜と契約を交わした。

あの黒い翼……レグナに似ている。封印が消えた後、姿を変えたレグナに。

黒き竜を駆った男は封印の女神を拉致し、幼女の許へと運ぶ。やがて、女神を救出しに、赤き竜を駆る男が現れた。

赤き竜を駆る男は女神の兄だった。しかし、人の心を読む幼女によって、女神は心の内に秘めていた思いを、実の兄に対する恋慕の情を暴露され、自ら命を絶った。

マナ……そうだったのか。エリスが言っていた、世界を破滅へと導いたというのは……このことか。そして、あの女神はカイムの妹……。

黒き竜が大地に倒れ伏していた。そこへ、アークドラゴンたちが舞い降りる。封印が破られ、時空の歪みが生じたことによって、彼らは本来ならば行き来できないはずの人間の世界

へと飛来した。神竜族の企みどおりに。
白き翼が黒き翼を覆い尽くす。光が生まれた。白き翼の竜たちが飛び立つ。幾筋もの光。
黒き翼が色を変えていく。漆黒から夜空の色へ、そして蒼天（そうてん）の色へ。
レグナだ。見間違いではない。自分がレグナを見間違えることなどあり得ない。あれはレグナだ。ブラックドラゴンを見たとき、レグナに似ていると思った。似ているどころではない。あれもレグナだったのだ。理性を持たず、名も持たなかったころの。
アークドラゴンたちに取り囲まれて、レグナが飛び立った。向かう先には、男が倒れ伏している。女神の骸（むくろ）とともに。
再びアークドラゴンたちが舞い降りる。今度はレグナを伴って。白い球体と一組の男女が白き翼に包まれる。真っ白な光。あらゆるものを灼（や）き尽くす光。
光が消えたとき、アークドラゴンたちはすでにいなくなっていた。残されたのは、蒼き翼の竜と……神狩りの剣。
ノウェは絶叫した。嘘（うそ）だ……嘘だ……！　俺は……！
「受け取ったか？　すべてを」
気がつくと、レグナの背の上だった。相変わらずマナが腕の中で眠っている。
「戻るぞ」
ノウェは呆然（ぼうぜん）として、レグナの声と翼の音を聞いていた。呆然としていたが、混乱はして

いなかった。むしろ得心がいった。これで何もかもが符合する。

さっきレグナは何と言ったか？　墓標の内部では「普通の人間」は意識を保っていられないと言った。確かにマナは眠ったが、自分は起きている。意識を保っている。

カイムと剣を合わせたとき、知っていると感じたはずだ。あの黒き竜を駆った男は、イウヴァルトは、カイムの幼なじみだった。幼いころから共に剣の稽古(けいこ)を重ねてきた相手なのだ。だからカイムも驚いていたのだろう。

初めてマナに会ったとき、逃げ出したいような畏(おそ)れを感じたのも道理だった。フリアエはあの赤い瞳に心の内を暴かれ、命を絶った。

そのフリアエとイウヴァルトから創り出されたのが……自分だ。人間として創られたのではない。神竜族の武器、神狩りの剣として創られた。自分でも抑えきれない、あの凶暴な衝動は神を屠るための力なのだろう。

「レグナは、何もかも知っていたんだな」

「それが儂の使命だからな。儂が名を与えられたのも、神竜族の武器を育て、鍛え上げるため。血の記憶の命ずるままに」

来たときと同じ通路を引き返しながら、ノウェはふと違和感を覚える。静か過ぎる。

「緑色の光が……」

来たときには激しく飛び交っていたはずの緑色の光が、今は一条もない。

「儂らの存在が、いや、おまえが認められたのだ。古の墓標を守る者たちにな」

認められたということは、さっきのアークドラゴンたちも味方になったのだろうか。彼らを味方につければ、世界は救われるのか？　マナを元に戻せるのか？

「マナ……」

もしもマナが元に戻ったとしても、今までと同じように接してくれるだろうか。人ではない者など、普通の人間にとっては魔物と同列ではないのか。隠しておこうにも、マナは人の心が読める。この心の中にあるものをすべて読めば、マナも真実を知ることになるのだ。

そうだった。マナは心が読めるのだ。これで納得した。人並み外れて気配や物音に敏感だったのも、錆の町で手配書が回っていることをいち早く察知したのも、ユーリックが明命の守護者だとわかっていたのも、心を読み取っていたからだ。

人の言葉を習得した年齢が遅かったために、人との対話が苦手だった自分が、マナとは驚くほど円滑に言葉をやり取りできた。もどかしい思いをしたことなど、一度たりともなかった。そのはずだ。うまく言葉にできなくても、マナには何の障害にもならないのだから。

気がつくと、墓標の外に出ていた。アークドラゴンたちの姿はない。もう攻撃対象ではなくなったということなのだろう。

これからどうすればいいのか、どこへ行けばいいのかと考えていたときだった。白い翼の群れを見た。

「あれは！」

アークドラゴンが白い光を吐いている。攻撃しているのは艇だ。よくよく目を凝らすと、

封印騎士団の紋章が見える。
「助けよう」
「あの艇をか？」
「神官長セエレが乗っているかもしれない」
あの紋章の色は、騎士団の中でも階級の高い者が乗る艇にのみ使われる。団長のジスモアが死んだ今、あの艇を使うとしたらセエレしかいない。世界が崩壊しつつある今、神官長の力は必要だ。世界を守ってみせると宣言したものの、正直な話、自分とレグナだけでは手に余る。真実を知り、それがよくわかった。自分一人でなんとかできる気になっていたのは、何も知らなかったからだ。
艇はアークドラゴンたちの猛攻を受け、今にも墜落しそうになっている。一刻の猶予もならない。人間如き(ごと)に、と言いかけたレグナをノウェは強く遮った。
「レグナ、頼む！」
仕方なさそうにレグナが翼を翻す。アークドラゴンたちの群れへとまっすぐに飛ぶ。一戦交えることになるのだろうと思ったが違った。レグナが吐いたのは炎ではなく、言葉だった。
「同胞たちよ！　其の艇は我らにとって必要な道具。直ちに場所を空けよ！」
白い光がぴたりと止まった。アークドラゴンたちが一斉に艇を離れる。
「すごい……。ドラゴンたちが去っていく」
「知れたこと。儂が背に乗せておるのは、彼らが待ち望んだ神竜族の剣なのだからな」

これが門番たちに認められたということか。ただ、心強く思う気持ちも、誇らしく思う気持ちも全くなかった。ただ寂しかった。おまえは人間ではないのだと、はっきりと宣告されたのだから。

しかし、そんな感傷に浸っている暇は与えられなかった。艇が大きく傾いたのである。制御不能に陥ったのだろう、艇は黒い煙を上げながら、ふらふらと飛んでいく。いや、墜ちていく。懸命に体勢を立て直そうとしているらしく、何度も船首を上げようと試みているのがわかる。もちろん、全く成功していなかったが。

「まずい。このままだと墜落するぞ」

やれやれ、とレグナがつぶやいた。何をするのかと思えば、あろうことか艇に体当たりをかけている。

「やめろ！　そんなことしたら……」

「艇の向きを変えてやっただけだ。世話の焼けることよ」

レグナの言葉どおり、艇の舳先は古の墓標へと向いた。なるほど、墓標の上部へ不時着させればいい。あの広さなら、十分に着陸できるはずだ。

やがて艇は墓標の上部へ着陸というよりは、激突する形で乗り上げた。そのそばへ、レグナが舞い降りる。生存者を救助しなければならない。艇は半壊し、炎上を始めていた。

レグナの背から飛び降り、艇に向かって駆け出したときだった。立ちこめる黒煙の中から、よろよろと歩いてくる人影が見えた。遠目にも、見覚えのあるその姿。

「エリス？」
立ち竦み、あわてて駆け出す。まさかという疑いと、そうであって欲しいという願いとがノウェの中で交錯する。
白い服をまとった人影がよろめき、倒れる。上下する肩の動きで、荒い息をついているのがわかった。そして、立ち上がろうと彼女は顔を上げた。
「やっぱりエリスだ。でも……幻なのか？」
「何を馬鹿なことを言っているの。早く肩を貸してちょうだい」
その口調。間違いなくエリスのものだった。駆け寄り、助け起こす。エリスだ。
「生きてたんだな！」
「当たり前でしょう」
「よかった。俺はてっきり……」
「神官長が手厚く保護してくださったの。わたくし、あれくらいでは死にません」
それでも、傷が完全に癒えてはいないのだろう。エリスの顔には全く血の気がない。手を貸して立たせたものの、足にも力が入っていないようだ。時折、苦しげに顔をしかめるのは、傷が開きかけているのかもしれない。早く地上に降りて休ませなければと思う。
「久しいな、鬼娘」
レグナが憎まれ口を叩く。
「そうだ。神官長セエレは？　セエレは乗っていないのか？」

「いいえ。艇に乗っていたのは、わたくし一人です」
そのときだった。レグナの傍らから声がした。
「セエレは死なないわ。だって、お母さんに愛されてるから」
歌うように言葉を紡ぐマナを見て、エリスが目を剥いた。
「この女……どういうことなの？」
マナはそれを無視して言葉を続けた。
「セエレはいい子だから、お母さんに愛されるの。だから死なないの」
今のマナにはエリスの言葉など耳に入っていない。自分が何を言われたのか、全くわかっていないのだ。単に、セエレという言葉に反応したに過ぎない。
「十八年前、彼女は世界を破滅へと追いやった。そして、今回も直轄区の鍵を壊し、最終封印を解き放った。その自責の念で彼女は……」
エリスから手を離し、ノウェはマナに歩み寄る。
「あなた、だあれ？」
マナが不思議そうな顔でノウェを見つめる。古の墓標で真実を知っても、アークドラゴンたちに認められても、マナを元に戻すことはできなかった。ここへ来たのも、本当はマナに正気を取り戻させたい一心だったというのに。
「戻ってきてくれ。俺は……」
マナを強く抱きしめる。そして、気づいた。自分が心の底からマナを必要としていること

に。
「俺は知っている。もう何もかも知ってるんだ！」
十八年前の罪も。己の前身であった二人の男女を不幸に陥れたことも。
「あなたが何者なのか知っている。あなたの罪を知っている」
この赤い瞳を初めて見たとき、心臓を鷲掴みにされたように感じた。始まりは畏怖だったのかもしれない。心の内を読まれ、理解されているのだと思い込んだ。その心地よさに惹かれた。人々の希望であり、人々を動かす存在であることに敬意を抱いた。
今、真実を知り、そのすべてが消えた。それでも、そばにいたい。あなたを守りたい。
「人の心が読めるんだろう？　だったら、俺の声だって聞こえているはずだ」
何もかも知っている。それでも戻ってきて欲しいと願う、この気持ちを。
「戻ってきてくれ、マナ！」
もう一度、あなたに会いたい。会いたいんだ！
マナを抱きしめ、ノウェは声を限りに叫び続けた。

## 2

夜明け前の冷気が全身を刺した。それでも走った。両足は脹ら脛からつま先にかけて赤紫色に腫れ上がっていたが、もはや痛みは感じない。凍った土の上を裸足で走り続ける無謀さは、十分に承知している。しかし、靴を履いていたのでは足音を消すことができない。

これだけ必死で走っているのに、体は少しも温まらない。ものすごい勢いで体温が奪われていくのを感じた。やっぱり上衣を着てくれればよかった……。いや、危険すぎる。脱いできたのは決して間違いではない。分厚い布が擦れる音は、洞窟の中では思いのほか響く。だから、靴も上衣も脱いで逃げた。逃げられるなら、寒いくらい我慢しようと思った。

木の根に足を取られた。勢い余って、顔から地面に突っ込んでしまう。このまま倒れ伏してしまいたいほど疲れていた。鉛のように重く感じられるのは足だけではない。体中が重い。心臓が破裂しそうだ。それでも必死で起き上がる。

子供の足で逃げ切るのは難しい。気づかれて、追いかけられたら終わりだ。今まで何度もそうやって失敗してきた。だから、今のうちに少しでも距離を稼いでおかなければならない。森の中はまだ暗い。けれども、日が昇るまで走り続けていられたら、今度こそ逃げられるかもしれない。それだけを心の支えに走った。

瞼がべたついて目を開けていられなくなる。手の甲で拭うと、いやな臭いがした。血だ。さっき転んだときに額を切ったのだろう。俄に額がずきずきと痛み出す。気がつかなければよかったと思ったが、もう遅い。そういえば手のひらも血だらけだった。やはり転んで手をついた拍子に怪我をしたのだ。

ひとたび痛覚が目覚めてしまうと、痺れて感覚がなかったはずの足までが痛み始めた。地面を蹴るたびに、足の裏から鋭い痛みが跳ね返ってくる。

いやだ……。もう、いや。痛い。痛い。痛い。誰か助けて。お母さん……。

足がもつれた。さっきまでの勢いがなかったからか、今度は顔から突っ込むことはなかった。が、咄嗟に突いた手は体を支えきれず、肩が地面に激しくぶつかった。もう起き上がる力は残っていなかった。呻き声を上げることすらできない。ただ、涙だけがこぼれた。
不意に背後から気配を感じた。激しい怒りと憎悪の塊が迫ってくるのがわかる。全身に鳥肌が立った。跳ね起きた。痛みも疲労も忘れて走る。
逃げなければ。早く。
しかし、気配はどんどん近づいてくる。喉の奥が震えて、あわてて手のひらで口を覆う。声など出せば居場所を知らせるようなものだ。間違っても悲鳴なんて上げるわけにはいかなかった。必死で走る。が、足が思うように動かない。疲労が極限に達しているからか、それとも恐怖に竦んでいるからか。
カイムが来る……。怖い。
ぐっすり眠っているのを確かめて逃げてきたのに。なぜ、こんなに早く気づいたのだろう。まだいくらも逃げていない。きっと捕まってしまう。
目の前で火花が弾け跳んだ。小径を塞いでいた倒木に正面から激突してしまったのだ。暗かったのと、あわてていたのとで、全く見えていなかった。
起き上がろうとした途端、地面が大きく揺らいだ。頭をひどくぶつけたせいだ。視界が回り、耳鳴りがした。両手が無意味に泳ぐ。両膝がぴたりと地面に貼りついたまま動かない。
しかし、背後の気配はお構いなしに近づいてくる。

逃げなきゃ。でないとカイムに捕まる。早く立ち上がって、それから……。
いきなり襟首を掴まれた。自分のものとは思えない悲鳴が森の中に響き渡る。捕まってしまったという絶望感に抗いたくて、マナは夢中で手足をばたつかせる。
次の瞬間。怒りと憎しみにたぎり立つ思念がマナを押しつぶした。まるで真っ赤に焼けた石を心臓に押しつけられているかのような苦痛。人の心を読む力を備えているがゆえに、相手の感情が直接流れ込んできてしまう。
ごく当たり前の人間が相手なら、別に構わない。実際、数え切れないほどたくさん、人間の心を読み取ってきたけれども、苦痛に感じたことなど一度もなかった。
カイムは違う。常軌を逸した怒りと憎しみ。その凶暴な感情がそのままの形でマナの心の中で荒れ狂う。恐ろしくてたまらないのに、逃げられない。きつく目をつぶっても、耳を塞いでも、流れ込んでくる思念は止められない。しかも、その怒りと憎しみの大半がマナに向けられているのである。そばにいるだけで、内側から滅茶苦茶に叩き壊されてしまいそうな苦痛を感じた。それがつらくて、何度も逃走を図った。
「痛い！」
両手首をひとまとめに掴まれ、マナは悲鳴を上げた。しかし、カイムはその訴えを無視して、歩き始める。そうだった。何を言っても無駄なことくらい、わかっていたのに。マナは諦めて、引きずられるに任せた。
何もかもわかっていたことだった。生きている限り、カイムから逃れることはできない。

自由になれるとしたら、それはカイムに殺されたときだけだ。
お母さんも、あの方も、わたしが好きだった人はみんな、わたしを見捨てて行ってしまった。わたしはカイムを好きじゃないから、ずっとカイムはわたしから離れない。ずっとカイムはわたしを憎み続ける。
「そんなにわたしが憎いなら、今ここで殺せばいいじゃない……」
やはり無駄だとわかっている言葉だったが、それでも口に出さずにいられなかった。

マナは実の母親に疎まれた子供だった。母は双子の兄であるセエレだけを溺愛し、マナに冷たく当たった。瞳の色が不吉だ、気味の悪い子供だと、何かにつけて罵られた。人の心を読む力がマナに備わっていることに気づいていたのかもしれない。
やがて、マナは母親の手によって石の谷に捨てられた。そのマナを拾ったのが、天使の教会である。神の依代として選ばれたマナは、たった六歳で天使の教会の司教となった。
己の失敗作を消去せんとする神は、マナの口を借りて人々を操り、帝国軍を動かした。人の心を読むというマナの能力を使って、神は人々を洗脳し、或いは抹殺した。そのすべてをマナは自覚していたが、罪悪感を抱くことはなかった。正しい行いだと信じていたからである。
母から虐待され続けたマナにとって、神は初めて温かく接してくれた相手だった。その神の意思はマナにとって絶対的なものだった。

やがて、神の悪意は世界を破滅の淵へと導いた。帝国軍が世界中を焼土に変えていった。が、あと一歩のところで神の企みは阻まれた。竜騎士カイムと、赤き竜アンヘルによって。

神が去り、マナは再び自分が捨てられたことを知った。だから、この場で殺して欲しいと頼んだ。カイムが自分を激しく憎んでいることはわかっていた。が、カイムは死を以(もっ)て償えとは言わなかった。彼が代わりに課した罰は、生きること、だった。

カイムに連れられ、マナはいくつもの町や村を巡り歩いた。どこへ行っても戦の爪痕(つめあと)は深く、目にする光景は悲惨なものばかりだった。

旅を始めて間もないころ、雨ざらしの骸がいくつも転がっている平原を通った。まだ屍臭(ししゅう)が残っているような気がして、マナは思わず息を止めた。白骨になりかけた骸が薄気味悪くて、できるだけ見ないようにして歩いた。

ただ、はっきりわかるように顔を背けたりはしない。マナが目を逸(そ)らしているのがわかると、カイムは無理矢理に頭を押さえつけてその光景を見せようとするからだ。だから、そのときも俯(うつむ)いて歩きながら、視線だけは地面に向けないようにしていた。

そうやってしばらく歩くと、マナと同じくらいの子供たち数人に出会った。彼らは何やら地面に這(は)い蹲(つくば)っている。無数の骸が転がっている場所で遊んでいるのだろうか。よく平気でそんなことができるものだと、半ば呆(あき)れながら彼らを眺めていたマナは息を呑んだ。その子供たちは骸の衣服を剥ぎ取っていたのである。

人の骸を見るだけでも気味が悪いのに、彼らは骸に手を触れている。ほんの少し前までは

腐敗した肉に包まれていたであろう骸。うまく脱がせることができないからか、中には石を打ち付けて骨を砕く者もいた。その音が気持ち悪くて、マナは思わず耳を塞いだ。が、不意にその手が引き剝がされる。カイムだった。

マナの様子に気づいたのだろう、あの子供たちは剝ぎ取った服を町や村へ売りに行くのだと、カイムの「声」が頭の中に流れ込んできた。

もっとも、骸が身につけている肌着程度では、売ってもたいした金にはならないらしい。もう少し金になる鎧は、すでに大人たちが持ち去ってしまった。だから子供たちは端金にしかならないとわかっていても、服を剝ぎ続ける。町中で物乞いをするよりはましなのだという。骸から奪うものがなくなれば、次は生きた人間から奪うようになるだろう。

「あの子たちのお母さんは……」

死んだ、と声が返ってくる。言わなければよかったと後悔したが遅い。カイムの声はしつこく続く。

あの子供たちは戦で親を亡くした。あの子供たちはおまえのせいで孤児になった。あの骸だって、おまえの罪だ。骸が怖いか？　気味が悪いか？　しかし、彼らはおまえの引き起こした戦で死んだ……。

カイムの言葉以上に、同時に流れ込んでくる怒りの感情が恐ろしかった。人の心を読む力さえなければ、と何度思ったことだろう。

それでも人の少ない戦場跡はまだましだった。薄気味悪ささえ我慢すれば、骸は何も言わ

ない。多くの人々が集まる町や村では、様々な人の思念が流れ込んでくる。家族や恋人を亡くした嘆き、住む家を失った怨み、そういった人々の感情すべてがマナを責め立てた。

最初の冬に見た町や村はどこも悲惨そのものだった。建物は焼け落ち、畑は荒れ果て、襤褸をまとった人々が地べたに座り込んで震えている。体力のない老人や子供がばたばたと死んでいく。どこの町でも村でも、死体を焼く煙が途絶えることがない。見ていられなくて俯くと、いきなり髪を掴まれ、顔を上げさせられた。

泣き喚いても、カイムは許してくれなかった。行き交う人々に助けを求めても、誰もが足早に立ち去った。カイムが物騒な人間であることは誰の目にも明らかである。そんな相手と事を構えるほど無謀な者は、どこの町にもいなかった。

目を逸らすな。おまえの言葉が招いた光景だ。自分の罪から目を背けるな。

「でも！　あたしだけが悪いんじゃない！　あの方が言ったんだから！　これは正しいことだって。間違ってるなんて、誰も教えてくれなかったもの！」

あの方の言うとおりにしていれば、わたしたちは再生できる。悪しき世界は終わり、本当の正しい世界が始まる。そう教えられた。あの方の御心に適うものだけが善で、反するものはすべて悪。だから、悪しき者を排除するのは正義。そう信じていたのに。

「あたし……何も知らなかったんだもの……」

知らなかったこと自体が罪だ。己の行いに微塵も疑いを持たず、言われるままに罪を犯したのなら、それはもはや教えた者の罪ではない。手を染めた者自身の罪だ。

「でも……」

それ以上の反論はできなかった。言われるままに罪を重ねたマナは、今度は言われるままに罪の結果を見続けた。己の意志で見たわけではない。ただ目を開けていたに過ぎなかった。マナにとって一番恐ろしいのは、カイムの感情が暴走することだった。とりあえず目を開けて前を向いていれば、怖い思いをせずにすむはずだと思った。

とはいえ、人間の感情ほど御し難いものはない。どんなにおとなしくしていても、何の前触れもなくカイムは憤怒と憎悪とをマナに向けた。そんなとき、マナは為す術もなく震え、嵐が過ぎ去るのを待ち続けるしかなかった。

ただ、まるで凪のようにカイムが穏やかな表情を見せることがあった。頻繁にではない。ごくたまにだったが、怒りや憎しみなどの黒い感情が一瞬にして消え去り、静けさが訪れる。

何が起きているのか、最初はわからなかったが、やがて気づいた。ドラゴンだ。カイムとドラゴンは契約者同士。離れていても声を交わすことができる。ドラゴンの声は遠すぎてマナには聞こえないが、カイムの様子でそれがわかった。

会話らしい会話はない。契約の代償でしゃべれないせいか、カイムはドラゴンと声を交わし合っているときでさえ無口だった。会話を覗かれたくなくて黙っているのだろうか。それとも、カイムだけが聞き役に回っているのだろうか。いろいろと推測してみたけれども、本当のところはわからない。わかっているのは、カイムにとってドラゴンが大切な存在であることだけだ。

マナにとってもドラゴンの存在は有り難かった。ドラゴンが声を飛ばしてきているときだけは、カイムは怒らない。そのときだけは安心していられる……。

そんなふうにして季節が何度か巡った。ドラゴンの声が届く頻度は変わらなかったが、カイムが感情を爆発させる回数は少しずつ減っていった。戦の直後に頻発していた内乱や暴動も目に見えて減り、世界は復興へ向けて動き出していた。

旅に出てから六度めの冬には、戸外で凍死している人を見ることもなくなった。焼け跡には新しく家が建ち、人々の嘆きや恨みの声も聞こえなくなった。カイムが怒りや憎しみをマナに向けることもめっきり減り、穏やかな旅が続いた。

ちょうどこのころからだろうか。自分を見つめるカイムの視線に、寂しさのようなものが垣間見えることに気づいたのは。はっきりと形を成している感情ではない。ただ、カイムはどこか遠くを、手の届かない何かを捜そうとしていた。

なぜ、そんな目をするんだろう?

不思議に思って、何度もカイムの心の中を読んでみた。何度も繰り返し試みて、ようやく手がかりらしきものを見つけた。フリアエという名、そしてイウヴァルトという名を。

そうだった。カイムには妹がいたんだ。彼女の許婚は、カイムの親友で。

そこまで考えたとき、胸の奥が鈍く痛んだ。カイムの親友であるイウヴァルトを洗脳したのは他ならぬ自分自身だ。そして、カイムの妹を死に追いやったのも。この二人のことがあるから、カイムは自分を憎むのだと思っていた。

なのになぜ、そんな寂しげな目をするの？　なぜ、今までのように、わたしに憎しみを向けないの？

このとき、マナは十二歳。カイムの妹フリアエが女神として召還された年齢が十四歳。顔かたちは全く違っていても、カイムの目から見れば、幸せだったころの妹と同じ年格好の少女である。しかも、六年という歳月を経て心が落ち着きを取り戻しつつある。それまでと同じ憎しみを向けることができなくなったのも当然といえば当然だった。

ただ、そんな心の動きを理解するには、まだマナは幼かった。カイムの変化の理由がわからずに、マナはうろたえた。そして、マナの不安を決定づける出来事が起きた。

住む人のない荒野を幾日か旅した後だった。とある廃墟に佇んで、カイムはしばらく動こうとしなかった。

この廃墟は何、と訊こうとしてやめた。訊く前にカイムの心に国の名が浮かんだのだ。カールレオン。十年くらい前に崩壊してしまった小国である。大戦後もこの土地に人が戻ることはなかったのだろう。ここ数日、町や村はおろか一軒の家も見なかった。

カイムの心の中に、いくつもの光景が浮かんだ。ここがまだ廃墟ではなく城だったころ、幸せに暮らしていた思い出が。

不意に胸が締めつけられた。カイムの内にある感情が流れ込んできたのである。怒りでも憎しみでもない、悲しみでもない、自分が消えてなくなるような、頼りない思い。寂しさにも似ているけれども、少し違う。

「あ……」
涙が頬(ほお)を伝った。マナはあわてて手の甲で頬を拭った。なぜ自分が泣いているのか、全くわからない。カイムが振り返る。

つき合わせて悪かった。行こう。

「もう行くの？　ほんとにいいの？」

なぜカイムを呼び止めてしまったのか、なぜそんな言葉を口にしたのか、マナはますます自分がわからなくなる。

ふと思いついたように、カイムが左の袖(そで)を捲(まく)った。その手首にブレスレットがあるのをマナは知っている。小さな丸い飾りのついた、古いブレスレットだ。カイムがそれを外すのを、マナはぼんやりと見ていた。何をするつもりなのかと訝ることさえしなかった。

不意に手を掴まれた。あまりにも突然で、動けなかった。さらにその後に続くカイムの行動は予想を遥(はる)かに超えていた。マナの左手首にそのブレスレットを嵌(は)めたのである。

「わたし……に？」

マナはブレスレットを見、カイムを見た。決して自分に向けられるはずのない、穏やかで優しい目がそこにあった。

何も言えず、ただ目を見開いているマナに、カイムは静かに微笑(ほほえ)むと踵(きびす)を返した。歩き出したカイムをマナは反射的に追いかける。いつからか、カイムはマナを引きずって歩くことも、手を引くこともなくなっていた。カイムが先に立って歩き、マナがその後をついていく。

それが当たり前になっていたのだ。
どうしよう。どうしよう……。
カイムの背中を見ながら、マナは泣き出したい気持ちになっていた。不安で不安でたまらなかった。
わたしが好きだった人はみんな、わたしを見捨てて行ってしまった。わたしに優しくしてくれた人は、みんないなくなってしまう。だからカイムもいなくなる。ううん。いなくなるほうがいい。そのほうがまだまし。前みたいに憎まれたら……怖い。
すっかり忘れていたはずの恐怖が蘇った。荒れ狂う怒りと憎しみ。すぐに捕まるとわかっていても逃げ出さずにいられないほど恐ろしかった。
もうあんな思いはしたくない。もしも再び憎まれたら、きっと耐えられない。心が粉々に砕けてしまう……。
不安に苛まれる日々が始まった。以前にも増して、カイムが怖くてたまらなくなった。怒りの前兆はないか、憎しみが芽吹き始めてはいないか、マナは四六時中、カイムの顔色を窺っていた。そのくせ、カイムと視線が合うと逸らしてしまう。カイムの目を見ることができない。そして、後悔するのだ。かえってカイムを不機嫌にさせてしまったのではないかと。
ごめんなさい。ごめんなさい。憎まないで。お願いだから憎まないで。
幼いころ、母に対して幾度となく繰り返した言葉を今度はカイムに対して繰り返す。それがますますマナを不安に陥れる。

お母さんと同じ……。カイムもお母さんと同じなんだわ。必ずわたしに冷たく当たるようになる。わたしを憎むようになる。

自分で自分を追いつめていることに、マナは気づいていなかった。カイムとの旅が終わるその日まで、とうとう気づかないままだった。

それはいつもと寸分違（たが）わぬ朝だった。いつものように火の始末をして、荷をまとめて出発する。いつもと同じ一日が始まるのだと思っていた。カイムがひどく緊張した面持ちで空を見上げるまでは。

理由はすぐにわかった。アンヘル、という声にならない叫びをカイムの心の内に聞いた。ドラゴンの身に何か異変が起きたに違いなかった。

カイムが足早に歩き出す。行き先など全く考えていない。カイムの心の中にあるのは、ただドラゴンのことだけだ。今のカイムには、何も目に入っていないし、何も聞こえていない。もしかしたら、マナが後ろを歩いていることすら忘れているかもしれない。

逃げよう。唐突に思った。この好機を逃してはならない。今なら逃げられる。カイムに憎まれる前に逃げ出そう。

マナは必死で考えた。ただ走って逃げたのでは捕まってしまう。いくら上の空だからといって、そんな簡単な手が通用するはずがない。カイムが追ってこられないようにするには、どうしたらいいだろう……。

考えを巡らせながら、しばらく歩いた。カイムは相変わらず険しい顔をしている。時折、

ドラゴンの名を呼ぶ。応えがないのは、明らかだった。
渓谷地帯をどんどん奥へと進んでいく。マナが生まれ育った石の谷によく似た地形だった。黒く口を開けている洞窟が、マナの目に留まった。閃くものがあった。マナはそっと足許に視線を移す。目的のものはすぐに見つかった。何といってもここは渓谷なのだ。
マナはカイムの腕を掴んだ。
「ドラゴンの声がする！」
カイムの足が止まった。
「こっち！　早く！」
カイムの腕を強く引っ張る。マナと違って、カイムは人の心を読む力がない。契約者同士で声のやりとりはできても、隣にいるマナの心の中は読めない。だから、マナの嘘に気づかれる恐れはなかった。
「この中から聞こえたの。確かにドラゴンの声だった」
マナは先に立って洞窟の中に入った。洞窟の高さはマナの背丈より少し高い程度だった。カイムが前屈みになってマナについてくる。
「何か動いた！」
マナが指さす先を見ようと、カイムが身を乗り出してくる。カイムの顔がすぐ手の届くところにある。
「ほら、あそこ！　見えるでしょう」

カイムが闇の中で目を凝らす。今だ。マナは隠し持っていた石を力任せにカイムの目に突き立てた。渓谷にならら必ず落ちている、尖った石。

カイムの横をすり抜け、走った。洞窟を飛び出し、さらに走る。石ころだらけの地面に何度も足を取られそうになりながら、それでも走った。今度こそ逃げなければ。大丈夫、きっと逃げきれる。追いかけてくるはずがない。片眼を潰したのだから。

目を潰した。カイムの目を……。なぜだか泣きたくなった。カイムの目に尖った石を突き立てた。ブレスレットを手首に嵌めてくれたときの優しい目。なのにわたしは……。

喉の奥が引きつるように痛んだ。声を上げて泣きたいと思った。

カイムは絶対にわたしを許さない。憎まれたくなかったのに、憎まれても仕方のないことをしてしまった。

いつの間にか、本当に声を上げて泣いていた。泣きながら走っていた。苦しくて悲しくて、泣き叫んだ。

どれくらい走り続けただろう。マナは足を止めた。目の前は崖になっていた。下は目も眩むほどの谷である。落ちたら、間違いなく死ぬ。かといって、崖下に降りる道も、崖を迂回する道も見当たらない。

引き返すしかない。そう思ったときだった。怒りが迫ってくる。カイムだ。片眼を潰されてなお、追ってきている。憎しみではなく、怒りだった。怒りの塊がどんどん迫ってくる。

ただ、怒りだけではない、何か別の感情も微かに感じる。なんだろう、これは。

しかし、それ以上考えることはできなかった。カイムがすぐそこまで来ている。もう憎まれるのはいやだ。

憎まないで。わたし、死ぬから。お願い、憎まないで。

足音が聞こえた。カイムがいる。手を伸ばしてくるのがわかる。

お願い、憎まないで……。

マナは跳んだ。耳元で轟々と風が鳴る。激しい衝撃の後、闇がやってきた。

思い出したくなかった……。マナはきつく目を閉じ、耳を塞いだ。そんなことをしても無意味だ。わかっている。どうせ、ここでは何も見えない。何も聞こえない。あるのはただ静けさと闇だけ。赤い色をした闇。

ずっと忘れていたのに、二度と記憶が戻らないのだろうと諦めていたのに、錆の町でカイムに再会した瞬間、思い出した。自分の犯した罪を。あの恐ろしい怒りと憎しみも。

その事実から逃れたくて、マナは直轄区解放という大義名分にしがみついた。虐げられている人々のために行動していれば、罪人であることを忘れていられる。だから、何が何でも直轄区の鍵を壊さなければならなかった。

なのに。私とノウェが解き放ったのは最終封印だった……。

明命の直轄区でカイムの心を読んでいたのに。カイムの心の中はアンヘルのことでいっぱいだった。アンヘルのために、アンヘルを解放するために、と。どうしてあのとき、その言

葉の意味をもっと深く考えなかったのだろう。

天時の直轄区でセエレの話をきちんと聞いていれば。幼いころと全く変わっていないセエレを見るのが苦痛で、耳を貸さずにあの場を離れてしまった。その後で戦ったジスモアという男は何か知っている様子だったけれども、心を読み取る前に自ら鍵を壊して消滅した。

忘れるな。おまえの罪を忘れるな。

カイムにあれほど言われたのに。忘れてしまっていた。それどころか、十八年前と同じ言い訳をしたのだ。私は何も知らなかった、と。

炎の中に消えていくカイムとアンヘルを見た瞬間、マナの中で何かが壊れた。重みに耐えかねて、何かが押しつぶされるのがわかった。もうカイムとアンヘルは、世界の崩壊を止めてくれた二人はいない。これで世界は終わる。多くの人々が死ぬ。見たくない。直視できないと思った。

何がいけなかったのだろう。どこで間違ってしまったのだろう。私が良かれと思ってしたことは、必ず悪い結果に終わる。十八年前もそうだった。正しいと思っていた行為は罪だった。そんなつもりはなかったのに。私はただ……ただ、愛されたかっただけなのに。

マナ、と呼ぶ声を聞いた。なぜ聞こえるのだろう？　ここに誰かの声が届くはずはないのに。それとも、空耳だろうか。

違う。やっぱりノウェの声だ。あの声を聞き間違えたりしない。いつもまっすぐな視線を向けてきたノウェ。その視線とは裏腹に、彼の心はいつも迷い、悩み、揺れていた。ドラゴ

ンに育てられたという複雑な生い立ちのせいかもしれない。不安定な心を抱えながらも、彼はまっすぐに前を向こうとしていた。その一途さが好ましかった。

直轄区の鍵が毒性を鎮めるものではなく、最終封印を守るためのものだったと知ったときも、決してマナを責めようとはしなかった。あんたの口車に乗せられて俺は間違った行いに手を染めたと、そう罵ってきても不思議はなかったのに。口に出さなかっただけではなく、ノウェは微塵もそんな思いを抱いていなかった。それどころか、セエレがマナを責める言葉を口にしたとき、心の中で庇うことさえした。

それでも、十八年前にマナが犯した罪を知れば、彼はもうまっすぐな視線を向けてきたりしないだろう。宝光の直轄区で再会したとき、彼が口にした言葉は「もう何も言わなくていい」だった。人々にとってマナは希望だった、それで十分だと自らを納得させていた。以来、二度とマナの過去を知ろうとはしなかった。知れば、蔑みの目を向けてしまうとわかっていたのかもしれない。

マナと呼ぶ声はまだ続いている。

耳を塞いだ。それでもノウェの声が聞こえる。戻ってきてくれと叫ぶ声が。聞いているのがつらくて、その声を締め出そうとした。もっと奥へ逃げ込もうと思った。もっと深い闇の中へ。もう何も聞こえないように。

俺は知っている。もう何もかも知ってるんだ！

マナは目を見開いた。知っているのになぜ、戻ってきてくれなどと言えるのだろう。あの

エリスという女騎士の言ったとおり、私は「忌まわしき女」なのに。
あなたが何者なのか知っている、あなたの罪を知っていると、ノウェの声は告げた。聞き間違いではない。知っていると、確かにそう言った。それでも戻ってきて欲しいと。
直轄区で囚われていた人々や寒村の住人たちはマナを必要としてくれた。が、それはあくまで、自分たちに希望を与えてくれる存在として、だ。「聖女」という肩書きのついた女なら誰でもよかった。あのエリスという女騎士が「聖女」と呼ばれていたとしたら、彼女でもよかったのだ。マナ自身である必要はなかった。もちろん、マナもそれは承知の上だった。
ノウェは、はっきりとマナ自身に会いたいと言ってくれた。聖女でもなく、司教でもない、ただマナという人間が必要なのだと。一人の人間として必要とされること。それはマナにとって初めての経験だった。
カイムの顔が浮かんだ。そして、アンヘル。自ら命を絶ったフリアエ。自分が不幸にしてきた人々の顔が、いくつもの悲劇が一度に蘇り、押し寄せてくる。
ごめんなさい……。
謝罪の言葉が生まれた。自分を虐待する母に対して繰り返した言葉、自分を守るための言葉とは違う。
赤い闇の中で、マナは立ち上がった。ノウェの声に向かって歩き出す。手を伸ばす。戻りたい。戻らなければ。罪を償うために。
唐突に明るくなった。周囲の音が、手足の感覚が一瞬で戻った。涙でぼやけた視界の中に、

ノウェの顔がある。
「ノウェ、私……」
それ以上、言葉にならなかった。ノウェが微笑んだ。
「おかえり。マナ」

3

ノウェがすべての真実を知り、マナが元に戻った。が、依然として解決されない問題が横たわっていた。封印なき世界を何処へ導くのか、である。種の書でもそれは語られていなかった。種の書にあったのは、神を屠り玉座を奪還するという、神竜族の企みだけだ。人の世界がどこへ向かうのか、結局のところわからないままだった。
短い沈黙の後、エリスが口を開いた。
「ノウェ、今度はわたくしに手を貸してくださらない？」
「手を貸すって……」
「約束の地と呼ばれる場所へ行きたいの」
「古の墓標と約束の地とでは、ずいぶんと方角違いではないか？」
からかい口調でレグナが口を挟んだ。
「魔物に追われているうちに、ここへ迷い込んでしまっただけです。別に方角を間違えたわけではありません！」

エリスは切り口上で言うと、怒ったように横を向いた。が、すぐに思い出したように言葉を継いだ。

「とにかく。艇が壊れてしまった今、わたくしにはそこへ向かう術がありません」

ばつが悪そうにエリスはレグナに視線を向ける。

「頼りになるのは、あなたのドラゴンだけ……」

エリスの顔色はますます悪くなっている。よほど具合が悪いのだろう。約束の地がどこにあるのか知らないが、その前にどこか休める場所へ降りたほうがいいのではないか。そうノウェが言うと、エリスは強く頭を振った。

「いいえ。わたくしは一刻も早く、その地へ出向かねばならないのです。神官長セエレはすでにそこへ向かっておられますし」

「神官長セエレが？」

ノウェはちらりとマナの横顔を覗き見る。幼いころ、双子でありながら片方は溺愛され、片方は虐待された。その事実が判明してしまうと、マナのセエレに対する態度にも納得がいった。セエレの名が出たことで、またマナは冷たい憎悪を見せるのではないか。

しかし、それは杞憂だった。ノウェの視線に気づいたマナは小さく首を振って微笑んだ。もう大丈夫、と言いたげに。

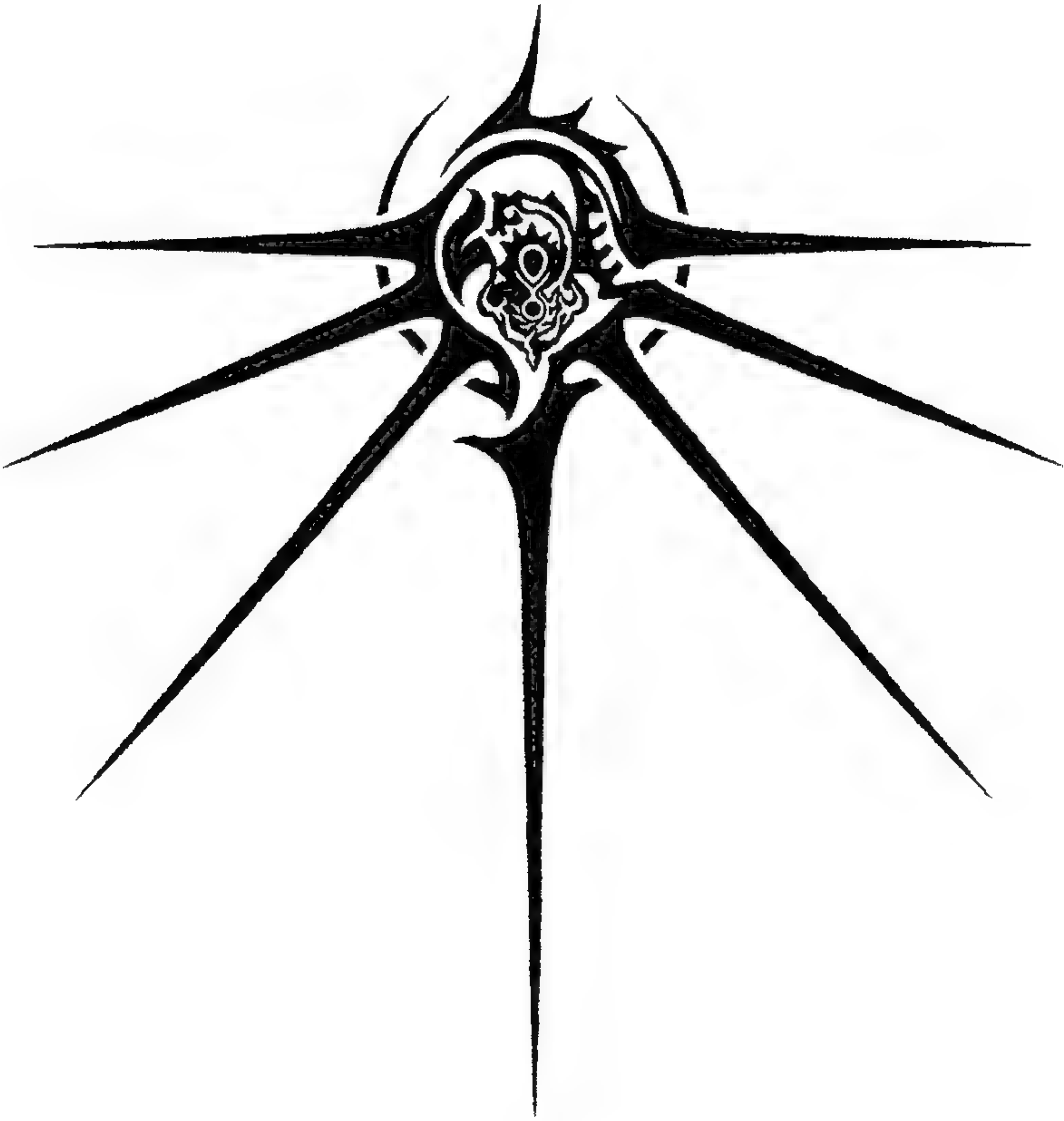
「約束の地……だっけ。神官長がそこで何を？」

「封印の儀式です。女神だった赤き竜が斃れたので、新しい女神が生まれた……らしいの」

「新しい女神を神官長が見つけたのか」
　幼い子供の姿をしているせいで失念していたが、神官長は強大な権限を持つばかりでなく、自身も強大な力を備えている。逆に言えば、力無き者では神官長にはなれないのである。そして、女神を捜し当てるのも神官長の仕事であると聞いている。
「再び封印を施せば、世界は元の姿に戻るのか？」
「ええ。ですから、わたくしは急ぎ約束の地へ赴き、神官長を助けて差し上げなければならないのです」
　土気色の顔で、苦しげに息を吐きながら、それでもエリスは神官長を助けるという。昔からそうだった。エリスは人一倍、世界を守る者としての自覚が強かったと、ノウェは思い出す。
「約束の地か。よかろう」
　レグナが翼を広げた。
「ありがとう。恩に着るわ。約束の地の場所は……」
　知っておる、とレグナはエリスの言葉を遮った。
「鬼娘の所用がなくとも、儂らもそこへ出向かねばならぬのだ」
　ノウェは驚いてレグナを見つめる。これも、血の記憶がレグナに伝えたことなのだろうか。
「約束の地こそが儂らの到達点。彼の地へ着けばわかる」
「わかった。行こう」

封印の儀式を行う場所であるとエリスは言い、到達点であるとレグナが言う。間違いなく約束の地には世界を救うための手だてがあるのだ。ならば、万難を排してそこへ向かわねばなるまい。神竜族の武器としてではない。最終封印を破壊した者として。己の罪を償うために。

傍らでマナが小さくうなずくのをノウェは感じた。



# Ⅶ 解の章

1

不毛の大地という言葉が似つかわしい場所だった。

見下ろせば、赤茶色の岩肌が延々と続いている。灌木はおろか、草一本生えていない。鳥も獣も、魔物の気配すらない。

「これが……約束の地？」

約束の地へ連れていって欲しいと願ったエリスでさえ、戸惑いを隠せないようである。

「聖地と似てるな」

昔、女神の城があった場所も、こんなふうに乾いた大地に囲まれていた。ただ、辛うじて川が流れていたために、ここほど殺伐とした印象はなかった。

「ここは、遥か昔に人間が創られたとされる場所。神の世界に最も近い。生き物が棲むには適さぬ。それゆえ、鳥や獣は寄りつかず、草木でさえも枯れてしまう」

「人が創られた場所に生き物は棲めない……か。なんだか皮肉だな」

「強い力の源となる土地は押し並べて斯くあるもの。生き物の棲む土地を力ある地に変じようとすれば、同時にそこは不毛の地と化すのだ」

五つの直轄区がそうだった。当たり前のように人が暮らしていた土地に、力あるものを、鍵を設えた。ゆえにそこは不毛の地となった……。

やがて岩山の中に赤く口を開けている場所が見えてくる。噴煙が上がり、熱気が感じられ

ることから火山なのだとは思うが、なぜかレグナは敢えてそこへ向かっていた。危険はないのだろうか。

「神官長はまだいらっしゃらないのね。何かあったのかしら」

背後でエリスがつぶやくのが聞こえた。セエレはエリスよりもだいぶ早く大神殿を出発したのだという。セエレもまた魔物に追われて、思いもかけない場所へ迷い込んでいるのではないか。封印なき世界には、異形の者たちが溢れ出す。エリスが案じるのも無理からぬことだった。

「神官長セエレも契約者なんだろう？　大丈夫だよ」

見た目は頼りないけど、と付け加えると、やっとエリスは笑った。が、その声はやはりどこか弱々しい。ノウェにしてみれば、セエレよりもエリスのほうがよほど心配だった。確かに神官長直属の魔術師には、優れた治癒魔法の使い手もいるだろう。しかし、エリスの傷の深さは生半可なものではなかった。それは、ノウェ自身が誰よりも知っている。

「あの岩山の上で下ろしてもらえるかしら。神官長の到着をお待ちしなければ」

「確かに、あそこなら周囲が見渡せるな。誰か来ればすぐにわかるから……エリス？」

エリスの呻き声を聞いたような気がして、ノウェはあわてて振り返る。

「大丈夫……よ。なんでもないわ」

しかし、それが偽りであるのは、誰の目にも明らかだった。レグナが着地したときも、エリスはノウェの手を借りなければ降りることができなかったのである。

「本当に大丈夫なのか？　無理はしないほうがいい」

「心配しないで。ドラゴンの背から降りるなんて初めてのことだから、勝手がわからなかっただけです」

確かにエリスがレグナに乗るのは初めてだったが、その背から降りることくらい子供でもできる。勝手云々(うんぬん)の話ではないのだ。

「これからどうする？　俺(おれ)たちもここで神官長セエレの到着を待てばいいのかな」

「その必要はない」

レグナが翼を畳みながら言う。

「どういうことです？」

エリスがレグナを睨(ね)めつける。

「封印の儀式など要らぬ」

「なんですって！」

色めき立つエリスを無視するかのように、レグナはノウェのほうへと首を向けた。

「神を屠(ほふ)れ。それが儂(わし)らの最終目的だ」

事情を知らないエリスが唖然(あぜん)とした顔になる。マナはすでにノウェの心の中を読んだのだろう。静かな表情でレグナの言葉を聞いている。

「そもそも封印とは、神が人間の世界に干渉するために創り上げたもの。その神がいなくなれば、封印など必要なくなる。そこの鬼娘が女を捨て、女神とやらになる必要もな」

今、レグナは何と言った？　訊き返そうとしたが、悲鳴にも似たエリスの声がそれを遮った。

「やめて！　それ以上言わないで！」

泣き出しそうな顔でエリスが叫ぶ。もう訊き返す必要はなかった。

「エリス……」

「知られたくなかったの。ノウェだけには。オシルシが出た女は……女神になってしまったら、もう女ではないようなものだから」

死人のように青ざめたエリスの顔色の理由が、肩を貸さなければ立ち上がることさえできなかった理由がわかった。封印の儀式を終えていなかったとしても、オシルシそのものが激しい苦痛をもたらす。

封印の女神となった者の苦痛がどれほどのものか、今のノウェは知っている。古の墓標の中で、己の前身である女神フリアエの苦しみをまざまざと見せつけられた。見ただけではない。実際に、感じた。また、彼女が女神として召還されたことによって、兄であるカイムもまた苦しんだことも知っている。

ある日突然、大切な家族が生きながらにしていなくなるのだ。死んだわけではない、二度と会えなくても生きていることに変わりはないのだからと、そんな言葉で無理矢理に自分を納得させるしかない……。

「神を屠れば、封印は要らなくなるんだな？」

「然り」

ならばやってみる価値はある。封印さえなければ、女神という名の人柱も要らない。一人の女が苦しみと絶望のうちに一生を終えることも、その家族や恋人が嘆き悲しむこともなくなるのだ。

「神を屠るなんて……そんな危険なことはやめてちょうだい」

エリスがきっぱりと頭を振った。

「わたくしなら覚悟はできています。本当なら、十八年前にわたくしは女神として召還されるはずでした。でも、赤き竜がわたくしの代わりに女神となってくれたから……」

「十八年前？　エリスはまだ赤ん坊じゃないか！」

封印がもたらす負荷のせいで、女神の命は一様に短い。まして体力のない赤子が封印につながれたとしたら、長くは生きられないだろう。前神官長が赤き竜の申し出を受けたのは、それを危惧してのことだったのかもしれない。

「わたくしは、本来の役目に戻ります。ここでわたくしが逃げては、十八年もの間、わたくしの代わりに苦しんだ赤き竜に申し訳が立ちません」

「女神になんかなる必要はない！　封印なんて、あるべきじゃないんだ」

人の命を贄とした世界など、間違っている。人はそんなことのために生まれてくるわけじゃない。

「エリスが女神として生まれてきたというのなら、俺は神を屠る者として生まれてきた。だ

から……なってみせるさ。神竜族の武器にでも何でも」
　人間ではない自分がオローに拾われ、人間の世界で人間として生きてきたことに意味があるとするなら。おそらく、人間の世界で得た唯一とも言える友を救うためだ。
「レグナ。神を屠るために、俺はどうすればいい？」
　神と戦うための方法はレグナが知っているに違いない。アークドラゴンたちに選ばれ、その名と理性と血の記憶を与えられたレグナならば。
　乗れ、とレグナが再び翼を広げた。
「待って！　わたくしも連れていってちょうだい」
　レグナの背に乗ったノウェにエリスが手を差し伸べる。
「わたくしには見届ける義務があるわ」
　私も、とマナが進み出る。
「きみについていきます」
　やれやれ、と呆れたようにつぶやいたものの、レグナは二人の申し出を拒まなかった。

　レグナが次に降り立ったのは、あの火口に似た赤い穴の底だった。降りてみると、火山によく似ていながら、異なるものだとわかった。穴は思った以上に広い。その中央には、白い巨大な球体があった。
「これは……まさか、十八年前に現れた再生の卵？」

「鋭いな、鬼娘」
これが再生の卵なのか。神が人間を殲滅(せんめつ)するために創り出した道具のひとつ、だ。
「人間どもが再生の卵と呼ぶもの、骨の棺(ひつぎ)だ。中に入った者を劇的に進化させる。それがこれの役割のひとつ」
今ひとつは、とレグナが言葉を続けた。
「骨の棺に入った者は、神の手に触れることができる」
「神の手?」
「異なる時空の存在ゆえに、神がこの世界に直接干渉できないことは知っておるな?」
ノウェはうなずいた。だからこそ、十八年前、神はマナという依代(よりしろ)を必要としたのだ。
「封印が消え、時空に裂け目ができれば墓標の門番たちはこちらの世界と神の世界とを行き来することができる。が、玉座にある神は裂け目を通り抜けることができぬ。あまりにも強大な存在ゆえに」
「もしかして……神の手だけがあちらとこちらを行き来できるということか?」
「然り。ゆえに神の手をたどれば、こちらの世界の者であってもたやすく神の世界に到達できる。時空の裂け目を通ってあちらへ渡るよりも早い。この骨の棺は神の世界への入り口、神の許(もと)へ至る近道なのだ」
中に入った者を劇的に進化させ、かつ神の許への近道を開くのが骨の棺。わかった。レグナが何をさせようとしているのか。

「俺が、この中へ入ればいいんだな」
確かめるまでもなかった。レグナの答えはひとつしかない。然り、と。
「それによって、おまえはさらなる力を得るだろう」
「わかった」
白い球体はひたすら沈黙を守っている。生物を進化させるような強大な力を持つとは、とても思えない。が、これは紛れもなく神の創りし道具、神の玩具(がんぐ)なのだ。
「待って。何かいやな気配を感じます。これは摂理に外れたもの……」
球体をじっと見つめていたマナが眉(まゆ)をひそめて言う。エリスが青い顔をさらに青くする。
「やめてちょうだい、ノウェ。こんな得体の知れないものの中に入るなんて」
口々に反対する二人をレグナは鼻で笑う。
「摂理など、とうの昔にこの世界から失われておるではないか。異形の者が出現する世界に摂理があると思うか？」
レグナの言うとおりだ。もはや世界に摂理があるとは思えない。それほどまでに世界は歪(ゆが)み、急速に崩壊へと向かいつつある。その世界をあるべき姿に戻せるのなら。神の軛(くびき)から解き放つことができるなら。
「案ずることはない。種の書が語るのは予言ではない。絶対の真実なのだ。行け！」
ノウェは球体へと歩み寄った。白い表面へと手を伸ばす。ふと球体が震えたような気がした。動くはずなどないのに……。

そう思った瞬間、すさまじい力がノウェを襲った。触れようとした手に痺れが走り、体が浮き上がった。弾き飛ばされたのだと気づいたときには、背中から地面に激突していた。痛みが背から全身へと一気に伝わった。

やっとの思いで起き上がったノウェは、骨の棺が激しく振動しているのを見た。白い球体は膨れ上がり、宙に浮いた。骨の棺が暴走している。神の悪意がはっきりと伝わってくる。

「危ない！」

暴走した球体がマナとエリスめがけて落下し始める。マナがエリスを突き飛ばした。咄嗟にノウェは走った。あの球体から、神の悪意からマナを守らなければ！

「マナ！」

しかし、間に合わなかった。白い球体は不規則に振動しながらマナを呑み込んだ。

2

骨の棺を前にしたとき、すでにマナは気づいていた。神の気配が球体の中から伝わってきたのだ。それは十八年前、マナの中にあったものと寸分違わぬものだった。

骨の棺がノウェを拒んだとき、求められているのは自分だと悟った。だから、エリスを突き飛ばした。彼女を巻き込んでしまわないように。

骨の棺に包まれた瞬間、神を感じた。十八年前、孤独なマナの心に入り込み、温かさで満たしてくれた「あの方」を。

ええ、覚えています、あなたを……。温かくて、優しくて、私は幸せだった……。

新しい世界を見せてやろう、と神は言った。おまえが孤独だったのは、この世界が悪しき姿に歪められているからだ、と。

愛されたいか、優しい母が欲しいか、と神はマナに問いかけた。だから、欲しいと答えた。ならば我が意志に従え、我が意志を宿せ、と神は命じた。そして、マナは依代となった。神の人形となった。

あなたは私に罪を教えた。でも、あなたのせいにするつもりはない。選んだのは私。あなたの人形となり、罪に手を染めることを私は自ら選んだ。それは私の罪。

神の手が伸びてくるのがわかった。今一度、我が意志を宿せという声が聞こえる。十八年前と同じ温かさがマナを包み込もうとする。

マナは自ら神の手を掴む。逃さないように。これが最後の機会だとわかっていた。だから、逃すわけにはいかない。神の手を自らの内に抱え込んだ。

私はもうあなたの人形じゃない！　私は二度と、あなたにこの身を預けたりしない！

己の内にあるすべての力を解き放った。この世界でただ一人、神を宿し得た力を、神が依代として認めるほどの力を。

私にしかできない……。これが私の使命。

神の悲鳴を聞いた。すさまじい悪意が炸裂し、マナの意識を切り刻む。

いいえ。離さない。決して離すものか！

持てる力のすべてを神の手へと向ける。骨の棺が膨れ上がり、粉々に砕ける。マナの力とともに砕け散っていく。渾身の力でマナが引き裂いた神の手とともに。

3

何が起きたのか、ノウェにはわからなかった。強烈な光と風が荒れ狂い、そして消えた。
「恐ろしい小娘だ。神の手を断ち切りおった。さすがは神の依代と言うべきか……」
レグナのつぶやきでノウェは我に返った。跳ね起き、辺りを見回す。
「マナ！」
骨の棺があった場所に、マナが倒れていた。駆け寄り、抱き起こす。胸に耳を押しつける。弱々しかったが鼓動を感じた。マナは生きている。
「目を開けてくれ！　マナ！」
幾度も名を呼んだ後、ようやくマナの瞼が動いた。うっすらと目を開け、マナが微笑む。
「私はもう……人形じゃないわ」
「ああ」
ノウェはうなずいてみせる。安堵感でそれ以上言葉にならなかった。
「オシルシが消えた……？　どういうことなの」
エリスの声に、ノウェは驚いて振り返る。エリスは呆然とした面持ちで、両の手を見つめている。その頬に赤みが差していた。死人のようだった顔に生気が戻っている。

「ねえ、どうなっているの？　わたくし……わたくしは……」

「神の手をマナが断ち切った。これで、神はこの世界に干渉する術をなくしたってことなんじゃないのか」

神はその強大さゆえにこの世界に直接干渉することができないとレグナは言った。封印が保たれている状態では依代を必要とするし、封印がなくなっても、こちら側に来ることができるのは、その「手」だけなのだと。

「じゃあ、封印はもう必要ない……。結局、わたくしはあの女に助けられたことになるのね」

エリスがちらりとマナに目をやった。これまでのことを思い起こせば、礼を言うのは抵抗があるのだろう。口を開きかけては目を逸らし、視線を戻しては口を噤むというのをエリスは繰り返していた。

「これで人間は神の軛から解放されたんだ。そうなんだろう？」

答えを求めようとノウェはレグナを見やった。が、レグナは答えない。どうしたのだろう。

「小僧、儂とともに来るのだ。急がねばならぬ」

「どこへ？」

神がこの世界に干渉できなくなった今、封印も再生の卵も消えた。人間は神の軛から解放されたのだ。今更、どこへ行こうというのか。

「種の書にはまだ先があるのだ。時空の裂け目が消える前に、あちらの世界へ渡らねば」

「レグナ？」

「忘れたとは言わせぬぞ。おまえは神狩りの剣。我ら神竜族の武器」

それはわかっている。だが、もはや神を倒す必要があるのか。ふたつの世界が分かたれた今、これ以上の戦いに意味があるとは思えない。少なくとも人間の側には、何の意味もないはずだ。

「待ってちょうだい。時空の裂け目が消えるって言ったわね？　あちらへ渡ってしまった後、裂け目が消えてしまったら、ノウェは二度と戻ってこられないのではなくて？」

知れたこと、とレグナが嘲笑う。

「そんな！　わたくしは認めないわ！」

エリスの抗議をレグナは黙殺した。

「小僧、行くぞ」

俺は何のために戦っていたのだろう？　神竜族のためか？　違う。自分が人間ではないと知り、神竜族の武器として創られた存在だと知っても、戦いの目的は常にひとつだった。人間のためだ。苦しむ人々のために戦った。それが正しいと信じて。

「俺は行かない。この混沌とした世界に残された人々のために、まだ為すべきことが残っていると思う」

人は弱い。醜い。嘘をつき、裏切る。妬み、陥れる。それでも、人は生きようとする。己の弱さを克服し、正しくあろうとする。己の嘘に苦しみ、裏切りを悔いる。償おうとする。それが人間の強さだ。

人間の世界で生きていきたい。たとえ自分が人間でなくても。
「俺は、彼らとともにここで生きていきたいんだ」
「愚かな。それほど女と離れ難いか」
そう吐き捨てると、レグナは威嚇するように翼を鳴らした。
「悲願が成就するときが来たのだ！　もはや何者にも止められはせぬ！」
レグナが吼える。
「我が同胞たちよ！　目覚めよ！　時至れり！　我が許に集え！」
幾多の咆哮が返ってくる。大気が激しく震えるのがわかる。見上げれば、白い翼が空を覆い尽くしている。アークドラゴンたちだ。いったいどこにこれほどの数がいたのかと、呆れるほどの大群だった。
嘘でしょう、とエリスが震える声でつぶやく。しかし、ドラゴンたちの咆哮と翼の音とがそれをかき消した。
アークドラゴンたちの力は知りすぎるほど知っている。しかも、あれだけの数だ。彼らがその気になれば、世界を破壊することくらいたやすい。いやがる者を強引に連れ去ることさえも。彼らの力の前に、果たして自分はどこまで抗えるだろうか……。
そこまで考えたときだった。今度は大地が鳴動した。空を覆っていた白い翼を地上からの光が貫く。いったい何が起きたのだろう。アークドラゴンたちが動揺しているのがわかる。
幾筋もの光が白い翼を墜としていく。

地上にいる何かに、アークドラゴンたちが反撃を始める。ここからでは見えないが、戦いが始まったらしい。

「よかった。間に合ったみたいだね」

穴の縁から声がした。神官長セエレだ。

「ゴーレム、急いで」

大地が揺らいだ。巨大な岩が降ってくる。いや、岩ではない。石の巨人だ。と言っても、宝光の聖壇で見たノームの本体と全く別種のものだが。

「エリス、いったいこれは？　ゴーレムって？」

「神官長セエレの契約相手よ。大神殿を守護するゴーレムの軍団があると聞いたことがあります。実際に目にしたことはないけれど。もしかしたら、ドラゴンたちと戦っているのは、ゴーレムたちではないかしら」

エリスがゴーレムの腕に乗っているセエレに向き直る。

「お待ちしておりました、神官長。状況は混乱の極みです」

「……みたいだね」

セエレが空を仰ぎ見る。アークドラゴンたちの戦いはまだ続いていた。あれだけの数のドラゴンが苦戦しているのだから、ゴーレムたちはかなりの大軍団に違いない。エリスよりもずいぶん早くに大神殿を出たにも拘わらず、セエレの到着が遅れたのは、ゴーレムたちを集めて移動したからだろう。

「神話が現実のものになろうとしているんだ……」
その神話が決して人間にとって喜ばしいものでないのは、セエレの口調で知れた。
「あなたは知っているのね。セエレ、教えてくれるかしら」
マナがセエレに問いかけた。そこには以前のとげとげしさも、冷たさも感じられない。
「ドラゴンたちは何をしようとしているの？」
あくまで人間が記した神話の中の話だけど、と前置きしてからセエレが語り始めた。
「ドラゴンたちには、太古の神竜族の記憶が受け継がれてるんだ。その記憶が彼らを駆り立てている」
「血の記憶か……」
古の墓標で知った言葉をノウェが口にすると、セエレはうなずいた。
「ドラゴンたちは、神を殺そうとしている。自分たちが世界を支配するために。神に取って代わるために」
それはノウェが知る種の書の内容と合致する。確かに、再び玉座に就くことが神竜族の悲願だと聞いた。
「なんですって？　ドラゴンが神を？　そんなことが可能なの？　だいたい、そのとき世界はどうなるの」
「わからない。でも、竜族は人間を蔑んでいる。この世界には必要ないと思っている。ということは、彼らの支配する世界は、人間にとって決して居心地の良いものではないはず」

「では、蒼き竜はノウェを騙していたわけですね。あたかも人間のためであるかのように言いながら、その実……同胞たちによる世界の支配しか考えていなかった」

レグナはドラゴンだ。それも神竜族の遺志、血の記憶を持つ者。だから、ある程度はノウェも理解している。レグナが己の同族のために動くであろうことは。ただ、ここに残りたいという自分の願いは尊重してくれると思っていた。レグナは自分にとって父だ。レグナにとっても自分は息子に違いないと信じていた。なのに……。

いや、自分の言い方が足りなかったのかもしれない。これまでレグナと意見が対立したことなどなかった。口論になったことすらない。だから、お互いの考えをうまく伝え合えなかっただけで。もう一度、言葉を尽くせばきっとレグナはわかってくれる。レグナは十八年もの歳月を共にしてきた家族なのだ。

レグナはいつも自分を導き、助けてくれた、とノウェは思い出す。自分の声に必ず応えてくれると信じていたから、マナを助けるために崖下に身を躍らせることができた。天時塔の最上階から落下しようとしていたノウェたちを拾い上げてくれたのもレグナだった。古の墓標に導いてくれた。あの中で真実を、十八年前に何が起きたのかを知ることがなければ、おそらくマナを取り戻せなかった……。

ノウェはレグナを呼んだ。アークドラゴンたちの咆哮にかき消されてしまわないように、声を限りに叫ぶ。

漆黒の翼が舞い降りた。幼いころから馴染んだ色ではないせいか、その姿にはまだ違和感

がある。それでも、レグナはレグナだ。
「決心がついたか」
「レグナ……。俺は行かない。本当は、レグナにもここに残って欲しいとは思う。でも、レグナが彼らとともに行くと言うなら、止めない」
レグナがじっと見下ろしてくる。しかし、その口からはノウェが望む言葉は出てこなかった。
「今一度言う。儂らとともに来い。おまえは人間ではない。儂らと同じ側の者。ここに残る必要などどこにある？」
なぜ、レグナはわかってくれないのだろう。もどかしくてたまらない。誰よりも自分の理解者だったはずのレグナが、今は全く理解を示してくれない。わかってもらえるのが当然だったから、余計にもどかしい。
「やれやれ。危険を冒して古の墓標に誘ってみたが、全くの無駄であった。種の書を知れば、おまえは確実に儂らの側に来ると思うていたが。とんだ見込み違いであったわ」
下等な人間どもに染まったか、とレグナが蔑みの言葉を吐く。
「その人間の俺を育ててくれたのは誰だ。八年もの間、俺を手許で育ててくれたじゃないか。俺が父さんに拾われた後は、騎士団居住区までいっしょに来てくれた。窮屈な思いをしながらも、ずっとそばにいてくれた」
「勘違いするな。儂は神竜族の武器を育てた。剣を鍛えるために最善の道を選んできた。そ

れだけのことだ」
「嘘だ！」
レグナもオローも共に父だった。共に同じ愛情を示してくれた。
「あんたは俺の父なんだ！　人も竜も関係ない。俺はあんたの息子だ」
「くだらん」
必死で差し伸べる両手を、レグナはその翼で振り払った。ずっと自分を守ってくれた翼に打ち据えられ、ノウェは無様に転がった。悔しさが胸を灼く。
「まだわからぬか！　おまえは所詮、一振りの剣に過ぎん。ただの道具であるおまえに、自らの道を選ぶなど許されることではないのだ」
「道具……。そんなふうに俺を見ていたのか！」
ずっと父だと思ってきた。ただ血のつながりがないだけで、気持ちの上では父と子だと信じてきた。その思いを否定され、踏みにじられた。
「なんだ、その目は。たかが道具の分際で、太古の昔より定められた真実を覆そうとするか？」
「ああ。覆してやるさ」
ノウェは剣を抜いた。
「俺は道具なんかじゃない！」
怒りを込めて、剣を振り下ろす。かつて父であったはずの、今の今まで父だと思っていた

相手へ。が、固い鱗に阻まれ、剣が弾き返される。
「人の身の悲しさよ」
嘲りの言葉とともに、レグナが舞い上がった。
「天からの炎には為す術もあるまい」
レグナの炎がノウェの足許を抉る。直撃ではない。しかし、それはノウェの体を吹き飛ばすだけの威力を十分に備えていた。地面に叩きつけられ、ノウェは呻いた。身体の痛みよりも、屈辱感が己を打ちのめそうとしている。
「ノウェ！」
やっとの思いで身を起こす。駆け寄り、支えてくれるマナの手が温かい。それだけに、己の不甲斐なさが胸を刺した。
「ずっと、救世主と呼ばれるのがいやだった。でも今は、ただの人間と呼ばれるのがこんなにも悔しい。なれるものなら、救世主になりたいよ」
人と竜との狭間で揺れ動き、己の出自がそのどちらでもないことを知らされた。が、それでも今の自分の力は竜の力に敵わない。それが悔しい。
「あなたを……救いたいんだ」
ずっと守られる存在だった自分に、初めて守るということを教えてくれたひと。そのひとを守りたい。
マナが微笑んだ。この笑顔を、自分を捉えて放さない赤い瞳を、守りたいと強く願う。

互いの唇が重なった。時が止まる。静けさだけがある。
このひとを守りたい。
このひとにつながるすべてのものを守りたい。
このひとが存る世界を守りたい。
何かが。何かが己の内でひとつに解け合うのを感じた。これまで決して意のままにならなかったあの凶暴な力と、何か別の力が。
……マナの力だ。
神の軛(くびき)から人の世界を解き放った強大な力。それが今、ノウェの内に眠る原初の力に秩序と摂理とを与えた。
目を開く。間近に赤い瞳が、ある。マナの手を取る。
あなたがくれた力で、あなたと世界とを守ろう。ここへ至るまでに重ねたいくつもの罪が罪で終わらないように。
「マナ……」
ゆっくりと指を解く。種の書が定めたものを覆し、ここへ戻ってくるために。
足が大地を離れた。背に翼の力を感じる。自分を竜だと信じていた幼いころ、何度試みても叶(かな)わなかった願いが、今、光の翼となって空へと導く。
「目覚めたか。神を屠るその力が」
耳慣れた声が降ってくる。その声へ向かってノウェはひたすらに飛んだ。地上が遠くなる。

「レグナ？　レグナなのか？」
赤い空の上で、倒すべき存在と対峙したノウェは瞠目した。
「その姿は……」
人の言葉を学び始めたばかりのころ、オローが与えてくれた絵本の中に、神と悪魔の戦いを描いた挿し絵があった。曲がりくねった二本の角、猛禽を思わせる巨大な翼を生やし、長い尾を持つ悪魔。目の前にいる者、かつて蒼き竜であり、黒き翼の竜であった者の姿は、その悪魔に酷似していた。唯一異なるのは、神話に出てくる悪魔が漆黒の姿をしていたのに対して、目の前の翼は白銀の色に輝いていた。
おそらく、神と対立する強大な存在を人は悪魔と名付け、悪しき者と見なしてきたのだろう。神というものが信仰の対象であったがゆえに。
「この姿こそ、神竜族の意思でもあり、それを継ぐ者の真の姿だ」
共に過ごしたころのレグナとは、あまりにもかけ離れていた。もはやお互いに、決して歩み寄れない場所へ至ってしまったのだと思い知らされる。
「最後にもう一度訊くぞ。儂らとともに行く気はないか？」
「本当は、ただの父と子として、ずっといっしょにいたかった。でも、俺は行かない。俺は人間として生きていく」
やはりな、とレグナがつぶやく。
「よかろう。我が道を行きたいのなら、儂を倒せ。儂を超えて行け！」

叫ぶが早いかレグナは翼を広げ、身を反らせた。幾本もの雷がノウェに向かって撃ち下ろされる。これまでのレグナの力とは桁違いだ。

慣れない翼を操り、雷を避ける。避けた先を炎が襲う。容赦なく繰り出される攻撃に、ノウェは未だ割り切れない自分の心に気づく。防戦一方なのは、まだ迷いがあるからだ。

やはり戦いたくはない。振り返れば、レグナとともに過ごした時間は幸福なものだった。とりわけ、あの静かな渓谷で暮らした日々は。何も畏れず、何にも悩まされず、ただ奔放に大地を駆けた。その行き着く先に、悲しい戦いが待ち受けているとも知らずに。

レグナとの日々を、こんな形で終わらせたくはない。互いの命を取り合うことなく、ただ訣別するだけでは済まないのか。どうしても斃さなければならないのか。

ノウェに向けられた雷が、行き場を失い大地を打ち砕く。雷は野山を焦がし、川を干上がらせる。戦いが長引けば、地上に生きる者たちが傷つく。ためらえば、それだけ命が失われる。

俺が戦っているのは何のためだ？　マナを、世界を守るためじゃないか！

これ以上、迷うわけにはいかない。ノウェは剣を振りかぶった。握りしめる手から剣の柄へと、力が注がれていくのがわかる。ただの長剣であるはずのそれは、振り下ろすと同時に光の刃に変じた。

唸りを上げて光の刃がレグナに襲いかかった。翼をかすめ、鉤爪のついた脚を切り裂く。

「もう少し素直かと思っていたが。誰に似たのか」

不愉快そうにレグナは言い、翼をはためかせた。今度は衝撃波が襲いかかってくる。身を低くして避け、剣を突き上げながら上昇する。いつの間にか、翼の扱いにも慣れていた。わざわざ練習するまでもなく、念じるだけで自在に飛ぶことができた。

レグナの片翼を剣が貫いた。怒りの声とともに炎の矢が吐き出される。左肩に激痛が走った。避けきれなかったのだ。それでも剣を手にノウェは飛んだ。

相手を傷つけても、自分が傷ついても、心に痛みを覚えた。レグナの炎は、自分の剣は、互いへと向けられるべきものではない。同じものを敵として戦っていたはずだったのに、なぜ、こんなことになってしまったのか。

「レグナ……俺はあんたを倒すしかないのか」

父と子であり続けたとしても、いつか別れの日はやって来る。ずっと共に過ごしたいと願うのは甘えでしかない。それはわかっている。ただ、こんな形で巣立ちの時を迎えたくはなかった。できることなら、ごく平凡な父子として別れていきたかった。

「この儂を倒すだと？　笑止」

ノウェの逡巡は、嘲笑と炎とで返される。かいくぐって飛ぶ翼が高熱に晒されるのがわかる。それでもノウェは飛んだ。レグナに光の刃を向けながら。

その刃が白銀の翼に届いたかに見えた瞬間、視界から色彩が消えた。確かに剣が翼を貫いたと思ったのに、返ってきたのは妙に頼りない手応えだけである。手にした剣から光が、そして力が失われるのがわかった。

「ここは……?」

いつの間にか、ノウェは色彩の消え去った空間にいた。赤い空も、眼下に見下ろしていた大地もない。ただレグナと自分がいるだけの、奇妙な世界だ。

レグナが笑っている。が、その声は聞こえない。ここには音も色彩もない。力任せに剣で斬りつける。やはり手応えはない。にも拘わらず、炎がかすめていくと熱感があった。衝撃波に触れた翼に痺れるような痛みが走った。

危険だ。何がどうなっているのか、さっぱりわからないが、ここから脱出しなければこちらの身が危ういことだけはわかる。ノウェは辺りを見回した。

「無駄なことよ。ここは儂の支配下にある。もうこれ以上、逆らうな」

目の前にいるレグナからではなく、どこか遠いところから声が聞こえてくる。どうやら自分が今、目にしている光景は現実のものではないらしい。何か術をかけられたのなら、急いで解かなければとノウェは焦った。このままでは抵抗らしい抵抗もできないまま、殺される。

翼に痛みが走った。何かが自分を攻撃してきている。ノウェは目を凝らす。と、何もないはずの空間に揺らぎが見えた。

あれか!

その場所めがけて剣を突き立てる。何も手応えはなかったが、唐突に色彩と音が戻った。

赤い空と荒れ果てた大地。術を破ることができたのだ。

レグナが……俺に術をかけるなんて。



苦い思いがこみ上げてくる。やはり目の前にいるのは、父としてのレグナではなく、敵だ。自分を殺そうとしている敵。今度こそ、ノウェの中からすべての迷いが消えた。倒さなければ。人間として生きていくために。

レグナが大きく息を吸い込んでいる。また炎を吐いてくるつもりなのだ。ありったけの力を翼に込めて、ノウェは飛ぶ。

レグナの口から炎の塊が吐き出されようとした、まさにその瞬間。一条の光となった剣がその胸を貫いた。

馬鹿な、と言いたげにレグナの口許が動く。すでに傷だらけの翼がびくりと震えた。曲がりくねった角を戴いた頭がゆっくりと傾く。しかし、勝ったという喜びはなかった。戦いが終わった後にもたらされるものは勝利ではなく、別離なのである。

「お別れだ……。俺を育ててくれて、ありがとう」

落下が始まる。レグナの翼が力を失っていくのが見てとれた。ノウェの剣を胸から生やしたまま、レグナが墜ちていく。

「この期(ご)に及んで……礼か？　間抜けなやつめ」

父に似たな、という微(かす)かなつぶやきが風に流れて消える。敵として戦ったが、自分とレグナはやはり父子だった。そして、レグナも同じ思いでいてくれたのだと、ノウェは悟った。

「レグナ……」

さようなら、とつぶやいたつもりだったが、声にならなかった。白銀の体が大地に吸い込

まれていく。ノウェはただレグナの消えた場所を見つめる。

背中の翼から力が抜け落ちていくのを感じた。自分もまた、ひとつの役目を終えようとしているのだ……。

ノウェは静かに地上を目指した。赤い空が次第に色彩を失う。生き残ったアークドラゴンたちが飛び去るのが見える。彼らは帰還を急いでいるのだ。時空の裂け目が消える前に、自分たちの世界へ。彼らは再び、長い長い時を墓標の門番として過ごすのだろうか。たとえ種の書に記された「真実」が覆されたとしても。

俺も帰ろう。自分を待つひとの許へ、自分の在るべき場所へ。

地上に降り立つと、翼は完全に消えた。仰ぎ見れば、空が再び蒼さを取り戻している。以前と少しも変わらない空の色。世界は再生したのだ。

朝の冷気が肌を刺した。空はまだ仄暗(ほのぐら)い。昼は人の出入りが絶えない大神殿の正門も、今はひっそりと静まりかえっていた。
「どうしても……行くのか」
女々しいとわかっていても、訊(き)かずにいられなかった。ええ、とマナがうなずく。
「そうだよな。ごめん。今更……」
マナによって神の手が断ち切られ、血の記憶を持つ蒼(あお)き竜も斃(たお)れ、墓標の門番たちは自らの時空へと帰還していった。世界は新しい秩序を手に入れた。何にも拘束されない、解放された人間たちによる秩序を。
神官長を頂点とした封印騎士団は再編成され、封印ではなく人の世界そのものを守護する

ための組織となった。以前のように民衆に圧政を強いる組織ではない。民衆とともにあり、民衆を守るためにある。まだ組織に名はないが、その旗印は新たなものへと変わった。

反逆者として封印騎士団を追われたノウェは、再びこの場所に迎え入れられた。神官長セエレがその功績を称えたことにより、露骨に嫌悪や蔑みの目を向ける者はいなくなった。もちろん、反感を持っている者も中にはいるだろう。人間とはそうしたものだ。が、それでもここの一員として、どうにかやっていこうとノウェは考えている。

エリスは相変わらず世界を守る者としての使命感に燃え、日々の任務をこなしている。組織が変わっても、世界が変わっても、エリス自身は変わらないのではないかとノウェは思う。

そして。マナは旅立とうとしていた。ただ一人、贖罪の旅へと。

「カイムに連れられて旅をしていたとき、私にはその意味がわかっていなかった。カイムが私に教えようとしていた贖罪の意味が」

マナの視線がふっと遠くなる。昔を思い出しているのかもしれない。

「あの旅は終わっていないから……」

行かないでくれと頼んだら、必死で引き留めたら、マナはここにいてくれるだろうか。いや、それでもマナは旅立っていくだろう。そして、引き留めてはならないことをノウェは知っている。自分も、マナも、共に罪人なのだから。

「父さんの夢を見たんだ、昨夜」

夢の中で、ノウェはオローに必死で訴えていた。もう一人の父であるレグナを自らの手で

殺してしまった、カイムとアンヘルを殺した、大勢の騎士団員たちを殺した、と。そんな自分が再び騎士団に迎え入れられても良いのか。人々に英雄扱いされて良いのか。

『いつだったか、おまえにも言っただろう？　人は誰でも罪を背負っている。罪を犯さぬ人間などいないのだよ』

『でも……俺の罪はそんなものじゃない』

『だからこそ、おまえは生き延びた。罪を償うためにな。人の一生は背負った罪を償うためにある。誰のためにでもない、自分のために罪を償いながら生きていく』

『俺に償えるんだろうか』

『できる。おまえは俺の息子だろう？　できないはずがないさ』

『父さん……』

『もうひとつ、覚えておけ。人は罰するものではない。人は赦すものだ』

父さんと叫ぶ自分の声で目が覚めた。目覚めても、オローの声が耳に残っていた。オローは確かにここにいたのだと思った。レグナという父を失った自分のために、つかの間、あの世から戻ってきてくれたのだろう。

「俺は、この場所で生きていく」

だからあなたを止めないと、ノウェはつぶやいた。マナにはカイムとの旅の続きが、自分にはここに留まることが贖罪なのだ。

「きみと出会えてよかった」

マナが微笑む。どう応えたら良いのかわからずに、ノウェは目を伏せた。
「さよなら。ノウェ」
マナの後ろ姿が朝靄の中へと消えていく。呼び止めて、もう一度抱きしめたい思いをノウェは必死で抑えつける。
マナは行ってしまった。レグナもいない。ノウェを自由な空へと誘ったあの蒼い翼は、もうない。けれども、決してそれを惜しむまいと思っている。地を這う者として、人間として生きていくと決めた以上。
次第に辺りは明るさを増し、朝靄が晴れていく。ノウェは、ゆっくりと踵を返し、己の責を果たすための場所へと戻っていった。

映島(えいしま)　巡(じゅん)　EISHIMA Jun

1964年8月26日生まれ。福岡県出身。『ZERO』で第4回ジャンプ小説・NF大賞（現ジャンプ小説大賞）受賞。主な著書は『曠野の舞姫』『ドラッグ オンドラグーン　ストーリーサイド』『鋼の錬金術師2　赤きエリクシルの悪魔』（スクウェア・エニックス）など。

GAME NOVELS
# ドラッグ オンドラグーン2　封印の紅、背徳の黒

2005年10月21日　初版第1刷発行

原　作◆PS2ソフト「ドラッグ オン ドラグーン2　封印の紅、背徳の黒」
©2005 cavia/SQUARE ENIX CO.,LTD. All Rights Reserved.

著　者◆映島　巡

発行人◆田口浩司

発行所◆株式会社スクウェア・エニックス
〒151-8544
東京都渋谷区代々木3-22-7
新宿文化クイントビル3階
営　業 03(5333)0832
書籍編集 03(5333)0879

印刷所◆加藤製版印刷株式会社

乱丁・落丁はお取り替え致します。
定価はカバーに表示してあります。

©2005 Jun Eishima
2005 SQUARE ENIX
Printed in Japan
ISBN4-7575-1546-4　C0293

ISBN4-7575-1546-4
C0293 ¥933E
9784757515468
1920293009339
定価：本体933円＋税
SQUARE ENIX

世界に新たな封印がなされてから18年………。
「竜の子」と呼ばれる一人の青年騎士が
反逆者として騎士団に追われていた。
蒼竜レグナに育てられ、
戦死した前封印騎士団長オローを養父にもつ
青年の名をノウェという。
その逃避行が封印に守られた世界に再び波紋を呼びはじめ、
隠された謎が次々に明かされてゆく。
「ドラッグ オンドラグーン2」の完全ノベライズここに完成！

©2005 cavia / SQUARE ENIX CO.,LTD. All Rights Reserved.

